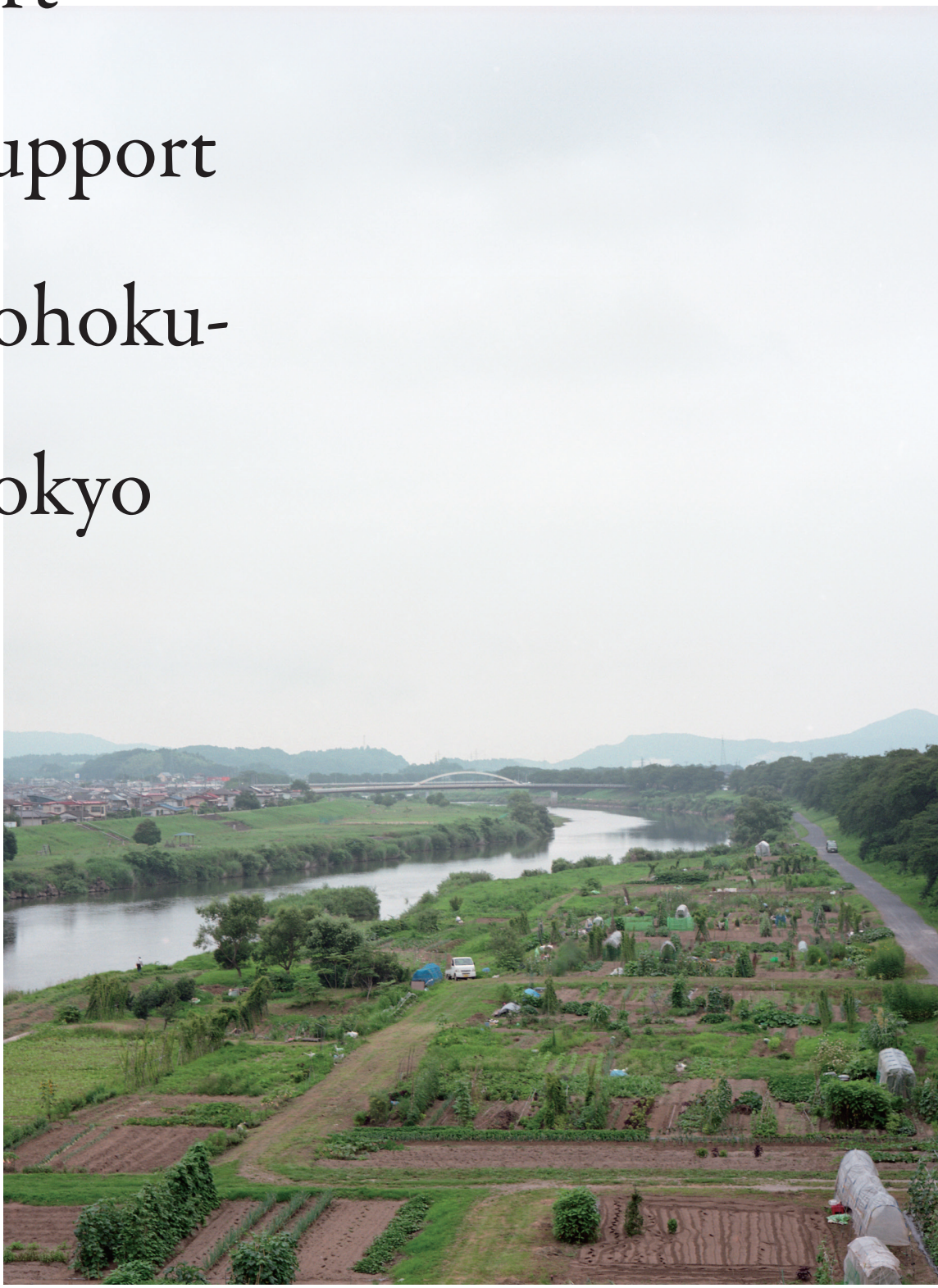
Art Support Tohoku-Tokyo

6年目の風景をきく

東北に生きる人々と重ねた月日



東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業

Art Support Tohoku-Tokyo

6年目の風景をきく

東北に生きる人々と重ねた月日

東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業

はじめに

「いつもそこにある（と分かっている）ものを無意識に取ろうと手を伸ばしてからないことに気づくことってあるだろう、それがここでは人で起こっている。何か困ったことがあったときに（いないと分かっているはずなんだけど）つい、その人に声をかけようとしてしまう。そして、いないことを思い出す。そんなことが毎日続いている」。

岩手県大槌町で聞いた話だ。２０１１年３月11日に発生した東日本大震災によって、大槌町では１２８５名の方々が亡くなった（行方不明者、関連死含む／２０１６年２月１日現在）。震災以前の人口は１万５２７６名（２０１０年度国勢調査）。その比率だけでも被害の大きさが想像できる。だが、どんな数値よりもそのときの言葉は、震災の喪失の意味を強い身体感覚と共に想起させる。

東北の地で生きる人々の肉声に向き合い、日を追って変化する現地の状況に寄り添う。『東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業（Art Support Tohoku-Tokyo／以下、ＡＳＴＴ）』は「被災地」に東京から決まった事業を持ち込むのではなく、時々の変化に応じた「支援事業」を、現地の人々と共に展開することを目指した。

２０１１年７月に立ち上がった本事業は、岩手県、宮城県、福島県の３県を対象とし、震災以前より都内で展開していた『東京アートポイント計画』の手法を用いてきた。東京アートポイント計画は、共催事業としてＮＰＯとアートプロジェクトを実施し、都内に無数の「アートポイント」を生み出すことを目指している。プロジェクトの持続性を支える「事務局」の体制づくりを重視し、その進行に「プログラムオフィサー」が伴走し、事業費だけでなく情報、スキル、ネットワーク等の提供も行う。この手法を反映した本事業では、必然的にパートナーとなった現地の人々と多くの対話を重ねることになった。

本書には、現地でのパートナーとなった７名の声を収録した。インタビューは、アーツカウンシル東京プログラムオフィサーの佐藤李青と嘉原妙、編集者の川村庸子が行った。佐藤は２０１１年６月に東京文化発信プロジェクト室（現・アーツカウンシル東京）に着任し、本事業の立ち上げから関わり、嘉原は２０１５年12月より担当となった。川村は本書の制作で初めて本事業と関わり、インタビュー対象者とは、ほとんどが初対面であった。なお、インタビューには同行していないが、本事業ディレクターの森司は事業の構想と立ち上げから、現在も事業統括を行う。わたしたちの関係性は、自然と収録内容に反映されることとなった。

だが、同時にインタビューという手法は、その関係性に一定の距離を生み出し、それぞれの人々と「出会い直し」の機会をもたらすことにもなった。インタビューでは本事業との関わりに留まらず、震災前後の生活や価値観の変化にも触れている。

本書が震災から５年という節目を記すものではなく、東北の地のこれまでの経験から学び、これからも続く文化的な営みへの新たな関わりの一助となれば幸いである。

佐藤李青



福島県相馬郡新地町



福島県相馬郡新地町



宮城県女川町

岩手県



2016.4.24

釜石市

もくじ

2 はじめに

岩手県釜石市
10 川原康信（NPO法人@リアスNPOサポートセンター 理事）
24 note1 その土地に生きるリアリティ
26 data1 釜石市、東日本大震災から5年の歩み

宮城県仙台市
28 八巻寿文（せんだい3.11メモリアル交流館 館長）
43 note2 東北から思考する

宮城県大河原町
46 水戸雅彦（えずこホール 館長）
60 note3 境界を越えて動く
62 data2 震災直後、宮城の演劇人の動き

福島県会津若松市
64 小林めぐみ（福島県立博物館 学芸員）
79 note4 文化の種を蒔き、芽を育む
82 川延安直（福島県立博物館 学芸員）
96 note5 博物館から、アートに賭ける
98 data3 会津から「福島」への広がり

福島県会西会津町
100 伊藤和子＋三瓶たか（NPO西会津ローカルフレンズ）
114 note6 あっけらかんとした強かさ

116 おわりに 自分の歩幅で当事者になっていくこと

118 「Art Support Tohoku-Tokyo」開催記録 2011-2015



川原康信

かわはらやすのぶ

NPO法人@リアスNPOサポートセンター　理事

1961年岩手県釜石市生まれ。
東京の専門学校を卒業し、東京で
就職後、1993年に釜石市に戻る。
市内で就職、2010年にNPO法人
@リアスNPOセンターの
専属スタッフになる。
http://rias-iwate.net

釜石市の中心部は、震災当日、約6mの津波に襲われた。そこに事務所を設けていた@リアスNPOサポートセンターは、市内で数少ないNPOであったため、震災後外部からの問い合わせは、ここに集中した。川原康信さんは、震災直後から交流を持ち、この5年間一緒にアートプロジェクトをやってきたパートナーであるが、震災以前はまちづくりを行ってきた人だ。震災をきっかけに出会ったアートは、どのようなものだったのだろうか？その関係は、わけが分からないままスタートし、現在もかたちを変えながら続いている。

震災以前

震災前の暮らし

震災前は、釜石市内の事業協同組合で働いていました。地方の商店街はどこも疲弊していますが、うちのNPOの代表理事の鹿野と「このままだと、どんどん店が潰れてしまう」と話していたんです。そこでまちに賑わいを取り戻すためには、自分たち若手が自発的に何かやったほうがいいのではないかという話になり、2003年に4人のスタッフで、NPO法人@リアスNPOサポートセンター（以下、@リアス）*1を立ち上げることになりました。その頃、岩手県の増田寛也知事がNPOを推進していて、NPOが流行っていたんですね。商店街にはやはり年配の方が多いので、NPOという新しい法人形態に可能性を見出したんです。

でも、そんなことを言いつつ、個人的にはなんとなく始めたようなところが正直なところです。いつも「動機は不純だった」と言っているのですが、わたしはもともと夫婦二人暮しで子供がいないので、年をとったらどうやって暮らしたらいいんだろうという不安があったんです。なので、特に高い志があったわけではなくて、高齢になってからの自分の行ける場所があったらいいなという考えで、やるなら居場所づくりのようなことができたらいいなと思っ

*1 NPO法人@リアスNPOサポートセンター…2003年、商店街の活性化の一環として設立。少しずつでも自分たちの手で地域が抱える問題を解決するために、住民、行政、地元企業、NPOなどが連携する、プラットフォームづくりをサポートするのが目的。

の話をするのですが、「津波が来たらどこに逃げるんだ」「両方来たらどうするんだ」なんてことを言われながら。でも、もともと顔見知りの住民もいるので、我々が間に立つことで緩和剤になるんです。これを直接行政の人たちがやっていたらクレーム扱いになってしまうので、県の人たちもやりやすかったと思います。我々が横で笑かしたりすることで、スムーズに話が進みますからね。

この頃まで、ちまちまとやれることをやりながら、皆本職を持ちながらＮＰＯの仕事をしていましたが、２００８年のリーマンショックの際に国が緊急雇用創出施策を始めたので、うちも応募をして、まちかど交流館をもう一つつくることにしたんです。それによって約１５００万円の助成金が下りて、わたしも含めスタッフの雇用が始まりました。

２０１１年３月11日
病院での被災経験

震災当日は@リアスの活動中で、中心市街地にあ



＊2　まちかど交流館かだって…
ちょっとした休憩やサークル活動、会議など、誰でも自由に使うことができるまちの交流の場。「かだって」は、岩手の方言で「一緒にやろうよ」の意。震災で全壊となったが、建築家・伊東豊雄氏を中心とした復興支援活動「みんなの家」のひとつとして新たに「釜石みんなの家・かだって」が建てられた。

ていました。

最初に始めたのは、『まちかど交流館かだって』＊2です。商店街に空き店舗がたくさんあるので、その一つを貸してもらうことにしたんです。そこで事務所にするだけではつまらないので、人が集まる場所をつくることにしました。

もともと近くに地元のデパートがあったんですが、潰れてしまって買い物の最中に寄れるとトイレがないのが問題だったんですよ。そこでＮＰＯのスタッフ４人で、なんとか25万円ずつ出し合って、誰でも使えるトイレをつくったんです。そのあとは、かだってでパソコン講習会や女性のための勉強会、キッズマーケットなど、商業に関わる勉強会を開催してきました。

県の事業で「土砂災害防止法」に関わる住民説明会の手伝いもしました。数世帯から１５０世帯ほどの漁村集落にチラシを配送するんです。説明会では、少ないと５人くらい、多い時は50人に対して会場での受付や進行係をしました。格好よく言えば地域とのコーディネートですが、地域のじいさん、ばあさんの間に入る役でした。土砂災害防止法なので土砂る釜石市保健福祉センター（病院の８、９階が公民館施設）でセミナーをしていました。机の下に隠れるどころじゃなくて、立っているのがやっと。わたしは、なぜかプロジェクターのスクリーンを必死に押さえていました。

事業協同組合に勤めたあとに、福祉センター内にある病院の立ち上げで事務員として勤務している時期があったんです。なので、勝手が分かっていた。病院が緊急時にやらなきゃいけないことというのは、レントゲンやＭＲＩなどの機器類の完全停止です。わたしが辞めたあとにそれをできる担当が１人しかいなかったので、そのまま事務室に行って電源解除を手伝いました。それが終わってほっとしたら、ふと嫁さんのことを思い出したんです。彼女は病院のすぐ近くにある釜石保育園（現・かまいしこども園）で働いていたので、避難を手伝いに向かったんです。そうしたらもうみんな避難したあと。仕方なく福祉センターと園の間をうろうろしていました。そして、なんとなく戻ろうと思って福祉センターに向かっているときに津波が来た。病院は、２階以上は浸水を免れたんです。わたしは、ぎりぎりセーフでした。

そのあと、園の避難場所に向かって嫁さんの無事を確認しました。父は病院に入院していたので大丈夫だった。母もたまたま通院していてすぐに無事を確認できました。

その日、病院には相当数の避難者がいました。嫁さんにいい格好をしたい気持ちもあって、病院を避難所として解放したいと病院の事務局長に申し入れをしました。そうしたら、事務局長に「ちょっと来い」と言われて、市の担当者のところに行き、一緒にお願いしてくれたんです。「こいつは辞めた人間ですが、これからは病院の人間の発言と取って構いません」と。ここから院内の仕事をやるようになりました。

まず、先生方とトリアージする場所をつくりました。リハビリテーションの部屋が大きいので、ベッドを並べて待機していたんです。しかし、深夜１時になっても誰も来ない。ここまで来ればもう大丈夫だろうと、一服することにしたんです。そうしたら、それにつられてお医者さんや看護師さんなどいろんな人がやって来たんです。このときはまだことの重要性が分かっていませんでしたからね。そうして、院内に休憩所ができました。センターの職員は、

我々が眠ったあとに仮眠にやって来て、起きる前に仕事に行く方もいましたね。みなさん本当に大変だったと思います。

　このときのことで思い出すのは、トイレに関することですね。水は普通に使えていたんですが、いつか枯渇してしまうんじゃないかという話になって、節水することになったんですよ。そこで、看護師さんたちから「衛生上の注意や臭い」についての指導を受けました。

　トイレの便器にゴミ袋を入れますよね。そこで用を足したら、新聞紙を乗せて、ミルフィーユのように重ねていくんです。で、ある程度になったらゴミ袋を縛って捨てる。そのときに臭いを発生させないようにするためには、便をいかに空気に触れさせないかが肝なんだそう。スタッフ専用トイレは、徹底したのでほとんど臭いませんでしたね。やっぱり看護師さんってすごいなと思いました。そういう知恵を当たり前に知っているんですから。

　自宅は綺麗さっぱり何もないですね。福祉センターを避難所にしていたのは、10日ほどだったと思います。その後、実家が無事だったのでそこで暮らしたんですが、父がどんどん衰弱して3月28日に亡くなりました。その後、災害関連死に認定されました。

　この頃には内陸部のＮＰＯから「支援したい」という連絡が入るようになってきたので、団体としてその対応を始めました。それによって支援物資が届くことになり、わたしも父の火葬が終わってから手伝うことができるようになりました。それまでは身内のことに精一杯で支援どころじゃありませんでした。

　そこで、支援物資の配布で土砂災害防止法の際に知り合った漁村集落に向かうと、何も届いていないことが分かった。そこで漁村集落への支援物資の配布をすることにしたのですが、1ヵ月も経つと自衛

3・11の経験は、ずっと人に話しちゃいけないと思っていたんです。

　3・11の経験は、ずっと人に話しちゃいけないと思っていたんです。地元で誰かに会うと「生きてたね」という話はするんだけど、「家族はどうだ」とは聞かないんですよね。というのは、身近な人が犠牲になっている人が多いから。家族のことを聞くといい答えが返ってこないことが多いので、自分以外の話をしないというのは暗黙の了解だったんです。自分より大変な人がいると思うと自分のことは話せなかった。

　そうしたら、２０１１年9月11日に代々木体育館であるイベントに呼ばれる機会があって、そのときに初めて、自分に何があったかを話したんです。話をしているときに結構たくさん人がいて、ふと「いいのかな」と思うんだけど誰も知らない人じゃないですか。まあ、適当に喋ればいいかと思って話したら、話した後は意外とすっきりして。終いには泣いている人を見て、「ああ、俺の話で泣くんだ」と驚きました。そこからですね、自分の経験を話してもいいと思えたのは。部外者って言ったら失礼ですが、外の人たちと話をすることで、わたしも落ち着くことができる部分があります。

隊がどかんとたくさん物資を持ってきてくれました。

復旧期のできごと

２０１１年4月以降

　自衛隊が来たあとは、たまたまホームページを持っていたので、たくさんの人たちが@リアスを目指してきました。「何が必要ですか?」「どんなボランティアがありますか?」と聞かれたのですが、実はわたしたちもよく分かっていませんでした。

　いろんな人と会いましたね。ほとんどいい人なんですけど、なかにはボランティアをしにやって来て、「やることは泥かき以外にないのか」「俺はＩＴスキルを持ってるのに、なんでこんなことをさせるんだ」って怒っていった人もいました。あとはボランティアに来て、釘を踏むなど怪我をして、大騒ぎで帰っていくなんてこともありました。

　森司さんと佐藤李青さん（ＡＳＴＴ）との出会いは、市の担当から電話で「東京都から人が来てるから、とにかく会ってよ」と言われたことが最初でしたね。



岩手県釜石市

その頃の記憶は曖昧なんですが、とにかく何のこっちゃよく分からんという感じでした。その頃は、NPOやNGOの対応が主だったので、行政関係はまあいいかと思っていましたね。会ってみてもわけが分からないんだけども、訪ねて来てくれるので、毎月のように会うようになりました。ほんの数分だったときもありますね。要所要所でプロジェクトには入っていたんですが、忙しすぎて動けなかった。よく生きてたねっていう感じ。最初に始めた『ひょっこりひょうたん塾』[*3]も段取りだけして、あとはすべてスタッフに任せました。

その頃の記憶は曖昧なんですが、とにかく何のこっちゃよく分からんという感じでした。

覚えているのは、2011年の12月頃にアーティストの五十嵐靖晃（やすあき）[*4]さんがリサーチに来たときのことです。仮設住宅を一緒に見に行ったのですが、五十嵐さんの動き方がすごくよかったんです。マスコミやボランティアさんなどは、突然やって来て勝手にやりたいことをやって帰っていくことが多いんですが、五十嵐さんは、仮設住宅に行くときに「そちらに行っていいですか?」と確認を取ったり、人の家に入るときに「大丈夫ですか?」という声がけをしてから入っていくんです。それはいままでになかったことでした。

また「平田（へいた）」というモデルケースの仮設住宅[*5]だったということも、あったと思います。集会所に張り出してあるイベント表がぎゅうぎゅうに詰まっているようなところなんですよね。ボランティアさんは土日に来るのですが、平日は仕事があるし、年配の方も毎週末通われたんじゃたまらない。「俺らだって土日休みたいんだよ」と言われたこともありました。

別の仮設住宅では、ただ来てもらっちゃ悪いと言って、この辺の文化なんでしょうか、お客様をもてなすために海の幸を準備して待っているところもあったんです。最近は、「もてなしたい人たちが多いので、お腹一杯でも食べてね」と言う方もいて、食べるボランティアというのも必要なのかもしれないと思っています。

こちらの言いたいことを聞いてくれる人というのは、あんまりいないんですよね。李青さんたちには、結構愚痴を言っている感じですよ（笑）。「もう厳しい」というようなことを言えるのは、この事業と『神戸復興塾』[*6]の人たちだけ。そういう関係性がつくれたと思うようになってきたのは、この2、3年だと思いますね。

外からのアプローチは、たくさんあります。でも李青さんたちには「長く支援したい」と言われたのは大きかったですね。神戸復興塾もそうです。特に彼らは震災経験者だったので、初めて会ったときに「俺たちは、まだ時期じゃないね」と言われました。「救急・復旧の部分は専門家にお任せして、まちづくりやみなさんの心のケアをしたいので1年後ぐらいに来ます」と言われて、そうしたらちゃんと1年後に来て、いまでもお付き合いをしていただいています。

こちらの言いたいことを聞いてくれる人というのは、あんまりいないんですよね。

だいたい「ああ、困ったなぁ」というときに李青さんから電話がかかってきて、やって来るんですよね。そして森さんのわけの分からない話を聞いて頭を使う、そのあと李青さんからフォローのメールが届くというのが、だんだん当たり前のようになりつつあります。

2013年以降
踊り場を迎えて

2013年頃は、みんな仮設住宅に入って、ある程度安定した生活を送れるようになった、踊り場的な時期でした。そうしたなかで、時間もとれるようになったというか、ちょっと余裕が出てきたというか、ちょうどそのタイミングで、ひょっこりひょうたん島のモデルになった岩手県大槌町の蓬莱島（ほうらいじま）を使ったプログラムを開催しました。



＊3　ひょっこりひょうたん塾…ともに知恵を出し合い、協力しながら問題を解決していく、地域の復興を担う人材育成の塾を開催。アートやまちづくりの領域で研究と実践を積んでいる人を講師として招聘し、さまざまなプログラムを開講。岩手県大槌町の蓬莱島は、「ひょっこりひょうたん島」のモデルになったとされる。
http://www.hyotanjuku.jp

＊4　五十嵐靖晃…アーティスト。1978年千葉県生まれ。2005年東京藝術大学大学院修了。その土地の日常に入り込み、新たな視点と人のつながりを見いだすプロジェクトを各地で手がける。代表的なプロジェクトは、樟の杜を舞台に千年続くアートプロジェクトを目指す福岡県太宰府天満宮での『くすかき』（2010〜）や、漁師らと共に漁網を空に向かって編み上げ土地の風景をつかまえる『そらあみ』（瀬戸内国際芸術祭2013、六本木アートナイト2013）など。熊本県津奈木町では、海の上にある廃校を拠点にしたアートプロジェクト『赤崎水曜日郵便局』（2013〜2016）の企画運営に携わっている。ASTTとして、2012年に釜石市に1ヵ月滞在し、仮設住宅へ通い、『そらあみ』を実施。2013年から宮城県の『つながる湾プロジェクト』に参加。
http://igayasu.com



＊5　「平田」というモデルケースの仮設住宅…岩手県、釜石市、東京大学高齢社会総合研究機構の3者による、被災者が安心で快適に生活できるコミュニティケア型仮設住宅団地。住宅のゾーニングや屋根付きのウッドデッキによって、居住者同士の見守りや支え合いを創出し、仮設住宅を商店やクリニック付のサポートセンターなどが

になってきて、そこでアートって言ったらいいのか分からないけれども、（ＡＳＴＴの活動に）どう自分が関われるのかっていうのを考えるようになっていきました。

最初にやったきむらとしろうじんじん[*7]さんの「野点」などは、いいとか悪いというよりも、住民に受け入れられるかどうかがよく分からなかった。それが、実際にやってみると住民が結構関わってくれたんです。

自分にとって大きかったのは、日比野克彦[*8]さんの話です。被災した人への鎮魂と復興への祈りを捧げるために「3」「・」「11」の数字の行灯を乗せた船を海に浮かべる『とうほくのこよみのよぶね』[*9]というプロジェクトがあります。そのチラシが、毎年3月11日のイベント当日にぎりぎりで届くんですよね。そこで、3年目に「これでいいんですか？」と聞いてみたんです。そうしたら日比野さんが「これはたくさんの人に見てもらおうとは思ってない。川原さんや船頭さんなど、これに関わった何人かが思いを馳せるきっかけになったらそれでいい」と仰ったんです。そのときに、「ああ、そうか」となんだかアートの世界を知った感じがしました。

行政のお金を使うということは、何人来たか、何ができたかという分かりやすい成果を求められます。なので、いつ成果を求められるのかという被害妄想のようなものがあったんですが、日比野さんが「一人でもいい」と言ってくれたことに救われた。同時に、だからこそちゃんとやらないとまずいなと思いました。いつも甘えさせてもらっていますが、みなさんの「顔をつぶさない」ようにきちっとやることがこれから長く続けていくための必須条件だと思うし、それが地域のためにもなると思っています。

2016年以降
復興の終わり

この5年間を振り返ると、1、2年目は復旧期。3、4、5年目は、よく神戸の人たちが言う「踊り場」のような時期で、なんとかみんなで一生懸命やってこられた。でも、仕事も生活も、ここからが大変な時期だなと思っています。

3年目も、節目でした。外部支援も3年区切りで減っていき、復興支援にも関わらず、求められる成果や書類提出などが、この頃から平時と変わらなくなってきました。

自分たちが一番ありがたいのは、ずっと支援してくれる人や団体です。正直なところ、緊急雇用創出事業を受けたことは失敗だったと思っています。「緊急雇用」なのでちゃんとした仕事が決まったら「おめでとう」と言って送り出さなきゃいけないし、やっと慣れた頃にさよなら。それでは、何も継続性がない。

２０１４年４月の打ち合わせで、森さんに「この先どうするの？」と言われたんですよ。そのとき居場所づくりをしたいという話をしたんですが、「それはとても重要だけど、いますぐにやれることではないですね」と言われた。「まあ、長い話で」ということになって、「ああ、まだ付き合ってもらえるんだ」と思いました。そこから、自分たちができることは何だろうと考え、いまは東京２０２０オリンピック・パラリンピック競技大会を見据えています。

自分たちが一番ありがたいのは、ずっと支援してくれる人や団体です。

前回の東京オリンピックは、わたしはまだ3歳なので記憶にないのですが、１９７０年に岩手県で国民体育大会があって、釜石もすごく盛り上がったイメージが残っているんですね。なので、もう少し被災地での盛り上がりが欲しいと思っています。「復興オリンピック」と言いながら、開催国に選ばれるためだけにそう言ったんだったら癪に障る。どうせならもう少し自分たちが関わるオリンピックをつくりたい。復興やコミュニティづくりにオリンピックが使えるんだったら、使ったほうがいいと思う。たとえば、「五輪マークをみんなで描きましょう」ということをやって、普段なかなか外に出ないお年寄りが「自分が生きているうちにまたオリンピックが見られるんだ」と元気になったり、一人でもいいから何かしら関わりが持てるものにできたらいいなと思っています。



＊6　神戸復興塾…１９９６年、被災者救済や被災地まちづくりに関わる様々な専門家約30名によって設立。これまで培った人的資源とネットワークをもとに、計画的・持続的に復興まちづくりに取り組んでいる。２００３年、ＮＰＯ法人認定を受け、神戸まちづくり研究所となった。
http://www.kobe-machiken.org/index.html

＊7　きむらとしろうじんじん…アーティスト。１９６７年新潟県出身。京都府在住。京都市立芸術大学にて陶芸を学び、１９９５年より全国各地で『野点』を行う美術作家／陶芸家として活動をはじめる。これまで青森、茨城、東京、京都、兵庫、山口、福岡など全国で開催。フランス国立高等美術学校（１９９８年）、水戸芸術館（２０００年）、上野の森美術館（２００８年）など公立美術館における企画展への招待も数多い。ＡＳＴＴとして、２０１２年に『ひよっこりひょうたん塾』の一環として『野点』を実施。それ以降も釜石・大鎚で活動を続けている。

＊8　日比野克彦：アーティスト。１９５８年岐阜市生まれ。東京藝術大学大学院修了。１９８０年代に領域横断的、時代を映す作風で注目される。作品制作のほか、身体を媒体に表現し、自己の可能性を追求し続ける。各地域の参加者と共同制作を行い社会で芸術が機能する仕組みを創出。ぎふ清流国体・ぎふ清流大会総合プロデューサーを務める。日本サッカー協会理事。東京藝術大学美術学部先端藝術表現科教授。ＡＳＴＴとして、２０１２年『とうほくこよみのよぶね』など3県の事業に参加。
http://www.hibino.cc

復興は、いつか終わらなきゃいけません。

復興は、いつか終わらなきゃいけません。次のフェーズに移るには、ちょうどオリンピックが区切りになるんじゃないかと思うんです。

そう考えるようになったのは、以前神戸の人たちに「続けようと思えばいくらでも続けられるけど、どこで辞めるかが重要だ」と言われたことが大きいです。彼らが言うには、神戸は復興が終わるタイミングを逃したらしいんですね。いまも75歳くらいの人もがんばっているそうで、人がいい人が残されてしまうのだけは避けたいなと思う。きっと「ここまで」という目標があったほうが、どの立場の人にとってもいいと思うんです。もちろんそこでぶつっと活動が切れるのではなく、そのあとは、超高齢化社会の先進地として活動を模索していきたい。

もし復興の区切りがつけられたら、たまたまうちの嫁さんの勤めるこども園が移動した先に、復興公営住宅ができるんですね。そこで両者の関わりを模索できたらと思っています。復興公営住宅には、様々な課題があります。たとえば、高齢者の孤立の問題が挙げられますが、これを防ぐことは難しくても、減らすことはできると思うんです。見回りシステムの構築も必要ですが、そのシステムを仰々しいものとしてではなくできるのは、もしかしたらこのグループ（ＡＳＴＴ）なんじゃないかと思うんです。

これまで5年間仮設住宅の見回り[*10]をしてきて、本当はいけないんでしょうけど、これまでは聞き耳を立てて在宅確認をすることができたんですね。でも、復興公営住宅では壁が厚くてそれができない。それに、人って自分の興味がないと外には出てこないですよね。そこで、どうやって外に連れ出そうと悩むわけですが、そこに子供たちが関わってくれると、「うるさい」という理由でもいいから、扉を開けてくれるかもしれないという淡い期待があるんです。

「たった一人に対して」というのは、行政はなかなか難しい。でも、アートだったらそれができる可能性がある。しかも、地元の人と協働すると成果が出ないとバッシングになってしまいますが、外部の人たちとだと、結局できなかったとしても責任問題になりにくいんじゃないかと思う。その安心感は、新しいことにチャレンジする上で、とても大事なことだと思いますね。

やっと最近、「これをやりたい」と、自分たちから言っていいんだなというのが分かってきました。お酒を飲んだ勢いでオリンピックに関わりたいという話を出したら、日比野さんには「ははは」と笑われて、森さんは「ん?」と言っただけで、「あ、この人たちはそんなの無理だって言わないんだな」と気づいたんです。それに、最後には必ずお金の話が出てくる。行政関係でも、無料同然で話を持ちかけてくる人がいて、何度も痛い目に遭っているので。

復興支援の予算は、どうしたって縮小傾向にあります。そうすると、どこかからかお金を集めてくる必要がありますが、この流れから言って、いま地元に還元できるのはオリンピックだと思うんですよ。

それにしても、オーダーがないほうが逆にプレッシャーがありますよね。「これをやってください」と言われたら、それをやればいいだけだから。自由な反面、こちらがどこかで結果を出して、ほかに転用できるようになっていくと格好いいですよね。ここに来て、少しずつ目標のようなものが出てきて、もっとがんばりたいなと思っています。

川原康信



＊9　とうほくのこよみのよぶね…東日本大震災で亡くなられた方々への慰霊の気持ちと復興への願いを行燈型の船に込めたプログラム。こよみのよぶねを眺めながら、ゆく年の1年をふりかえり、来る年の1年に想いを馳せる。アーティスト・日比野克彦監修。ＡＳＴＴとして、２０１２年より継続的に実施している。
http://www.dnaandorg/yobune.html

＊10　仮設住宅の見回り…釜石市の緊急雇用の一環で「釜石仮設団地施設支援連絡員配置事業」を２０１２年から受託。市内66ヵ所の仮設団地の巡回・相談を行うために、約90名を新たに雇用した。当初は１日３回の巡回だったが、２０１４年以降は支援員が30名弱に減少し、１日１回の見回りを行っている。

［参考文献］
・川原康信「震災後のまちづくりとこれからの被災地支援」『マナビバ。文化・芸術・アートの視点で被災地のこれからを考える』福島県、東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、特定非営利活動法人Ｗunder ground、２０１５
・きむらとしろうじんじん「大鎚での『野点』――押し売りとありがた迷惑」『アートプロジェクト 芸術と共創する社会』水曜社、２０１４



初めての釜石市訪問（2011.8.2）

その土地に生きるリアリティ

佐藤李青

「釜石でNPOだと@リアスですね」という釜石市の職員の方の一言が川原さんと出会うきっかけだった。その職員の方は、その場で電話をかけ、予定を確認し、数十分後に@リアスの事務所で会うように手配をしてくれた。2011年8月2日のことだった。

最初の数年はその膨大な量の仕事のため、十分に言葉を交わす時間を確保することが難しかった。釜石に限らず、地域の頼れる団体には、震災直後はあらゆる分野の支援が集中した。@リアスも震災以前は、文化事業を行っていたわけではない[*1]。それでも「わけも分からない」ながらに付き合ってくれた短い会話は、震災後の地域の状況や支援活動の変化を実感し、現状を確認する機会となった。

仮設住宅への引っ越しから数ヵ月が経ち、住民の生活も落ち着き始めた頃、さまざまな生活上の問題が噴出することになった。近所の騒音や駐車場の使い方など、それらは震災が起こしたことなのか、集合住宅のご近所問題なのか、判別しづらいものでもあった。行政の仕事を受託し、住民の「緩衝材」としての役割を担った@リアスは、支援活動としてそうした現場と向き合うことになる。この話を川原さんは「わたしたちも被災者なんだけどね」と苦笑しながら語っていた。「ケアをする側のケア」が課題として叫ばれるようになったのも、この時期だった[*2]。

その土地に暮らし、自らも被災経験を背負いながら、支援の窓口となる。そこには葛藤もあったのだと思う。そこから語られる言葉は、何よりも切実さを伴っていた。それは信頼できる現状認識であり、そのとき「やってはいけないこと」の判断基準となった。

2012年に大槌町での事業では、数ヵ月、地域外からスタッフが常駐することになった。事業立ち上げのときに「誰か一緒に走ってくれる人がいればできるかもしれない」という発言があったからだ。予算があっても、それを動かす人がいない。これも震災直後、他地域と共通する課題だった[*3]。

震災から3年を節目とした支援の減少は、川原さんと本腰を入れて事業を行う契機となった。釜石は震災以前から高齢化率が高かったが、震災により加速化した。これから十年先を見据えたときに何をなしえるだろうか。それは夫婦二人で年をとったときに、この地でどう暮らしていくのか、という川原さんが抱いていた「不純な動機」に裏づけされている。

＊1 事業パートナー探しは、信頼できる関係者からの紹介や、メディア等の記事から問い合せを始めた。だが、そのアクセスしやすさ（外的な見えやすさ）は、先方の忙しさにも比例し、丁寧な事業構築を行うためには大きな障壁となった。また、東北では芸術や文化を対象とするNPOの活動が少なかったため、まずは地域に根ざした活動を行うNPOがパートナーになることが多くなった。

＊2 避難所から仮設住宅へ住民の引っ越しが終わる頃に、震災直後から支援者として走り続けてきた人々に疲れが出てくる時期があった。この時期から事業の対象を、いわゆる「被災者」だけでなく、その支援者へも気を配るようになった。

＊3 被災した自治体では、通常業務に復興関連の業務が上乗せとなった。職員が被災した例も多く、応援職員等で人員の補充は行われたが、その業務は多忙を極めていた。文化を所管する部署の担当者が復興関連の部署への異動、もしくは震災以前から文化を所管する担当がない場合、文化庁等の外部支援があったとしても、申請する人がいない。資金の受け皿がない、資金を獲得できたとしても運営する人がいないということがあった。



平田の仮設住宅（2011.12.10）

2016年6月7日に釜石市の隣、大槌町を訪ねた。まちの中心部は嵩上げが終わり、その大地には区画に沿った道路が引かれ、電柱と電線が配置された風景が広がっていた。だが、家が建つまでには、まだ数年を要するのだという。人の暮らしの気配は、まだない。沿岸部の街は、これからが復興の本番となるのだろう。そのとき、そこに住む人々の「不純な動機」こそが、復興にとって要となるように思えてならない。まちは計画的につくるものではなく、そこに住む人々の暮らしから、結果的に生まれてくるものなのではないだろうか。そして、その局面において「一人ひとりと向き合うこと」をアートの価値だという川原さんの実感に、また、これからの実践への背中を押される想いを持つ。



大槌町の現在（2016.6.7）

宮城県



2016.5.26

仙台市

data 1

釜石市、東日本大震災から5年の歩み

地域のNPOとして、まちづくりをサポートし続けてきた@リアス。この5年間、復興に向けて歩んできた釜石市の変化を、住まいを取り巻く状況と、@リアスが受けた外部資金の推移から眺める。

釜石市の被災状況

1 人的被害

死亡者数→1,062人（行方不明者152人、関連死認定者数104人含）

避難者数（市内避難）→9,883人（2011.3.17最大）

（内陸避難）→633人（2011.5.9最大）

※震災前（2011年2月時点）の総人口は39,996人

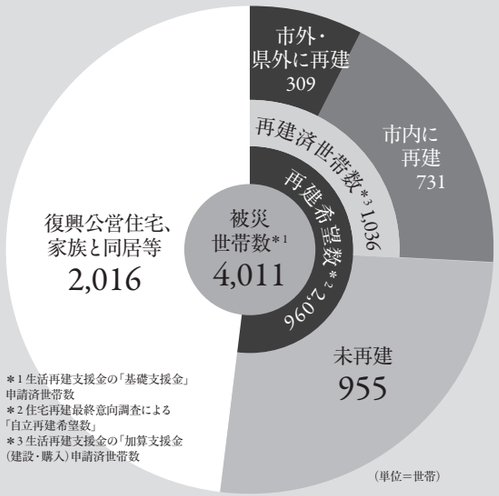
2 家屋被害

住家数16,182戸のうち4,705戸が被災（29%）

※被災の内訳（全壊2,957戸、大規模半壊395戸、半壊304戸、一部損壊1,049戸）

住まいの再建

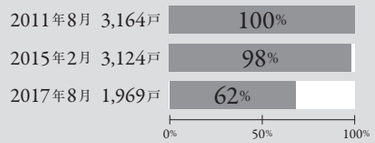
被災世帯の自力再建率（自力再建の進捗状況。2016年2月時点）



＊1 生活再建支援金の「基礎支援金」申請済世帯数
＊2 住宅再建最終意向調査による「自立再建希望数」
＊3 生活再建支援金の「加算支援金（建設・購入）申請済世帯数

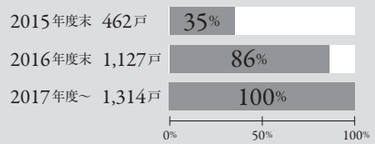
被災世帯数の約半数が再建を希望しているが、実際に再建できた家は希望数の半数に満たない。自力再建を希望しない世帯は、復興公営住宅に入居、親世帯・子供世帯と同居、賃貸住宅に住むなどの選択をしている。

仮設住宅の集約見込み



復興公営住宅の進捗状況

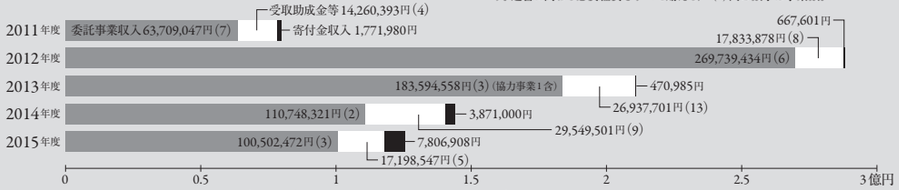
整備地区…22地区、全体整備予定数…1,314戸



2011年4月21日から入居開始した仮設住宅は、同年8月をピークに、2017年8月には、ピーク時の6割にまで減る予定だ。一方、復興公営住宅は、2016年度中には全体戸数の86%が完成予定。2018年度中には、1,314戸すべての完成を目指している。しかし、2016年6月末時点で復興公営住宅への入居は390戸。仮設住宅の入居戸数は、未だ1,747戸に上る。

@リアスにおける外部資金の推移

※助成金・補助金…NPOが事業主体となり、運営費の一部を助成・補助してもらうもの／委託事業収入…事業主体は行政であり、事業の代行をNPOが行う。運営に関わる必要経費をすべて賄える／（ ）内の数字は事業数。



震災直後の2011年度は、震災関連の事業が少なく、2年目になり一気に金額、事業数とも跳ね上がっている。それ以降は、徐々に金額だけでなく事業数も激減。2015年度以降も、助成事業・委託事業は年々減少していくと予想される。

出典…『特定非営利活動法人@リアスNPOサポートセンター総会資料』2011～2015、『復旧・復興の歩み 岩手県釜石市』釜石市、2016／協力…釜石市役所



八巻寿文

やまきとしぶみ

せんだい3.11メモリアル交流館　館長

高校卒業後フランスへ留学。
帰国後は舞台照明の仕事をしながら画家として生活。文化庁新進芸術家海外研修制度にてブリュッセル国際サーカス学校を拠点に障害者との舞台公演を展開。2002年『せんだい演劇工房 10-BOX』を立ち上げ、2005年より同工房長。2016年より『せんだい3.11メモリアル交流館』館長。日本照明家協会奨励賞、宮城県芸術選奨賞受賞。尚絅学園大学非常勤講師。
http://sendai311-memorial.jp

震災前からアートの重要性を信じていた人は、震災をどのように感じて、どのように動いてきたのだろうか。この5年間『せんだい演劇工房 10-BOX』を拠点に、芸術文化による復興に取り組んで来た八巻寿文さんは、仙台市の文化行政において、演劇分野の第一人者である。10-BOXのある仙台市若林区は、津波の浸水地域が57%に及び、市内で最も津波被害の大きな場所となった。八巻さんは、2016年からは『せんだい3・11メモリアル交流館』へ異動となる。地震が起き、津波が来て、拠点も変わった。それでもなお、変わらないことは何だろうか?

避難所としての劇場空間

震災の前後では、自分のやっていることに大きな変化はありませんね。どう言ったらいいんだろう、震災によってこれまであった問題が顕在化したというのが正直なところです。

震災前から10-BOX*1は、避難所になりたいと言っていたんです。避難所に指定されれば水や発電機やテントなんかを備えられますし、備蓄の食料を消費するために年に一度フェスティバルができますよね。そうやって楽しい避難訓練と表現が重なることをやっていけば、「生活と表現」がつながっていくだろうと考えていたんです。でも、実際に震災にあったときには、そんなに大きな施設ではないから、何千人来るか分からない状態で広くアナウンスはできなくて、実際は辿り着いた人しか収容できませんでした。

10-BOXは重度の知的障害者施設と併設していて、彼らのお迎えが来るまで5日間ほど一緒に寝泊まりしました。その後は、避難所というよりも「中間支援のターミナル」になっていたと思います。より沿岸部に向かう演劇関係の支援者が立ち寄って、一息つきながら情報を交換するような場です。

その頃の指定避難所には物資が配給され、指定さ



＊1　せんだい演劇工房10-BOX…劇場兼稽古場施設として、試しながらじっくり演劇を創る空間。2002年、「劇都仙台」事業の拠点として、演劇祭やワークショップを行う、舞台芸術の発信と交流の場として設立。公益財団法人仙台市市民文化事業団が設置し、管理・運営している。
http://www.gekito.jp

れていない避難所には届かなかったり、指定された場所であっても危険なので全員で引っ越したりするなど、疲弊と不安とで現場はとても神経質になっていました。

舞台空間[*2]は、避難生活には向いていません。客席はスロープがあって寝にくいし、舞台の上は見られている感じがするし、天井の吊り物が落ちてくる心配もある。だからいつも劇場空間だけ空っぽになっていて、催しがあったらわらわらと客席が埋まるんです。ほかには小部屋があるから、泣く子はこっち、風邪を引いている人はこっちと分けることができて、小学校の体育館よりずっと機能的。「劇場と住民が一体」となった、理想の劇場を見ました。

この時期の催しのなかで、一番望まれたのは地元民による民俗芸能です。その方々も仮設住宅に入っていて大変なんだけれども「みなさんが望むのであればやりましょう」と言って、お神楽や獅子舞を披露してくれたんです。若い人たちの様子を見ていると、初めて見たにも関わらず、強烈な懐かしさのようなものがあるみたいなんですよね。ほかにこんなに強い演劇があるだろうか。僕は民俗芸能の研究者でも愛好家でもありませんが、お神楽は「東北の舞台芸術」の一つだという思いが、より強くなりました。

お神楽は、田舎のほうが力強くてドラマチックなんですね。それに比べて、まちなかのお神楽は形式的でやや退屈です。北上川や出羽三山のほうに行くと、修験者がやっているお神楽なんていうのは、素朴だからこその、洗練されたら失われてしまう良さを孕んでいます。エロティックだったり、アクロバティックだったりもする。それをまちなかで体験して、本場の田舎でも観たいと思ってほしい。田舎の人は都会に買い物に来るけれど、観光地以外はその逆はなかなかないですよね。もともと震災前から考えていたことなのですが、改めて観光地じゃない場所にも都会との交流の循環をつくりたいと思いました。

説明できない使命感

震災後、説明できない使命感からいくつかの活動をやりました。東北は、中央政権に破れ続けてきた「敗北の歴史」です。アテルイに始まり安倍貞任、奥州藤原氏、九戸政実、伊達政宗、奥羽越列藩同盟。現代でも、高校野球、東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所事故などが挙げられます。そうやって見過ごされてきた東北における東北固有の現代演劇の根幹を探しているときに出会ったのが、お神楽でした（２００３年）。

「浜神楽」と呼ばれる雄勝法印神楽（おがつほういんかぐら）は、12の浜を巡行奉納する形式が特徴ですが、震災直後に訪れたら、津波によって舞台が流されて実施が困難になっていました。お神楽はハレのものですが、沿岸部の集落の人たちにとっては、食べることや寝ることと同じくらい大事な生活リズムなんですよね。２０１１年5月の時点で、ブルーシートを敷いてやったくらい。保存会のメンバーも被災しているのですが、まちの人に「お神楽を見たい」と熱望されてやったそうなんです。そこで、お神楽の再生が精神的な復興につながっていることを実感して、急いで『雄勝法印神楽　舞の再生計画』[*3]を行いました。東北の特徴である組み立て式舞台をつくって披露する機会をつくれたのは、被災してから半年後でした。

絵本を届ける『こどもとあゆむネットワーク』[*4]では、震災直後に、いまは泥かきと子供しかないと思って、そこに活動を集中させました。絵本を全国から集めたところ、予想以上に集まって運営がパンクしてしまい、絵本の山と無力感とで、みんなで泣いたこともありました。それからはめきめきと活発になって、絵本の選定や時々刻々のニーズの対応、本棚ごとの配送、イベントのお届けをするまでに育ちました。裏表のない、罪のない子供の笑顔は、最強であり原点です。

コミュニケーションツールとして子ヤギを派遣する『やぎネットワーク』[*5]は、同じく東北にこだわって生まれたプロジェクトです。実は、僕は現代美術家で、10-ＢＯＸができる前は『うぶすな美術研究会』[*6]という勉強会を有志でやっていたんですよ。東北で創作するというのはどういうことなのかを考えるために、出版や展覧会、フォーラムも積極的にやりました。その5年間の成果が自分のなかにあると思います。

そのなかで特に重要だと感じたのは、日本人と家畜の関係です。特に東北は山と岩清水の恩恵を受けていて、集落ではヤギを飼って暮らしていました。ヤギは草を食べても根っこまでは食べないからまた草が生えるんだそうです。それにヤギの乳は牛より母乳に近いし、余計な草を刈ってくれる。

白神山地が日本で初めてユネスコの世界自然遺産



＊2　**舞台空間**…八巻さんは、舞台上を「舞台空間」、舞台空間と観客席を含む会場全体を「劇場空間」、施設全体は「10-ＢＯＸ」と呼んでいる。

＊3　**雄勝法印神楽　舞の再生計画**…宮城県の重要無形民俗文化財に指定されている雄勝法印神楽（石巻市旧雄勝町地域）。その舞台が津波で流されてしまったため、史実に基づいて、搬送可能な組み立て式の舞台を設計・製作。雄勝地域の実態調査と奉納公演を行い、復活公演を果たした。

＊4　**こどもとあゆむネットワーク**…被災によって貸し出せない劇場空間で良質な絵本を受け入れ、仕分けを行った。ダンボール製本棚を被災業者に発注し、新聞社の配送と連携した毛細血管ルートを構築して、約7万冊を子供たちに直接手渡した。また、絵本をファーストコンタクトとして、パフォーマーやアーティストを派遣。現在、少しずつ福島にも活動範囲を広げている。

＊5　**やぎネットワーク**…新潟の被災経験者と地元の大学の連携で、コミュニケーションツールとして子ヤギを避難所などに派遣した。



＊6　**うぶすな美術研究会**…1995年3月、仙台市内の若手現代美術家6名で発足。産土という概念について「自然と都市、東洋と西洋、仙台と東京、身体性と合理性、土着性とモダニズム、循環的世界と直観的世界、障害者と健常者」

になったときに、「なぜこんなふつうの森が?」と本当に不思議に思いました。僕はまだ子供でしたが「地球上にはもう森はここにしかない」と知った。ヨーロッパの森は、薪や武器にしたり、建築材にしたりしてつるっ禿げになってしまったから、植林技術で再生させている。でも白神山地は手つかずの自然のまま、広葉樹も針葉樹も茂っている。そんな場所はあとはツンドラしかないと言う。それが保てたのは、家畜との暮らしのお陰なんだそうです。自然と人間の営みを循環させている。ヤギの存在はわたしたちが表現をしたり、狩りや田畑を耕すこととつながっているかもしれないと思いました。日本人の感性と回路がつながっているとしたら、何か行き詰まったときにヤギを撫でれば自分に戻れるかもしれない。震災後に、新潟からヤギの受け入れの話をいただいたときは、真っ先に承諾しましたね。

避難所は高齢者がたくさんいるので、ヤギを見ただけで喋り出す人がいます。幼い頃の記憶が、わあっと蘇るんでしょうね。ヤギを連れている僕に対してじゃなくて、独り言が始まる。ヤギを触りながら、昔のことを言葉にし出すんですよ、誰かに伝えようとするというよりは、急に喋り出すの。「お乳も飲ませられないから、赤ん坊に米の研ぎ汁飲ませたんだよなあ」とか。「えっ、ばあちゃんその研ぎ汁って、ミルクと全然関係ないさ」って言うと、「んだったなあ。白いだけださぁ」って。試しに子供に餌のやり方を教えて、ヤギを引いておばあちゃんのとこに行かせるんですよ。そうすると、話が通じてるのか分からないけれど、ずっと何かを喋っている光景が幾度となくありました。

その薄い皮膜を破ってあげると、モノクロだったものがカラーで見えるようになると思う。

お神楽もヤギも、いまでは遠い昔の日常のようになっていますよね。でもその薄い皮膜を破ってあげると、モノクロだったものがカラーで見えるようになると思う。沿岸部の集落では、こうした自然ともにある生活は、津波が来なければ、人知れずずっと続いていたと思います。

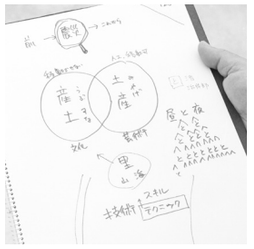
「渚」の存在

震災が起きていま改めて感じているのは、里山の自然の豊かさです。宮城県北部から北のリアス式海岸では海と山がすぐ近いので、お米もお魚も物々交換する、自給自足に近い生活が震災前まであったんですよね。その一方で、仙台平野は「里海」と呼ぶべきなんです。浜には魚介類や田畑のほかに、キノコやイナゴなど食べられるものがたくさんあって、わけの分からないしきたりがいっぱいあるのね。それに縛られて窮屈だという声もあるけれど、だからこそ助け合いがあった。直感的に民俗芸能やお神楽に惹かれていたけれど、そこには自然に対する畏敬の念というか、暮らしのなかでふつうに精神世界につながる回路があるのだと気づきました。

仙台平野は「里海」と呼ぶべきなんです。

僕の作品タイトルに、「渚」というものがあります。正確には、「と」と呼んでいるもので、たとえば、「昼と夜」や「田舎と都会」などの間を取り持つ「と」には、その間にもさらに「と」*7がグラデーションのように無限にある。その「と」の存在を「渚」と言い換えているんです。

渚というのは地形が変わるところですよね。満ち潮や引き潮によって、国土の輪郭は常に変わっています。だから地図上は明快な線を引くことができたとしても、それは仮のもので、移ろいのなかに真実がある。渚をよく見てみると、渚にしかいない生物がいるんですよね。たとえば、少し視点を空に移すと、地球から宇宙に行くまでの成層圏も渚だと思うのね。オーロラのように、ここにしかない神秘的な美しさや豊かさがある。だから何か一種類ではなくて、縦と横が移ろいながら交差するところというのがあって、必ず両方交わる必要がある。その交差する場所は小さいかもしれないけれど、すごく豊かで、その割合はともか



*7 と…インタビュー中に八巻さんがノートに書いた図。

など様々な考察を行った。書籍を3冊出版し、フォーラムや展覧会（仙台、盛岡、東京、パリ）を開催。2002年、宮城県美術館の最終展をもって解散した。

く「密度」は100%で変わらない。お神楽やヤギも、渚に生息する大事なヒントだと思うんです。

集まってただおしゃべりをする場

2011年の4月、10-BOX内に『ARC∨T(アルクト)』[*8]のスペースを設けて、24時間誰でも使える広場として開放したのも渚の考え方からです。開くとウッドデッキになっていて、とても開放的なスペースなんですよ。

表現活動をする人たちが、集まってただおしゃべりをする場がまず必要だと思って、無料開放することにしました。その場には何かが生まれる可能性がある。やることが決まっている人に場所を貸すのは日常ですが、それ以前を受け入れていくことで、いましか生まれないものが生まれる可能性の芽を拾いたいと思いました。

広場の真んなかには、卓球台のように机を置きました。その隅っこで話す人たちもいれば、突然、両端同士で喋り始めたりして、会話の卓球が始まるんです。

部屋の隅にはお茶が飲めるようにしてあって、ちょっとしたパーテーションも置いて、自由に仕切れるようにしておく。楽屋ですね。やろうと思えば小さな舞台もつくれちゃう。練習場でもあり、機材置き場でもあり、まるで部室のように毎日来る人もいれば、ふらっと1ヵ月ぶりに来る人もいる。僕は常時在中していて、外部から支援をしに僕のところに来たらARC∨Tに寄ってもらうし、ARC∨Tに来たら僕のところに寄ってもらうようにしていました。

まるで部室のように毎日来る人もいれば、ふらっと1ヵ月ぶりに来る人もいる。

でもね、外部から「こういう支援がしたい」って具体的に決めて来られるとすごく辛いのね。そういうのをARC∨Tに持ち込むと、そこにいた演劇人が「あ、やりたい！」って言ってくれたりするんですよ。なので、支援者への案内役のような役目を担っていました。いろいろな人がいるけどみんなアーティストだから、技能を持っていていろんな方向に打ち返せるんですよね。僕だけだったらとても抱えきれなかった。そういう意味では、ゼロから始まる場で、「工房」を意味するワークショップそのものだったなと思います。僕は、さしずめファシリテーターのような役割でしょう。

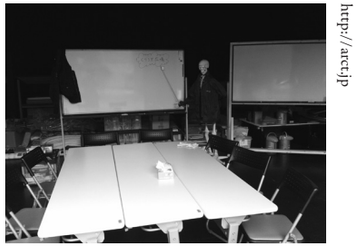
震災以降に生まれた活動には、障害者や、0歳から2歳児までのワークショップなど、いろいろな人に対応するプログラムをつくった人たちがいました。また、著名な俳優が長期滞在をして、震災経験の有無を問わず人を交ぜた作品づくりをして、ロングランが生まれたりしています。そんなことをしていたら、10-BOXの利用率が上がりすぎてほぼ100%になっていました。実は、劇場というのは、通常80%を超えると光熱費やテクニカルスタッフの人件費が掛かって、運営的にショートしてしまい大変なんですよ（笑）。

置き去りにされている経験

どんどん日常が戻ってきていて、震災直後にやったことが置き去りにされているなと感じます。それはもう本当に忸怩(じくじ)たる思いがあって、なんて日本人ってフィードバックが苦手なんだろうと思います。僕も含めて。

劇場は、基本的に指定避難所ではありません。つまり、貸し借りができなくなったら指定管理者の仕事がなくなるわけですよね。ところが現実は、避難所に指定されていなくても、押し寄せてきた人たちを受け入れ、面倒をみて、自分の家族もどうなったか分からないような状態で24時間対応する。でも、そんな契約はそもそも交わしていないわけですよね。

10-BOXにもいろいろな偉い人が心配してやって来ましたが、体育館で絵本の仕分けをしていて褒められると思ったら、「見なかったことにしてやっから」って言われたの。本来の機能ではないことをやっていると映ったんでしょうね。あのとき、自分の判断で英断をした館長さんや現場の人々が各地に



＊8　ARC∨T…アートリバイバルコネクション東北の略。東北の演劇人を中心として、2011年4月に復興支援を目的に2年間という期限付で活動を開始。2013年4月にその活動を一旦終了し、同年7月より新体制で活動を継続。「出前部」と称して、アーティストの派遣事業などを行っている。
http://arctip



宮城県仙台市若林区

たくさんいたはずですが、それが正しかったのか、正しくないんだったらどうすればよかったのか、評価や反省がなくて、何もなかったことになろうとしている。

とにかく自信は一切ないんですよ。怖かったです。ただ必要だと言っている人がいて、僕もそうだなと思ったからやっただけで、誰かに断ったわけでもないし、それがなぜかをちゃんと説明できるわけでもない。自分がやっていることが正しいかどうかはあとで分かればいいと思っていたけど、いつまで経っても分からない。こうした現場の葛藤こそ、皆でふりかえるべきだと思っています。

でも、当時何が必要なのとか聞かれても、沿岸部とまちなかの人たちとで、全然状況が違うんですよね。実際に近しい人を亡くした方もいるので、心の状態が全然違う。まちなかでも地盤の悪いところでは全壊した家もある。だから心理状態にグラデーションがあって、これが集約されていけば必要なものが見えてくると思っていたけれど、実際はずっと集約されなくて、5年経ってもそのグラデーションのまま全体的に薄くなっていくんです。

5年経っても そのグラデーションのまま 全体的に薄くなっていくんです。

2016年度から『せんだい3・11メモリアル交流館（以下、メモリアル交流館）』[*9]に赴任しましたが、「もっと津波の教訓を体感できるように」という声もあれば、「怖くて見られない」という人もいる。ある方向で事業を進めていこうとすると、それに対して傷つく人が必ず反対側にいて、どこに行ったらいいか分からないという状態が続いています。沿岸部で「ここに住みたいんだ」と言ってテントを張って暮らした人もいれば、そんなことをやっていると土地が高く売れないという反発が出たりする。放火事件もあったりして、非常に生々しい現実があります。

地震は一瞬にして起こりますが、津波はやって来る時間が長いから深いトラウマを抱えてしまうのかもしれません。地震は建物が潰れても掘り起こせば、昔のアルバムも通帳も出てくる可能性がある。でも、津波はすべてさらっていってしまう。そうすると「そこにあった」という事実が揺らぐ。その大きな喪失感が、地震との違いなんだと感じています。



＊9　せんだい3・11メモリアル交流館…2016年、震災や地域の記憶を語り継いでいくための場所として設立。展示や書籍などを通して東日本大震災を知り学ぶための場であり、津波により大きな被害を受けた仙台市東部沿岸地域への玄関口でもある。

普遍的な 希望の手がかり

これからの希望は、自然が蘇生する姿だと思うのね。つまり、里海里浜で自給自足に近い生活をしていた人たちの生活――田んぼが復活したり、沢ガニがやって来たり、貝が獲れるとか――が帰ってくることだと思うんです。津波で海底が浄化されて海苔がたくさん採れたり、牡蠣が太ったと聞きますが、それは蘇生の一つの姿。そこには人間の生活もあって、その関係性は変わらずに希望だと思うんです。人は年を取ったら死んでしまうけれども、地形が変わろうが、嵩上げされようが、その上では新しい草花が生えて、虫がやってくる。いまのところ、普遍的な希望の手がかりはこれだけですね。

メモリアル交流館は、ちょうどマンションの建設予定地と田んぼの間に建っているんです。毎朝、わざわざ田んぼのあぜ道をバイクで通ってくるんですが、それは単純に綺麗だし、気持ちいいから。ここを散歩するだけで癒やされるのね。そういった自然を感じる活動をやっている人たちはとっくにいて、僕が思いつくことなんて既に考えられていることばかり。でも、それを自分がいる場所でどう向き合うかだと思っています。実現するのは難しいけれど。

10-BOXは演劇に特化した施設でしたが、メモリアル交流館に異動したことで、もっと「人の生き方そのもの」に課題が一段上がってしまいました。

これまでは演劇人が健全な戦いをする場、つまり表現における野生のフィールド[*10]を守る役目がありました。いまはそれを囲っていた壁がばたんと倒れて、この田舎の風景が見えてきたような感じがあります。自然とそこで暮らす人の関係をどのように結んだらいいのか。「豊かな生活を表現する」というのは、10-BOXのときから段差はありません。僕は僕なりの発想しかできないから、野生のフィールドが自然に蘇生していて、そこには同じように人の暮らしもある。それが未来につながるイメージだと考えています。

＊10　野生のフィールド…八巻さんは、「演劇活動は、ときとして政治を告発するなど、活き活きとした表現が生息する野生のフィールドであり、無責任に荒らすようなことはせず、何かがあったときだけ適切な手を差し伸べる」ことが大事であり、10BOXはそのような場であると、これまでも何度も語っていた。

だけ。お神楽もお客さんに向かってではなくて、神様に捧げていますよね。そんなふうに思うんです。

文化と芸術の違い

「産土神」は里山の鎮守の神様ですが、海にも産土神がいるんですよね。産土の文字を逆に書くと「お土産（みやげ）」なの。つまり、土地にあるものが産土で、それを「持ち帰れるようにした」のがお土産。お土産は移動できるんですよね。自然の素材を使って、彫刻など人の手で加工されたものが持ち運ばれて、新たな土地に根付く。移動できるのが芸術で、土地に根ざしているのが文化だと考えています。

いまの僕の職場の机からは、いつも田んぼが見えるんです。そうすると、草ぼうぼうのところを綺麗に刈って、一日中行ったり来たりして泥を捏ねるの。そうすると泥がクリームみたいにとろとろになるんだよ。田植えも一度機械でやったあとに人の手で植え直して、一粒でもおいしくたくさん穫れるようにって精を出している姿を見ると、キャンバスに筆を当てるアーティストにしか見えない。風が吹いて田んぼ一面に風紋ができて、夕日が穂を照らす。蛙の声が聞こえてきたり、サギや見たことのない珍しい鳥が飛んで来たりする。その風景が僕にはインスタレーションのように見えるんですよね。人の手でつくった場所と自然が寄り添っていて、作品としては理想的だなって。

じゃあ芸術がなかったのか
というとそうじゃなくて、
芸術という言葉すら
必要なかったんだと思います。

田舎は、とても豊かな生活の場だったんだよね。そこに憧れがなくなったのは、経済原理によって生産者の顔が見えなくなってしまったから。でも津波で田舎の価値が失われても、まちなかのようにはなれないし、なっちゃいけない。お金ではない価値で、都会の行き過ぎたテクノロジーをひっくり返してやりたいぐらいのことがあるんだと思う。そのためにはどうしたらいいのかということで悩んでいる。そのとき、技術ってすごく大事だなと感じます。

それは、もう既にあるんですよ、
生活していた人たちのなかに。

たとえば、ペンの持ち方や書くことは技術です。教えるとできるようになって、広がっていく。つまり輪が広がる技術がまずあって、これを使って何を書くかは個人の自由なんです。たぶんテクニックは、スキルに発展するんでしょうね。僕はいま、このテクニックを探している気がします。それは、もう既にあるんですよ、生活していた人たちのなかに。震災を機に気づいたことを言えば、田舎のお母さんたちは冬を越すための保存食のつくり方を知っている。都会のマンションに暮らす若いお母さんはつくれないですよね。漬物だったりしたら臭うしね。そしたら田舎に来てつくって、樽はそのまま置いておいて、持ち帰って食べるという関係ができるかもしれない。それがアートかどうかは分からないけど、クリエイティブな感じはする。

東北にいると、つくづく芸術ってなんだか分かんなくなってくるんですよね。最近思うのは、要は作家の名前があるかないかだと思うの。作家性が高くても、個人の名前が要らない作品がある。能も神楽も歌舞伎も演出家という概念はなくて、日本語にはかつては「芸術」という言葉さえなかった。じゃあ芸術がなかったのかというとそうじゃなくて、芸術という言葉すら必要なかったんだと思います。

アーティストだと自覚していない人のほうが、よっぽどアーティスティックだったんじゃないかな。えも言われぬ使命感で、どんなに眠くても疲れていても手を動かしてしまう。もしかしたら、自分は望んでいないかもしれない。じゃあ何がそうさせているのかと言うと、何か頭の上の一本の糸から一滴のしずくが垂れてきて、水滴が脳にぴちゃっと落ちたから。自分のためでもない、誰か具体的な人のためでもないかもしれない。たまたま自分の体を通したですよ。田植えも一度機械でやったあとに人の手で植え直して、一粒でもおいしくたくさん穫れるようにって精を出している姿を見ると、キャンバスに筆を当てるアーティストにしか見えない。風が吹いて田んぼ一面に風紋ができて、夕日が穂を照らす。蛙の声が聞こえてきたり、サギや見たことのない珍しい鳥が飛んで来たりする。その風景が僕にはインスタレーションのように見えるんですよね。人の手でつくった場所と自然が寄り添っていて、作品としては理想的だなって。

田舎は、とても豊かな生活の場だったんだよね。そこに憧れがなくなったのは、経済原理によって生産者の顔が見えなくなってしまったから。でも津波で田舎の価値が失われても、まちなかのようにはなれないし、なっちゃいけない。お金ではない価値で、都会の行き過ぎたテクノロジーをひっくり返してやりたいぐらいのことがあるんだと思う。そのためにはどうしたらいいのかということで悩んでいる。そのとき、技術ってすごく大事だなと感じます。

たとえば、ペンの持ち方や書くことは技術です。教えるとできるようになって、広がっていく。つまり輪が広がる技術がまずあって、これを使って何を書くかは個人の自由なんです。たぶんテクニックは、スキルに発展するんでしょうね。僕はいま、このテクニックを探している気がします。それは、もう既にあるんですよ、生活していた人たちのなかに。震災を機に気づいたことを言えば、田舎のお母さんたちは冬を越すための保存食のつくり方を知っている。都会のマンションに暮らす若いお母さんはつくれないですよね。漬物だったりしたら臭うしね。そしたら田舎に来てつくって、樽はそのまま置いておいて、持ち帰って食べるという関係ができるかもしれない。それがアートかどうかは分からないけど、クリエイティブな感じはする。

震災によって、田舎と都会の関係が顕わになった感じがしているんです。何もかも流されて、自分たちのアイデンティティの証拠が流れてしまったから。

僕自身は、狭間というか、田舎の入口にいると思っています。田舎に憧れのまなざしを向けながら、田舎の暮らしをするわけではないっていうね。

なんか最近暑いじゃないですか。北海道が一番暑いなんて、どうなってんのって感じだし、水不足や高齢化の問題が起こることはもう分かっていますよね。このまま土を踏まない生活でいいのか。ちょっとテクノロジーで行き過ぎてしまった生活を送る僕たちが、触れなければいけない自然がある。でもいまの生活を壊す必要はなくて、お金を使わなくても豊かになれるような循環を、みんなで少しずつ生活を不便にしていきながらつくる。そういった、一個人の作品ではなくて、人間としての大きなクリエイションに向かって行くんじゃないかと考えています。

震災以降、はっきりとした数値化はできませんが、まさに渚にしか棲息していない生物が現れてきている感じはしますね。田舎の人たちって考え方が固いし、自分の生活のなかにある価値に気づかずにやっていることが多いですよね。5年経って、その価値をひらくような可能性がちょっとずつ見え始めているような感覚はあります。

八巻寿文

［参考資料］

・谷津智里監修・編『東日本大震災後、4年目の語り。――7つのケース、宮城の9人の声の記録――』東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、2015

・八巻寿文「震災に向き合った創造の現場――せんだい演劇工房10-BOX」『シアターアーツ53号「特集：震災と演劇」』AICT（国際演劇評論家協会）日本センター、2012

・八巻寿文『文化審議会文化政策部会 東日本大震災集中ヒアリング（第1回）』文化庁、2012 http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/seisaku/10/shinsai/giijishidai_01.html



事業検討会議の様子（2011.8.4）

東北から思考する

佐藤李青

八巻さんは優しく、つぶやくように、核心を突く言葉を放つ。その言葉の強さは、物事の本質を見通すような問いかけの力にあるのだと思う。

震災後、八巻さんとは、指折り数えるほどしか会えていない。それでも、そのわずかな時間のなかで聞いた問いかけは常に頭の片隅で響き続けるものとなった。それは他者に伝えるものではなく、自らに向けて何かを確認する言葉にも見えた。そして、その背後には「この東北の地で何が可能か」という震災以前からの思考の積み重ねがあることを、今回のインタビューで知った。

2011年8月4日、仙台で宮城県の事業を検討する会議を開いた。えずこホールの水戸さんに声がけをお願いし、現地の状況を把握している方々に集まってもらい、初年度の事業を審議することが目的だった。このとき八巻さんは沿岸部での神楽の重要性と支援の必要性について熱弁をふるい、それによって津波で流出した舞台を再建する『雄勝法印神楽 舞の再生計画』に取り組むこととなった。この場を通して、東北における「芸術文化」の支援事業で、民俗芸能を対象にする意義を初めて理解することになった。*1。

けれど、八巻さんも震災への対応については、心理的に揺らいでいた。現場に近ければ近いほど、できることよりもできないことが見えてしまうのかもしれない。この時期、初動が早く、核心をもって活動している（ように見える）人も、誰もがどこか迷いがあった。いま、その経験は「置き去り」にされていないだろうか。八巻さんの問いかけが響く。そして、その揺らぐ気持ちを表現するには、方言が適していた。夜の時間は、よく方言が飛び交っていた。*2。

震災直後に立ち上がったARCVTのネットワークは、拠点を構えた10-BOXというプラットフォームと相乗効果を発揮した。10-BOXは演劇を「つくる」ための公立の文化施設として全国的にも注目を集めていたが、創造の場を共有した演劇人のネットワークの結節点となっていた。

震災直後から10-BOXでは、ホワイトボードやブログを介して東北の演劇人の安否情報を発信し続けた。10-BOXへの訪問者はARCVTと接続し、10-BOXに不可能なことも、ARCVTならば可能となった。逆の例もあっただろう。八巻さんは「同じほう

＊1　民俗芸能の価値は、地域の無形の文化財としての重要性と共に、そこに住む人々がその楽しみ方を知っている、生活の場に息づく文化であることにあった。その後、岩手県では鵜鳥神楽の支援も行った。鵜鳥神楽は「宿」と呼ばれる民家を巡って行われてきたが、津波によって多くの宿が被災。2011年は、その宿を軸に支援を行った。一度絶えてしまえば継承が困難な文化形式であるだけに、震災直後の迅速な対応が求められた。

＊2　あるインタビューで八巻さんは、支援者との会話で「頭のネジが海水でさび付いた感じの失語症になった。そのネジが急に滑らかに動いたのは東北弁に切り替わった瞬間からだった」と語っている。それは「仙台弁というよりイントネーション」であり、「言語が身体と思考を結びつけて楽に本音が出る」のだと言う。（八巻寿文「震災に向き合った創造の現場――せんだい演劇工房10-BOX」『シアターアーツ53号「特集：震災と演劇」』AICT（国際演劇評論家協会）日本センター、2012年、33-34頁）。

＊3　杜の都の演劇祭のプロデューサーであり、ARCVTの事務局長を務めた鈴木拓さんは震災直後より〝演劇的活動〟で支援する枠〟をつくるた

宮城県



2016.5.26

大河原町



ARC＞T事務所（2012.8.13）

を向いて走っているけど、レールは違う電車なんだ」と繰り返し語っていたという。それぞれの長短を活かした連携の背景には、震災以前から続く、官民の協働事業である『杜の都の演劇祭』の経験があった[*3]。

震災後に繰り返し指摘された「多様な主体の連携体制やネットワーク」とは、日頃の具体的な活動を通して形成されるのだろう。そして、震災後の活動は単一の活動や手法の成否を問うのではなく、それらの相互関係や地域の文化的な環境に目を向けることが、平時の知見として活かすためにも必要なのだと思う[*4]。

6年目という時間は、八巻さんの言葉を借りれば「渚」のような地点なのだろう。当事者にとって震災の経験は、未だに生々しいものだ。それは、もしかしたら、ずっとそうなのかもしれない。記憶の想起は、ときに暴力性を伴うが、その記憶の継承も、震災を経験したがゆえに切実さがある。

この地では津波は何度も繰り返されてきた。いまは、その回帰する時間のリレーゾーンにいるのだと話を伺いながら感じていた。



岩手県で支援を行った鵜鳥（うのとり）神楽。獅子頭で悪魔祓いをしている様子（2012.2.19）

めに「行政のバックアップ」が必要であると考え、そのスキームづくりを八巻さんに相談（3月21日に震災後の集まりを呼びかける関係者へのメールより）。震災以前から、杜の都の演劇祭の事務局拠点は10-BOXであった。この動き方が、10-BOXとARC＞Tの関係にも反映されていったのだろう。

＊4 たとえば、2014年の一般財団法人地域創造の『災後における地域の公立文化施設の役割に関する調査研究』では、「地域共同体の誰もが自由に参加できる入会地のような文化的営み」を「文化的コモンズ」と表現し、公立文化施設の役割を「地域で継承されてきた伝統芸能やお祭り、文化団体やアートNPOなど、様々な文化の担い手とも手を結び、文化的コモンズの形成を牽引する」ことを担うものと指摘した（同書、3頁）。このイメージは、10-BOXの働きと重なる。



水戸雅彦

みとまさひこ

えずこホール　館長

1956年宮城県生まれ。1996年
仙南芸術文化センター（えずこホール）
オープンと同時に仙南文化振興財団
事務局次長としてホールの管理
運営・事業の企画制作に携わる。
以後19年間、住民参加型事業、
アウトリーチ事業を中心に地域密着
型の各種事業を積極的に展開。
2006年4月、仙南文化振興財団の
運営から仙南地域広域行政
事務組合の直営に移行。現在、
仙南芸術文化センター館長（教育次長、
視聴覚教材センター所長兼務）。
2004年「えずこ芸術のまち創造事業」
が内閣府から地域再生計画の認定を
受ける。2007年えずこホールが
財団法人地域創造JAFRAアワード
（総務大臣賞）受賞。
宮城県文化芸術振興審議会委員。
http://www.ezuko.com

えずこホールは、震災から3日後に避難所でワークショップを始め、4月1日には貸館を部分再開、4月12日には無料公演を行い、6月11日には貸館を正常化させた。その初動の早さはどれも目を見張るものがある。なぜそれほど迅速に活動を再開できたのか。そこには、震災前からの「文化活動を通じてすべての人をいきいきさせたい」という水戸雅彦さんの想いと実践があった。

立ち上がれる人から立ち上がる

とても大変なことが起こったんですけれども、天災というのは長い間に必ず起こることであって、それに直面して萎縮や自粛をするよりは、何ができるのかを考えたほうがいいと思うんですよね。なので、いま置かれている状況のなかで何を選んで、何をすることがベストなのかをずっと考えていたように思います。「いつオープンできるんだろう」「建物の壊れた部分をどうしたらいいんだろう」「事業はどうしよう」ということばかりを考えていました。

えずこホール[*1]が避難所になったのは震災当日だけで、翌日からすぐ隣の大河原町総合体育館に移動して、そこの後方支援をしていました。近所の人も一部避難していたんですが、沿岸部の人も50人ほどいました。沿岸部の人はヘリコプターで吊り上げられて隣の仙南中核病院に運ばれたんですが、入院しなくていい人たちがこちらに来たんです。だからみんな精神的にも疲れて果てて、体ががちがちで、表情も硬かった。そのときたまたま長期滞在で劇団山の手事情社の岩淵吉能（よしのぶ）さんがアウトリーチをしていたので、「体をほぐすワークショップをやりましょう」という話になって、3日目から避難所でストレッチやマッサージ、コミュニケーションゲームな



＊1　えずこホール…宮城県仙南地域2市7町のための「住民参加型文化創造施設」。大ホール（802席）、平土間ホール（300席）、屋外劇場やスタジオなどがある。「えずこ」とは、東北地方で、「乳児を育てるために使ったワラ製のかご」を意味し、「地域文化を創造するゆりかご」という願いを込めて名付けられた。1996年に開館し、仙南地域広域行政事務組合が運営している。

どを始めたんです。9日後には、えずこシアターのメンバーも心と体をほぐすワークショップを開始しました。その後暫くしてからいろんな人が慰問に来てくれるようになりました。

えずこホールは、4月1日から会議室と練習室の最低限の貸館を再開しました。文化施設としての再開は、おそらく3県で一番早かったと思います。ホールも一部被害があったのですが、応急処置をして4月12日に二兎社(にとしゃ)*2の無料公演を開催しました。

震災当初さっぱり電話が通じなくて、3月20日くらいにやっと主宰の永井愛さんと連絡が取れたんです。震災前から公演の企画は計画されていたのですが、先方はまさかやるとは思ってなかったようで「もし可能だったらやりたい」とお伝えしたら、非常に驚いてらっしゃいました。あのとき既に東京で4公演がキャンセルになっていたんですね。だから被災地公演はあり得ないと思っていたようでした。うちの職員も「ほんとうにやるんですか?」といった反応でした。でも、こんなときだからこそ心の底から泣いたり笑ったりして、立ち上がれる人から立ち上がることが大切だと思ったんです。

そこで、高速道路が開通してからすぐに永井さんたちに来ていただいて、ホールの状況を見て、なんとかいけることを確認してもらってから公演開催を確定しました。そのあと被災地をご案内したところ、かなりショックだったみたいですね。その頃はようやく自衛隊が入って、最低限の道路ができたばかりで、津波の被害がそのまんま残っていましたから。

こんなときだからこそ心の底から泣いたり笑ったりして、立ち上がれる人から立ち上がることが大切だと思ったんです。

チケット予約を電話で開始したところ、2日も経たないうちに450枚がはけました。公演後は「生きる元気をもらった」「地震を忘れることができた」などいろんな声をいただきました。「初めて演劇を観た」という避難所から来た80歳の方もいらっしゃいましたね。まだまだ大変な時期でしたが、人が本気で何かに打ち込んでいる姿というのは、やっぱり胸を打つんですよね。さらに言えば、自分ではなくて人に尽くしているということに心動かされる。アートの重要な機能の一つは、そこにあると思いました。

震災で起きたことって、潜在化していたものが顕在化しということだと思うんです。つまり、あのとき約2万人の方が亡くなり、40万人ほどの人たちが避難するような状況に陥りましたが、常に社会のなかには、マイノリティの人たちが問題を抱えて、大変な精神状態で生きているんですよね。わたしたちは、常日頃そういう人たちはごく一部だと思っているけれど、こうした震災が起こるとあっという間に40万人の大変な問題を抱える人々が生まれて、自分もその一人になってしまう。しかしそうした状況に身を置くことによって、ほかの社会的なマイノリティの方々のことも、想像できるようになったんじゃないかと思うんです。「こんな大変なことがあるんだ」「こういうことをやろうとすると、こんな難しいんだ」ということに、たくさん直面したわけですよね。大変な状況ではあったけれど、わたしたちがこの社会で生きていく上で、必ずどこかでクリアしなければいけないハードルが露わになった。最初の1年間は、とにかくいろいろなことがあって、10年分くらいの体験をしたような気がしますね。

文明って一体何だろう、と何度も思いました。

文明って一体何だろう、と何度も思いました。信号機がなくてもね、大丈夫なんですよ。交差点付近になると、みんな減速して互いに気づかいながら走るから。渋滞にもならない。本当に必要なものって一体何だろうと思いました。そう考えると、必要な物ってあんまりないんですよね。東京も半年ぐらいは節電でまちが暗かったけど、まったく問題なかったですよね。1年後には何もなかったかのようにもとの明るさに戻ってしまいましたが、この忘れやすさというのは、社



＊2 二兎社…1981年に設立。主宰である永井愛の作・演出作品をプロデュースする演劇ユニット。自ら考える姿勢を演劇の場から発信し、観客自身を当事者にする「考えるエンターテインメント」としての作品をつくっている。震災直後は、『シングルマザーズ』を公演。公演当日は、ホールエントランスから庭園にかけて、鎮魂と希望の思いを込めて311本のキャンドルを灯した。
http://www.nitosha.net

会の在り方としてどうなんだろうと、いまでも考えています。

世界一貧乏な大統領として有名になったウルグアイのムヒカ前大統領が引用していた賢者の言葉があります。「貧乏な人とは、少ししか物を持っていない人ではなく、無限の欲があり、いくらあっても満足しない人のことだ」というものなんですが、あのとき、震災をきっかけに社会の価値観がそういうふうに転換していけばいいなと思いました。全国、全世界の人々が、困っている被災者のために行動した。あれが日常化したら世界は変わるでしょう。つまり、競争ではなくて、共生社会です。これは震災以前から思っていたことですが、現在の資本主義社会における競争主義の歪みが、いまの最大の問題だと思っています。

「社会包摂」との出会い

えずこホールが力を入れてやってきたのは、「アウトリーチ」という現場出張サービスです。2002年から開始して、2015年は合計115回開催。幼稚園、保育所、小学校、中学校、支援学校、高校、福祉施設、イベントなどとにかくいろいろな場所に行って、いろいろな人たちのもとへプログラムを届けました。

人はお互いの存在や能力を認め合って、一緒に何かつくることによっていきいきするんですよね。以前は、子供たちが一番重要だと思っていたんですよ。未来を創っていくのは彼らですから。でも最近は、障害を持った方もお年寄りもまったく同じように大切だと思うようになりました。お年寄りになると、動きは鈍いし、認知症が入っている方もいらっしゃって大変なこともあるんだけども、それでも同じようなことが起こるんです。もう、みんな笑顔になりますね。アーティストがどんな参加者であろうとリスペクトして、ちゃんと相手の目を見て、何かを引き出そうとすると、そういうことが起こるんだと思います。

介護保険の通所施設に演劇のワークショップをしに行ったときのことです。あるおばあさんがものすごく楽しそうに参加していたんですが、それを見ていた施設の人に「あのおばあさんは、毎日、死にたい、死にたいと言っている方なんですよ」と言われたことがありました。その方はお年を召してから失明してしまって、家族も失った方なんだそうです。その人がにこにこ笑っている。そのことが、いかに大切なことか。アートというのは、こうした日々の豊かさをつくる上で、とても有効なツールだと思っています。

アウトリーチを始めたのは、2000年に参加した「英国コミュニティ・アート研修交流ツアー」[*3]がきっかけです。ロンドンを中心にいろんなコミュニティアーツ団体や劇場を観て回ったんですが、どこでもソーシャル・インクルージョン（社会包摂）が当たり前で、本当に驚きましたね。特に、『ノッティンガム・キャッスル博物館&アートギャラリー』で伺ったキュレーターの話は目から鱗でした。

「我々は、5年ほど前に、バリアフリーについてすべて見直し大規模改修を行った。それは施設の建築上の話だけではなくて、自分はアートとは関係ないと思っている、民族や人種の問題、それらの意識のバリアこそが最も重要で、それぞれのようにクリアすべきかを考えた」と仰っていました。これは根本の考え方がまったく違うなと思いました。翌日のフォーラムでは、ノッティンガム市のスポーツ体育部長さんが、夕刻時、つまり「青少年が一番非行に走る時間帯にこそ、アートプログラムをやらなければいけない」と仰っていました。アートをやる目的の一つに非行防止がある。アートを提供するという意識ではなくて、地域にいる子供たちとどう関わっていくかという、広がりのある話をしているんですよね。さらに問題を抱えた子供とアーティストとソーシャルワーカーの三者で話し合いながらプログラムをつくっていて、とても参考になりました。

帰国してからは、ただアートを届けるのではなくて、それぞれの施設とプログラムを一緒につくって、その場所にいる人たちにとって意味のあるものをやろうと決めました。ちょうどその頃、財団法人地域創造（当時）が地域公共ホール音楽活性化事業としてアウトリーチの普及事業を始めたばかりだったので、その文脈でアーティスト派遣を開始しました。

ジャンルや手法は何でもいいと思うんですよ。参加者のクリエイティビティを引き出すことができれば。こちらが何かしてあげるのではなく、施設や参加者と協働してできることをやるというのが基本姿勢。何かを提供することによって、それに対するものが返ってきて、結局我々がいろいろなものをもら

＊3　英国コミュニティ・アート研修交流ツアー…クリエイティブ・アート実行委員会主催。ノッティンガム・キャッスル博物館&アートギャラリーほか、劇場、コミュニティ・アート団体など7ヵ所を視察した。



宮城県柴田郡大河原町白石川

っているんですよ。そういう関係性のときは、いいことが起きる手応えがありますね。そして、やはりアーティストの存在は不可欠ですね。アーティストは独特の視点を持っているので、これまで気づかなかったものに気づかせてもらえる。特に最初の頃からご一緒している藤浩志[*4]さんは、一緒に歩いているだけでどんどんイメージが湧いてくる方だなと思います。

２０１４年に開催した『忘れないための被災地キャラバン』[*5]では、被災地の復興に向けて、遺構を残す・残さないということについて議論しました。白か黒かみたいな話なんですが、そこで藤さんは、グレーじゃなくて「虹色みたいな回答があってもいいんじゃないか」と言い出したんです。たとえば、古墳のように埋めてしまって数１００年後に掘り出すとか、骨組みだけ残して周りを新しいものにするとか。震災遺構というのは、なるべく見たくないという人もいますが、それを撤去してしまうことによって、記憶が風化してしまう。実際どんどん撤去されていっていて難しい問題なのですが、藤さんの話を聞いて、そうか、まったく違う発想をすればもっと可能性があるのだなと思いました。一般的な議論は、残すか残さないかどちらかですよね。二者択一の視点だけでは、何も見えないよなと思いました。

社会機関としての文化施設

復興支援の区切りは、1年目が過ぎたときに感じました。支援のうねりが収束してみんな日常生活に戻っていって、細々と続くものは続いていくという状況に変わっていったと思います。3年目は、介護関係の人が去っていきましたね。その次は、5年目が終わった現在です。

震災後、文化政策の立場から重要だと思っているのは、やはり「社会包摂」です。まず、文化施設すべてが社会機関であるべきだと思うんですよ。社会機関というのは、学校や病院、警察など社会を成り立たせる上で必要な公共機関。残念ながら現在は、文化施設は社会機関だとは思われていません。つまり、余裕がある人、時間やお金がある人が娯楽や教養のために利用する施設だと思われている。でもそうではないと思うんです。すべての人が文化活動を通していきいきすることによって、社会が豊かな状態になっていく。このことは劇場法には書いてありませんが、文部科学大臣指針[*6]では謳われていて、文化審議会の答申のなかにもある程度書かれていることです。

社会包摂って、まだ日本では誤解されているところがあって、福祉政策と勘違いされている方もいるんですよね。つまり、障害などを持った人に文化的な体験を提供するというような。そうではなくて、社会包摂とは、社会にいるすべての人にアクセスすると同時に、すべての人がアクセスできる環境を整えていくということ。障害の有無や国籍、人種、性別、年齢などに関係なくあらゆる人たちに対して開き、何かを一緒にできる環境をつくっていこうとする考え方なんです。まず、この考え方や態度そのものを当たり前にしていく必要があると思っています。

たとえば、貧困や犯罪というのは、個人の問題なのか社会の問題なのかという問いがあります。個人の問題だと考える人は、「自己責任」だと言うでしょう。でも、それだけでは解決できない問題がいっぱいあるわけです。それを社会の問題として捉えて、社会全体で解決していこうと働きかけていくことによって変わっていく問題がたくさんあります。

**すべての人が文化活動を通して
いきいきすることによって、
社会が豊かな状態になっていく。**

グラスゴーの劇場では、『プリズンプロジェクト』というものがあります。刑務所に入っている受刑者の人たちは、文字の読み書きができない人が少なくなくて、社会に出てもまともな生活が送れずまた戻ってくるケースが多いそうなんですね。そこで、演劇を通して文字や言葉を学んで、表現を通して自分のアイデンティティを再確認して社会に戻るというプロジェクトです。一人の囚人に年間約5万ポンドの予算がかかっていて、二人の囚人が社会復帰すればそれでペイする仕組みだそうです。社会コストを下げながら、長期的に収監率・犯罪率も下がっていく。これはまさに社会機関として、アートが社会をよくする



ぐや記録冊子/

＊4　藤浩志：美術家。１９６０年生まれ。京都市立芸術大学在学中演劇活動に没頭した後、地域社会を舞台とした表現活動を志向し、京都情報社を設立。全国各地のアートプロジェクトの現場で「対話と地域実験」を重ねる。同大学院修了後パプアニューギニア国立芸術学校勤務。都市計画事務所勤務を経て１９９２年藤浩志企画制作室を設立。地域資源・適正技術・協力関係を活かした美術表現を試みる。秋田公立美術大学教授。ＡＳＴとして最初のプログラムである「藤浩志とカンがえるワークショップ」（２０１１年）に参加し、その様子は『見る、聞く、話す、感じる、そして考える』（藤浩志＋えずこホール編、２０１３年）としてまとめられた。その他、ＡＳＴの福島県のプログラムなどにも参加。
http://geco.jp

＊5　忘れないための被災地キャラバン：２０１４年11月22日、小山田徹（美術家／京都）鶴見幸代（作曲家／沖縄）、藤浩志（美術家／福岡）、マルチナス・ミロト（ダンサー／インドネシア）と、公募による参加者が集ったキャラバン。バスに乗り込み、宮城県女川町、石巻市雄勝、南三陸町歌津などを巡り、翌日にその経験について語り合った。
http://taiwakobo.jimdo.com/2015/05/17/忘れないための被災地キャラ

＊6　文部科学大臣指針：「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」（平成24年法律第49号）の第十六条に、「文部科学大臣は、取組に関する指針を定めることができる」とあり、翌年「劇場、音楽堂等の事業の活性化のための取組に関する指針（平成25年文部科学省告示第60号）」が出された。指針では、「地域の文化拠点」「社会参加の機会を開く社会包摂の機能を有する基盤」「新しい広場として、地域コミュニティの創造と再生を通じて地域の発展を支える機能」「国際社会の発展に寄与する世界への窓になる」「国民の生活においていわば公共財ともいうべ

ためにやっているプログラムだと思います。こうしたことを日本でもやっていく必要があるなと感じますね。

文化・芸術という枠内だけの話ではなく、人がただ単に生きるためじゃなくて、豊かに暮らそうとする営みが、いかに重要かというのは震災によって痛切に感じました。社会をつくっているのは人なわけで、その「人」がクリエイティブになったら、社会はとても豊かになるはずですから。

1990年代頃から「クリエイティブ・シティ」や「クリエイティブ・インダストリー」ということが言われてきましたが、最近では「クリエイティブ・エデュケーション」ということも言われ始めて、クリエイティブな人材をつくるということがとても大切だということが少しずつ共有されてきたと思います。わたしたちの事業もその意識でやる必要があると思いますね。つまり、社会を変えていくためのアートです。変えていくと言うとおこがましいですね。よりよい社会になっていくためのアートと言うんでしょうか。

えずこホールとしては、まずは自分たちのいる地域で、社会包摂を実践していきたいと思っています。ワークショップ、アウトリーチなどの参加体験型、社会包摂型の事業は、やればやるほど手応えがありますから、ホール職員のモチベーションの向上にもつながっていきます。

2015年度は、合計4162人にワークショップを体験してもらいました。これまで15年以上やってきて、820回、3万7000人以上の人たちに参加していただいています。あと10年くらい続けると、参加者が8万にくらいになって、そうすると人口の約50%の人がえずこホールの参加体験型事業に参加したことになる。そうすると少しみんなの意識が変わってくるだろうと思いますね。

特に、小・中学校の間に文化に対する感動体験をした子供は、大人になってからの意識が絶対違うと思います。逆に言うと、子供の頃にそういう体験をしていないと、大人になってからはなかなか変わらない。だから、子供たちに対しては、積極的に場をつくっていきたいと思っています。そうじゃないとこの社会は何も変わらないし、もういいかげん変わっていかなければいけない。

き存在」といった文言によって、これからの劇場、音楽堂等の取り組みの方向性が示されている。

えずこホールとしての展望

少し飛んだ話になりますが、芸術や文化って、宇宙と人との交信から生まれるものだと思うんですよ。宇宙っていうと広大無辺に感じられるのですが、わたしたちを取り巻く世界全体です。我々を取り巻く世界にはすごいエネルギーや振動のようなものがあって、それをアーティストたちが敏感なアンテナで感じ取り、自分のフィルターを通して体現したものがアートではないかと思うんです。

たとえば、きっと八巻寿文[*7]さんも同じようなことを考えていると思うんですが、お神楽というのは、神との対話だと思うんです。あまねく宇宙のリズムを神楽師が受け取って神と踊るというのを、あの様式のなかで表現している。これは神楽だけではなくて、ほかの民俗芸能にも、さらにはすべてのアートに通じる在りようです。このようなふるまいを自覚的にやっているかどうかは人それぞれですが、アーティストは何かしら意識をしていると思うんです。「自分が考えたんじゃなくて、自然に突き動かされるようにして出てきた」というのは、まさにそれだと思う。シャーマンのような存在ですよね。

民俗芸能はものすごく重要だと思います。かなりの数が消えていってしまっていますが、しっかり残すべきだし、同時に体験できる場もつくる必要があるなと感じます。アート全般についていえば表現方法、アウトプットが何であれ、その根幹にあるバイブレーションのようなものは通底している。古典芸能も民俗芸能も現代アートも同じ。そういう意味では、対象や方法論は何でもいいかなとも思っています。

えずこホールとして意識しているのは、0歳から100歳までのメニューをどこまで用意できるのかということです。きっかけは何でもいいから、文化やアートに触れる機会をどれだけたくさん用意できるかが重要だと考えています。だから、アウトリーチに関しては、ジャンルなどはあまり気にしていません。どんなジャンルでも、おもしろいものはいっぱいありますからね。ただ、ホールとして開催している公演事業に関しては、なるべく質の高い優れた舞台を提供していきたいと思っています。

＊7　八巻寿文…P28へ。ふたりには長い付き合いがあり、震災後はすぐに声を掛け合い、一緒に車で沿岸部の視察にも行っている。

ホールとして、この規模でこれだけのアウトリーチをやっているところは、たぶんあまりないのではないかと思います。とりあえず、ダンスや音楽などのジャンルごとの担当は決まっていますが、現場は全員でやらないと回せないですね。1日3本やる日もありますから。8人の事務局スタッフで3本やるということは、ホールに2人くらいしか残らない。あとはみんな外に出てワークショップをやっている状態です。

これからは、単発のアウトリーチから「アーツ・イン・エデュケーション」にも取り組んでいきたいと考えています。アーツ・イン・エデュケーションは滞在か通い型でアーティストがしっかり入って、プログラムを段階的に組んで、深い体験となるよう展開をする仕組みです。実は、2015年に1本だけやったんですよ。幼稚園から小学校6年生まで、全学年に3回ずつ通って、最終的に学習発表会で全学年揃って演劇をつくりました。やはり現場での手応えが違いましたね。

人口減少というのは、ある程度のところまで行くと止まると思うんです。

地域に対する誇りと文化

震災から5年が過ぎて、少子高齢化はどんどん進んでいます。特に沿岸部は、震災によって大きく加速しました。

でも、どうなんでしょう。人口減少というのは、ある程度のところまで行くと止まると思うんです。

そのために必要なことは、「地域に対する誇りと文化」です。この二つがあれば、人口減少はどこかで止まるはずだと思います。それをどうやってつくっていったらいいのか…。特に沿岸部は、高台移転と転出で、地域を出て行った人たちが多くて、これから本当にどうなってしまうんだろうと不安に思います。えずこホールのある仙南地域も同じように、人口減少は進んでいます。でもやはり文化やアートの活動形態がどんどん変わってきているなかで、施設自体のあり方もそれに合わせて変えていく必要があると思います。

ヨーロッパでは、数々の重工業都市の衰退を再生したのは、文化プロジェクトです。また、社会包摂事業を中心に、さまざまな社会機関と協働して、アートを使って社会課題を解決していく取り組みがたくさんなされています。そうしたイメージをわたしたちが持てるかどうか。

これから日本の少子高齢化や過疎化に最も有効なのは、文化・芸術だと思います。文化投資こそが、地域を活性化する可能性があるツールです。そのような考え方を基本に、日々の活動に取り組んでいきたいと思っています。

水戸雅彦

＊8　座・高円寺…舞台芸術の創造と発信、及び、地域に根ざした東京都杉並区の文化活動拠点。演劇やダンスなど舞台芸術作品の上演、ワークショップやレクチャーなどの教育普及活動、国内外の劇場とのネットワーク事業を軸に、芸術文化の振興を図るための多彩なプログラムを展開している。伊東豊雄設計で、演目によって自由に舞台・客席形状を変えることができる「街の広場」をコンセプトにした新しいかたちの小劇場。
http://za-koenji.jp

［参考文献］
・海子揮一編『忘れないための被災地キャラバン』みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会・東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）・えずこ芸術のまち創造実行委員会、2015
・水戸雅彦「えずこホールと大震災と『シングルマザーズ』無料公演」『演劇と教育 no. 637』晩成書房、2011
・"EZUKO HALL ANNUAL REPORT 2015.04-2016.03 仙南芸術文化センター（えずこホール）平成27年度事業報告書』えずこホール（仙南芸術文化センター）・えずこ芸術のまち創造実行委員会、2016

施設がほんとうに地域の人から愛される拠点になってさえいれば、それだけでもまちを活性化していく十分な資源になれる。それをしっかりつくっていくべきだし、つくっていきたいと思います。

しかし、震災が起きたというのに、まだまだ消費文化への執着が根深いですね。いまも県内に2000席のホールをつくろうという話が出ているんですが、そんな発想はどこから出てくるんだろうと思います。1年間に2000人も入る催しなんて数えるほどしかありません。地域のことを考えると800席、最大でも1200席で足りるはずなんです。むしろ必要なのは大きなホールではなくて、ワークショップ室やスタジオ、練習室など市民が日々のなかで様々な用途で使える場所です。あとは、文化は関係ないと思っている人が集まれるような憩いの場。震災が起きたというのに、まだまだそうした消費文化的な動きがあります。

これからは『座・高円寺』＊8のような、座席が全部可変でいろいろな組み方ができるスペースなんかがおもしろいなと思いますね。発想次第でどんなふうにもなる。もう旧来型の施設はいりません。文化



南三陸町の風景（2011.6.29）

境界を越えて動く

佐藤李青

最初にえずこホールの震災直後の動きを知ったのは、Twitterだった。震災直後から現地の動きはSNSを通して、ほぼリアルタイムで共有されていった。[*1]

この時期、メディアは連日のように被災状況を伝え、（特に被災地の外の）関係者の間では、「芸術や文化に何ができるのか」という議論が交わされていた。そのなかで、えずこホールの初動の知らせに触れた多くの人々は、心強く思ったことだろう。緊急時においても、「いつも通り」の芸術文化活動は必要である、と。[*2] 水戸さんならば、「こういうときこそ必要だ」と言いそうだが。

それから、数ヵ月後、えずこホールが主催する『藤浩志とカンがえるワークショップ』に参加した。2011年6月28日と29日の二日間をかけて、美術家の藤浩志と宮城県内の沿岸部をバスで巡った。同年9月2日から続編を開催し、それはASTTにとって最初の事業となる。ワークショップとはいえ、参加者は造型物をつくるわけではない。現地の状況を見て、人々の話に耳を傾け、いまとこれからのことを共に考えた。

女川町では震災以前にまちづくりを担っていた世代が「これから数十年後のまちをつくることになる。そのとき自分たちはいない。だから、お前たちがやれ」と次の世代にバトンを渡していた。そして、それを引き受けた人々は祭りの準備を始めていた。「復興したから祭りをするのではない。祭りをするから、復興するんだ」という言葉が記憶に残っている。

このときは、女川町から南三陸町まで宮城県沿岸北部を巡った。同じ県内でもえずこホールがある宮城県南部の仙南地域から、車で2、3時間ほどの距離がある。えずこホールは震災直後に県内各地の支援のため、運営母体の実行委員会で2市7町の圏域を超えた活動を認めていた。それゆえ、わたしたちとも早い段階から話を始め、県全体の事務局として活動を進めていくことができた。

これらの迅速な行動は、震災以前から「社会包摂」を理念に掲げ、積極的な地域での多数のアウトリーチに象徴的な実践の延長線上にあるのだろう。それは、えずこホールが「文化施設」という物理的な器のみならず、「社会機関」としての役割を果たそうとしてきた活動の成果が現れたに過ぎないとも言える。震災は、それ以前からの実践の真価を顕在化させた。

＊1 たとえば、ダンスカンパニー・珍しいキノコ舞踊団は、2011年3月15日にTwitter上で「キノコは宮城県のえずこホールという劇場で公演をしたことがあり、昨日メールで被災状況をお伺いしたところ、ライフラインも止まっている劇場で避難されてる方と演劇のWSをしているとと！　厳しい状況の中のその行動に大変感銘を受けています」というツイートをしている。（https://twitter.com/strangekinoko/status/47612409480880128）。

ARCVTは、設立のきっかけとなった「東北復興に向けての舞台人会議」から毎回の定例会をUstreamで配信。それによって全国各地の賛同者や支援者、担い手を増やすこととなった。

＊2 震災の影響で4日間公演を中止した野田秀樹氏は、2011年3月15日の公演再開にあたって「劇場の灯を消してはいけない」という舞台挨拶を行った。同年4月12日に近藤誠一文化庁長官（当時）は「当面の文化芸術活動について」において、自粛等により文化活動が縮小することを懸念し、その活動の復興との関わりと意義を述べ、文化庁は自らの取り組みを積極的に実施するというメッセージを発した。震災直後の文化活動は、常にその実施の是非が議論された。

また、阪神・淡路大震災を経験し、その教訓を論じた端信行氏は、美術館を例にその活動再開は「自分たちの地域における美術活動の拠点が活動を再開したというメッセージをもつ」と指摘した（端信行「6 芸術文化の復興 63 芸術文化施設の本格的復興」ひょうご震災記念21世紀研究機構災害対策全書編集企画委員会編『災害対策全書3 復旧・復興』ぎょうせい、2011年、260頁）。

＊3 川原さんのインタビューに登場したように行政の事務業務等の復旧に伴い、多くのNPOは「平時」の成果が求められるようになった。岩手県で発生したNPOの公的資金の不正利用は、その動向を後押しした。現場レベルでは担当者間の柔軟な制度運用が（現場の実質的な復旧が進まないなかで）厳格化する契機となる。復興への取り組みは「特例」となり、それゆえ、平時の回復は震災後に拡張した事業の新たな動き方を許容しづらくなっていった。震災後の現場の実践が制度の検証（変化）まで届かないという、八巻さんの指摘した「置き去り」になる状況とも重なってくる。



女川町でのヒアリング（2011.6.29）

水戸さんは、わたしたちにとって水先案内人のような存在だった。行くべき現場に誘い、出会うべき人と出会わせ、知るべき情報を教えてくれる。そして「宇宙」の視点からものごとを語る。その言葉には若干の怪しさが伴うが、この地球で人が生きるという本質的な事柄に目を向ける姿勢があった。

インタビューは、震災前後の変化を問うことから始めた。だが、水戸さんの回答は「天災は長い間に必ず起こること」だから、そのときは「萎縮」せずに「何ができるか」を考えたほうがいい、という不変的なものだった。わたしたちは日々の実践の意義を、こうした自負心をもって語ることができるだろうか。

震災は、無数の境界線を生んだ。それ以前から潜在化していた課題が姿を現し、新たな分断も生まれた。そして、復旧による日常の回復は既存の境界内への揺り戻しも内包していた。[*3] それらは裏を返せば平時のあり方を問うものであったとも言える。水戸さんらの震災後のしなやかな機動力は、わたしたちの日常の再構築へ向けたよき問いかけになるだろう。



女川町の風景（2011.6.29）

福島県



2016.6.11

会津若松市

data 2

震災直後、宮城の演劇人の動き

震災前までに積み重ねてきた実践を引き継いで、すぐにアウトリーチを始めたえずこホール。場を提供し、被災地の最前線へ向かう人々にとっての拠り所となった10-BOX。舞台やホールなど演劇人のフィールドは、文化を糧に復興を模索する基地となった。

えずこホールと10-BOXとARC＞Tの3ヵ月

3.11 **東日本大震災発生 M9.0 震度6強**

3.12 **東京電力福島第一原発1号機水素爆発。半径20km圏内に避難指示**
閣議決定「激甚災害」に指定

3.13 ［えずこ］大河原町総合体育館でアウトリーチ開始＊本文P47参照

3.20 ［えずこ］シアターメンバー自ら「心をほぐすワークショップ」を開始

3.21 鈴木拓（後のARC＞T事務局長）が仙台の舞台関係者へ「意見募集」のメールを発信

3.24 ［10-BOX］震災前から予定していた榴岡児童館にてアウトリーチを実施

3.25 ［えずこ］各地から慰問に訪れてくれる人が来るようになる＊1

3.25 「東北復興に向けての舞台人会議」開催のお知らせが呼びかけ人よりメール配信

3.28 ［えずこ・10-BOX］八巻・水戸さんらが亘理・山元・石巻方面沿岸部を視察＊2

3.29 第1回東北復興に向けての舞台人会議開催＊3

3.31 第2回舞台人会議開催

4.1 ［えずこ］限定でホール貸館再開

4.4 第3回舞台人会議開催にて、ARC＞T（Art Revival Connection TOHOKU）発足＊本文P34参照

［10-BOX］24時間開放するスペースを設け、支援者の案内所に＊本文P34参照

4.6 ARC＞Tメンバーによる「出前」活動開始

4.7 **宮城県沖 M7.4の最大規模の余震発生、最大震度6強**

4.11 ［10-BOX］「仙台10-BOX支援隊」がボランティアに訪れる＊4

第4回舞台人会議定例会開催

4.12 ［えずこ］二兎社「シングルマザーズ」公演＊本文P48参照

4.28 **宮城県が応急仮設住宅への入居を開始**

5.1 ［10-BOX］利用再開、開放スペースを「月と太陽の広場」と名付ける

5.16 ［10-BOX］再開後初の公演、すんぷちょ「Midorigo」

6.11 ［えずこ］ホール機能がほぼ回復、貸館正常化

＊1…2、3日に一度、浅野翔（津軽三味線奏者）ほか、各地から慰問者が訪れるようになった。主に地元の団体で、合唱や合奏が多かった。
＊2…10-BOXの公用車が仙台市の緊急車両扱いになり、ガソリンの調達が可能となり、沿岸部へ視察に向かう。車には水やマスクのほか、たくさんの絵本とおもちゃを積み込んだ。避難所になっていた体育館の隅に設けられていたキッズスペースにて読み聞かせを行った。
＊3…「表現者に何ができるか」との問いかけを受けて、32人の演劇人が集合。熱気を帯びた会場の様子は、Ustreamで生中継され、世界中からTwitterで意見や励ましが届いた。
＊4…東北各地の上演がほぼ中止になっていた、劇団青年座のメンバーが来仙。ほかにも10-BOXと交流のある演劇人が遠方から多数駆けつけた。一行は、地震で散乱した10-BOXの片付けや津波で被災した演劇人の自宅の泥かきなどに従事。その後も、全国各地から演劇人の助っ人が訪れた。

えずこホールの初動

震災からわずか3ヵ月で、ホールを正常化

復旧工事は、国の災害復旧事業の認定を受けて着工するのが一般的な手順だ。しかし内定を待っていては時間がかかる。そのため、災害復旧事業において事前着工が認められていることを確認し、震災前から予定されていた別の工事の費用を充てて、ホールの改修を発注。その後、災害復旧事業に内定したことを受け、予算の補正を行った。

震災2日後から、避難所でアウトリーチを実施

震災後の混乱のただなかにあって、アーティストが、体育館で避難生活をしている人たちに向けてワークショップを開催。この瞬発力ともいうべき対応の早さには、過去10年間で行なってきた、アウトリーチの積み重ねがあった。

2001年度	7回	350人
2002年度	7回	350人
2003年度	19回	950人
2004年度	34回	1,957人
2005年度	38回	2,633人
2006年度	22回	2,071人
2007年度	22回	2,472人
2008年度	43回	2,887人
2009年度	32回	1,227人
2010年度	93回	2,356人

＊すべて参加延べ人数。2001〜2003年は約で算出 ／仙台以南の県南地域の市町村全域で開催。開催場所は、小中高、支援学校、福祉施設、病院など多岐にわたる。音楽、ダンス、伝統芸能、演劇などのさまざまな分野のアーティストが、日頃芸術や文化に触れることが少ない場所に出向き、アートを体験するプログラムを届けてきた。

出典…水戸雅彦「まちに出て、文化芸術で連携・共助（仙南）」『文化芸術による復興促進コンソーシアム構築に係る事業調査研究報告書 東日本大震災、文化芸術の復興・再生の取り組み――被災と支援の実態調査と事例からこれからを考える――』文化芸術による復興推進コンソーシアム設立準備事務局、2012
伊藤み弥・鈴木拓編『Art Revival Connection TOHOKU Report アートリバイバルコネクション東北活動報告2011.3-2012.4』（準備稿）ARCT、2016



小林めぐみ

こばやしめぐみ

福島県立博物館　学芸員

福島県出身。早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了。1996年より福島県立博物館に勤務。専門は美術工芸。2010〜2012年、会津の文化資源である「漆」をテーマとした『会津・漆の芸術祭』を企画・運営。東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所事故後は、『いいたてミュージアム（いいたてまでいの会）』、『はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト（はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会）』、2012年〜『福島藝術計画×Art Support Tohoku Tokyo（東京都／福島県）』、『喜多方・夢・アートプロジェクト（喜多方市）』など、文化・芸術による福島の復興と再生を目的とするアートプロジェクトに携わっている。
http://www.general-museum.fks.ed.jp

福島県は、日本で2番目に大きい県だ。浜通り、中通り、会津と呼ばれる3つの地域は複数の文化圏を内包し、豊かな海から鬱蒼とした森まで多様な自然環境を擁（よう）している。震災と原発事故後、小林めぐみさんは、次のインタビューに登場する川延安直さんとともに、その広い福島を駆け巡り、いたるところに文化の種を蒔いている。いったい、どんな想いが二人を動かしているのだろうか？

博物館を読み直す

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故があったことで、人と自然がどう関わったらいいか、もう一度考えなくてはいけないと思うようになりました。それを博物館として、学芸員としてどのように実現していくか。この5年間、アートを仲立ちにできることを探っています。

もともと2007年に赤坂憲雄[*1]館長が「開かれた博物館」というコンセプトを掲げたのをきっかけに、作家さんに関わってもらって「博物館を読み直す」ことに取り組んでいたんです。当時、館長は東北芸術工科大学にも在職していて、作家さんが関与することでどんなことが起こり得るか、ご自身が実感として知っておられたんですよね。同時に地域とつながることの意義も理解しておられて。それでわたしたちの作家と協働した博物館活動や、館外での活動を後押ししてくれました。

いまでも福島県立博物館（以下、県博（けんぱく））の美術以外の分野では、作家と協働することに抵抗感がある方もいらっしゃるんですが、わたしたちは彼らのまなざしを貸してもらうことで、博物館の持っているものをまた別のかたちで伝えられると思っています。それが2009年に『岡本太郎の博物館〜はじめる視点〜』[*2]という企画展となり、博物館を飛び出し

＊1　赤坂憲雄…民俗学者。1953年、東京生まれ。東京大学文学部卒業。東北芸術工科大学教授、同大東北文化研究センター所長などを経て、2003年より福島県立博物館長を務める。学習院大学教授。民俗学、日本思想史を研究。1999年『東北学』を創刊。2011年4月、東日本大震災復興構想会議委員就任。5月、福島県復興ビジョン検討委員会委員就任。6月、南相馬市の復興ビジョン会議委員就任。著書に、『岡本太郎の見た日本』（ドゥマゴ文学賞、芸術選奨文部科学大臣賞受賞、岩波書店）、『東北学／忘れられた東北』『岡本太郎という思想』（講談社）ほか多数。

＊2　岡本太郎の博物館〜はじめる視点〜…2009年、芸術家・岡本太郎が撮影したモノの写真展示

て『会津・漆の芸術祭２０１０〜２０１２』[*3]となりました。

２００７年以降の活動の背景として、だんだん博物館の入館者数が減ってきたことがあります。目玉の巡回展はたくさん人が入るんですが、日常的に博物館に来る方が自然と減っている感じがありました。これは、映画館や古本屋がまちから姿を消しているのと根っこが同じなんじゃないかと思っています。インターネットなどによって存在感が弱まってしまったこともあるでしょうが、学びや文化に関わるスタイルが変化したんだと思うんですよね。つまり、わたしたちの力不足もあったかもしれませんが、時代や世代の変化とともに、博物館の役割が変わってきているのかもしれないと考えるようになりました。そこで、博物館が本来持っているオーソドックスな役割を読み直したり、活動の場を外に出していく方法を模索し始めたんです。

２０１０年の「会津・漆の芸術祭」は、会津の文化資源である「漆」をテーマに、博物館の収蔵品や研究結果を作家さんの表現を通して伝えるという試みでした。それによって、会津の誇るべきところが伝わったり、地域の文化度が上がって、まちが元気になったらいいなと考えていたんです。

でも、東日本大震災が起きて、もう単純に２０１０年と同じ開催目的ではできないと思った。会津は、浜通りや中通り[*4]と比べて被害が少なかった場所です。そのため多くの方が避難しに来ていたんですが、２０１１年の夏ぐらいから、会津の人たちから「会津は大丈夫」という声が聞こえ出して、わたしは、それがすごく嫌だったんです。そこには「会津は、中通りや浜通りとは違う」という区別の意識が隠れている。「そうじゃないでしょう」といまもずっと思っています。体力が残っている会津が中通りや浜通りを支えるべきじゃないか。そうした考えから「会津・漆の芸術祭２０１１」のテーマに「東北へのエール」を掲げ、芸術祭がその受け皿となることを目的にしました。こうして携わっている活動の転換を重ねながら、「福島県」の博物館として何をするべきか、考え続けてきたんです。

この5年間、福島県内で様々なアートプロジェクトに携わり、たくさんの声をお聞きしてきました。なかでもわたしの胸にずっとあるのは、全村避難をしている飯舘村の方に言われた一言です。「わたしたちは避難させられ、土地と離され、自分たちが守



と併せて、福島県内の考古資料・民俗資料等をふくしまけんぱく版「東北の太陽の塔」として展示。同時に『博物館から覚醒するアーティストたち』として、様々な表現ジャンルのアーティストに博物館を解放。時空を超えたアートが交差し、「はじめる視点」を問うた。

＊3　会津・漆の芸術祭：福島県立博物館が主体となり、２０１０年より計３回開催。会場は、会津若松市・喜多方市の店舗内や空き蔵など。漆文化を仲立ちとして、人と自然との関係を結び直し、歴史の深さと文化の豊かさ、そしてまちの魅力を伝えることが目的。漆職人や漆芸作家だけでなく、現代アーティストも参加した。
http://www.aizu-artfes.gr.fks.ed.jp

＊4　浜通りや中通り：福島県は、

ってきた文化が途絶えそうになっている。自分たちだけではどうにもできない。だから専門家に助けてほしい」と強く言われたんです。わたしたち学芸員は、博物館は、文化に関する専門家じゃないですか。「ここで役に立たなくてどうするんだ」と、この言葉を投げかけられてからずっと思っています。

博物館や美術館って、どんな人でも同じ立場になれるようなところがあると思うんです。そう感じたのは、「会津・漆の芸術祭」のときでした。会津の漆業界って、ヒエラルキーがあって商店さんと職人さんに二分されているところがあるんです。すごい技術を持つ職人さんがたくさんいるのに、あまり表に出てこない。県博で工芸を担当するようになって多くの職人さんに出会うなかで、もっと彼らの技術の高さを外に出したいと思うようになって。それが「会津・漆の芸術祭２０１０」を行った理由の一つです。そうしたら、「博物館がやってることだから仕方ないな」と、商店さんも職人さんも芸術祭という土俵に乗って、同じ立場で話してくれた。これは、きっと別の状況でも同じような効果を生み出すことができると感じました。

震災と原発事故後、福島では様々なものごとに関する意見の違いや分断が数え切れないほど起きていますが、対立している意見を同じ土俵に乗せる場所として、博物館は機能するはずだと考えています。賛同できるかどうかは別にしても、どんな人がいて、その人がどんな考えでどんなことをやっているかを互いに知るだけでも、十分に意味がある。これは、美術館や劇場などの「文化施設」と呼ばれる場所が持つ可能性であり、新しい役割なのではないでしょうか。

森に生きる文化

震災後すぐにＡＳＴＴの事業としてはじめた『週末アートスクール』[*5]は、２０１１年に実施を予定していて中止となった福島県主催の事業「奥会津アートガーデン」の準備実績をベースとしました。２０１２年からは福島県も主催に加わり、２０１３年までの2年間充実したプログラムを展開しました。その事業を通して、会津のアートプロジェクトの運営体制が成熟していったなという感じがしています。「週末アートスクール」の実績が、森林文化を活用した『森のはこ舟 アートプロジェクト』[*6]につなが



奥羽山脈と阿武隈山地によって、南北に分断するかたちで「浜通り」「中通り」「会津」の３地域に区分されている。東京電力福島第一原子力発電所事故は、沿岸部の浜通りから順に、直接的な被害が大きいとされている。

＊5　週末アートスクール：東日本大震災で被災した方を対象にした、喜多方市、西会津町、三島町で実施した一泊二日のアートスクール。会津の豊かな自然や文化に触れながら、アーティストとともにクリエイティブな週末を体験してもらった。２０１１年はＡＳＴＴの単独事業、２０１２〜２０１３年は、福島藝術計画×ＡＳＴＴとして実施。

＊6　森のはこ舟 アートプロジェクト：美しい自然と人々が愛しみ育ててきた豊かな森林文化から、福島の再生を考え、学ぶことがテ

っているんです。

これまでのアートプロジェクトの目的は、「震災で起こったことにどのように応答していくか」ということでしたが、年々、福島の課題に文化的に向き合うには長い時間が必要だということを実感してきています。「この土地でどう生きるか」ということに意識が向かっている人が、増えてきたと思うんです。森や海など自然との関わり合いや、自分たちの文化を見直すフェーズに入っているなと感じます。

福島における森林文化というのは、自然との関わり合いだけではなく、原発事故による汚染や過疎化、産業構造の変化など現代的な問題も同時に抱えているんですよね。「森っていいよね」という牧歌的な話だけじゃない。そういった意味でも、福島で森林文化を見つめ直すことは、とても重要だと思っています。

それに「森のはこ舟アートプロジェクト」が、3年目に入り、運営面・事業面で育ってきたということは、会津にだんだん文化的な体力がついてきたということでもあります。もともとこの事業は、「会津・漆の芸術祭の後継事業をやらないか」と県から相談を受けたことがきっかけです。けれど、なぜ芸術祭ではなく、プロジェクト型にしたかというと、震災と原発事故後の福島に必要なのは、短期的に開催する一発集客型のイベントではなく、地域の文化的な底力がつくプロジェクトだろうという考えがあったからです。集客人数で測るのではなくて、企画・運営する側も含めてちゃんと地域の文化力が上がる仕組みをつくって、足腰を強くし、そのことを実績としたい。それができたら、ほんとうの意味で、会津は中通りと浜通りを支える力をつけたと言えるだろうと。

たとえば、2014年度に「森のはこ舟アートプロジェクト」の事業として西会津町で開催したワークショップを担当してくれた作家さんは、同時期、『はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト』[*7]で沿岸部にある南相馬市で滞在制作もしていました。そして南相馬市でも同じワークショップを行うことになったんですが、アート系のワークショップを初めて運営する南相馬市のみなさんのサポートに、西会津のメンバーが駆けつけてくれたんです。こうして、アートプロジェクトや作家さんが媒介になって、県内で自然なつながりが生まれてくるようになるといいなと思います。やっぱり福島は東西に広いので、



＊7　はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト…震災と原発事故によって生まれてしまったさまざまな問題の解決を、文化の面から支援していくことが目的。福島県立博物館と福島県下の各地域の博物館、文化事業に携わる大学、NPOなどの諸団体が連携し、2012年からスタートした。福島が大事にし、向き合わなくてはならない課題を多くの人々と共有することを目的に、2016年度は11のプロジェクト・プログラムを実施予定。
http://hamanakaaizu.jp

1ーマ。西会津、三島、喜多方、北塩原、猪苗代にそれぞれエリアコーディネーターを設けて、各地でプログラムを実施。未来へ希望を発信するとともに、未来に向かう福島のイメージの創造を目指している。
http://www.morinohakobune.jp

たとえば会津の人が沿岸部を気にしていても、なかなか訪れる機会がないんですよね。でも、その場所に行って、そこにいる人や風景のなかに入らないと分からないことってたくさんあるから、アートプロジェクトをきっかけにしてその場に身を置いて欲しい。わたしは「県立」博物館の人間だからこそ、県全体のことを考え、つなげる動きを意識すべきなのだろうと任じています。

「文化財」の保存

福島県立博物館では、震災後から文化財レスキューも行っているんですが、レスキューはどうしても「文化財」の指定を受けているものが優先されます。もちろん指定文化財は、すでにある判断での価値があって指定を受けているわけですから、遺すべきものです。けれど、公共施設に保存されていたものや、所蔵品はレスキューされるけど、それ以外の普通の人の暮らしや文化に関するものには、手が行き届きにくい。

その課題を解消してくれたのは、写真家の港千尋[*8]さんが考案してくださった『いいたてミュージアム』[*9]でした。原発事故で全村避難になった飯舘村のみなさんに、その人にとっての「大事なもの」「古いもの」「歴史的なもの」を伺って、お話から浮かび上がるその人の飯舘村を言葉とモノの両方で記録する活動です。飯舘村の支援団体『いいたてまでいの会』[*10]が行っていて、立ち上がりからお手伝いをしています。人間が生き、暮らす上でつくり、使ってきたものはすべて文化財であるという立場をとっています。言葉とモノで、姿はないけれど、かつての飯舘村を形成していたもの、つまり文化を残していこうとする試みです。

こうした活動を行って行くときに同時に考えなければいけないのは、収集した後にそれらをどうするかです。つまり、それらを収蔵する文化施設をどこにつくるのか、どのように見せるかということなのですが、「ハコ」の議論となると政治とも深く関わってきてしまいます。たとえば、原発事故で避難している地域からレスキューした文化財の展示施設を原発に近い地域に建てるというのは、必ず賛否両論が出ますよね。デリケートな問題ゆえに決着をつけるには、どうしたって時間がかかる。そうなると、議論を重ねている間に、そのレスキューした「モノ」



＊8　港千尋…写真家・著述家。1960年神奈川県生まれ。NPO法人Art Bridge Institute代表理事。多摩美術大学美術学部情報デザイン学科教授（映像人類学）。早稲田大学政治経済学部卒業。2013年より国際交流基金国際展事業委員を務める。群衆や記憶など文明論的なテーマを持ちつつ、研究、作品制作、展覧会、出版、キュレーション等、幅広い活動を続けている。著作『記憶――想像と想起の力』（講談社）でサントリー学芸賞、展覧館『市民の色』で伊奈信男賞を受賞。2006年に釜山ビエンナーレ共同キュレーターを、2012年に台北ビエンナーレ共同キュレーターを務める。2007年にはヴェネツィアビエンナーレ国際美術展日本館のコミッショナーも務めた。あいちトリエンナーレ2016芸術監督。

＊9　いいたてミュージアム…飯舘村の生活と文化を、人々の「モノ」と「言葉」で語るプロジェクト。時

の背景や文化を知っている人たちが、どんどん亡くなっていってしまう。モノを通してその土地の人やそこで営まれていた暮らしを伝えていくことで、その地域の文化を遺すことができると思うのですが、モノの周囲の情報が失われ、モノだけになってしまったときに、一体それがどこまでできるのか。

「いいたてミュージアム」は、「ハコ」を持たないことを信条にしています。場所に縛られず、どこにでも行き、伝える可動性のあるミュージアム。そして、モノと同時に言葉も集める活動です。それは、いまの状況を打破する一つの可能性だと考えています。

たまたまの出会いの積み重ね

いま、特に優先しなきゃいけないなと思っているのは、自分の生まれ育った地域から避難している子供たちの文化継承です。避難先からはいつ戻れるか分からないし、新しい土地での友だちも多くなって来て、避難先の学校に転入して行く子供たちも増えています。被災町村の学校の児童数がどんどん減少しているんですよね。児童数が減っていくということは、地域の文化の継承者がいなくなっていくということでもあり、将来的にみたらまちの存続が危うくなるということでもあります。

震災から5年経ったということは、いまの小学校1、2年生は、当時乳幼児です。自分の故郷がどのようなところなのか、既に実感がない子が多い。知っているのはお父さんやお母さんに聞いた話か、本などで調べた情報です。

そういった子が、どうやって自分が生まれた場所のことを受け止めて育っていくのか。原発事故で避難している飯舘村、浪江町の学校は、そういう状況下で、文化継承の場となろうとされてきました。「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」では、そのお手伝いもしています。ここには、もう少し力を注ぎたいですね。

浪江小学校と事業をご一緒させていただくことになったのは、もとを辿ると、南相馬市で滞在制作をしたアーティストのプロジェクトがきっかけなんです。華道家であるそのアーティストは、滞在しながら、地域を歩き、時には、人がいない被災地で手向けとして花を生けていました。そうしたら、あるとき「何をやっているんですか？」と話しかけられたそうです。話しかけたのは浪江町で花屋さんを営んでいた方で、いまは避難先で浪江町の復興につながる活動をしているNPOの理事長さんだった。アーティストを介して、わたしたちがその理事長さんと知り合うこととなり、やがて、浪江小学校の現状をお聞きしたことで、事業になっていった。だからほんとうに全部たまたまで、ご縁なんです。「たまたま」と言うと、特に計画的に事業を実施すべきと考える行政の方にはよく思われないんですが、そうやって偶然出会った情報じゃないと、ほんとうに必要なことってできないんですよね。机の上で計画を立てても、うまくいかない。

たとえば、これから復興公営住宅が建っていきますが、入居者同士や入居者と地域のコミュニケーションがとれる場をつくろうと計画を立てても、実際は、地域の人たちに「必要ない」とされて事業が動かないことだってある。震災や原発事故といった予測不能な状況のなかでは、たまたま出会った「こうしたい」とか「困ってる」という声を聞いて、それに応えていくことを積み重ねることがすごく多い。だから、わたしたちが関わってきたプロジェクトというのは、まるで生命進化の系統樹のように予期せぬかたちで広がっていっています。

震災前は、こんなふうに血管のような関係性はつくれていませんでした。博物館同士は県の博物館連絡協議会があったり、資料の貸し借りをしたりとネットワークはありましたが、民間団体や、ほかのジャンルの方々との人脈は狭かったですね。

場をつくる

最近は、「森のはこ舟アートプロジェクト」など、この数年間の活動によって地域で回していけるようになったプロジェクトもあるので、そちらは安心して任せて、より大変なほうに力を注がなくちゃいけないなという気持ちが強まっています。県立の博物館としてすべきことというのは、一つの地域に深く長く関わり続けられないからこそ、大変なところに手を差し伸べることでもあると思うんですよね。

博物館というのは、記録を残していくところでもあります。大変な地域というのは、避難したことによって、文化や歴史、習慣などを継承できなくなっていることに対して悲鳴を上げている。それを守り伝えるスキルは学芸員にあるはずだし、やらなきゃ



＊10　**いいたてまでいの会**：離村を余儀なくされた福島県飯舘村の村民が相互の絆を維持し、いつかきっと村へ帰ることを願い、信じて、将来の帰村を目指すための活動を推進することが目的。飯舘村の行政と協力関係を維持しつつ、民間組織として自由な立場で村の復興に協力している。
http://iitate-madeij.jp

間をかけて丁寧なインタビューを行うことで、モノが語ることができるような記録を行っている。現在、44の物語が集まっている。いいたてまでいの会主催事業。



福島県相馬郡飯舘村

いけないと思うんです。具体的には、帰宅困難区域として全村民避難をしている飯舘村と、原発で避難している浜通り地域。あとは、復興公営住宅の問題を抱えているいわき市のことが頭にあります。

いわき市では、２０１５年から下神白復興公営住宅でコミュニティ再構築を支援する『イトナミニティプロジェクト』[*11]を始めています。避難している方たちは、避難先を変える度にコミュニティの再構築を強いられてきている。復興公営住宅の建設が決定した時点で、もともと建設地域に住んでいる人と避難して来た人の摩擦や、孤独死の問題も話されていました。「それを文化的な事業によって回避できないか」という相談が県の担当部署から福島県の文化振興課にあり、文化振興課からわたしたちのもとへやってきたんです。そんな経緯でスタートしたにも関わらず、ずっと復興公営住宅の運営そのものの考え方や、そこに入り込んで事業化することの難しさが解消されない。とてもデリケートで難しい課題なので、体制が整わないまま安易に入ることはできないんですよね。みんなそこに問題があるということを分かっているのに、触れられない状態になってしまっている。できることに限りはあるけど、何かできるはずだろうと思ってしまうから、忸怩たる思いがあります。けれど、ようやく２０１５年に少しだけ事業を展開できたので、少し開いたドアを閉じないようにしなくてはいけないと思っているところです。

できることに限りはあるけど、何かできるはずだろうと思ってしまうから、忸怩（じくじ）たる思いがあります。

復興公営住宅が内包している問題は、県内のいたるところにあるんです。たとえば、福島市は飯舘村から避難している方が多いんですが、やはり同じような状況だと聞きました。福島市に引っ越して、近所への挨拶でタオルを配って回ったら、次の日の朝にタオルが全部玄関に戻って来ていたとか…。

真偽のほどはともあれ、そのような話が人々の間を巡っているという現実に何とも言えない気持ちになりますが、必要なことはたぶん立場を異にする人たちを仲良くさせることではないような気がするんですよね。人に言われて仲良くするものでもないですから。

そういう状況に対して何ができるかを考えると、「自然に一緒にいる場をつくる」ことしかできないと思うんです。それでまた仲違いしてしまうかもしれないけれど、同じ空間にいる状況をつくることだったらできるかもしれない。少しずつそうした経験が積み重なって、たとえば県営の復興公営住宅の集会場に、隣の市営の復興公営団地の子供が遊びに来てくれるようなことが起きたらいいなと思っているんです。これは全県で事業化して展開すべきことだと思いますが、無論わたしたちにその力はありません。けれど、そのためのモデルをつくることであれば、わたしたちにもできるはずだと考えています。

それでまた仲違いしてしまうかもしれないけれど、同じ空間にいる状況をつくることだったらできるかもしれない。

復興公営住宅の問題に関わるのは、「場をつくる」ことに博物館が関わる意味があると考えているからなんです。「なぜ博物館の学芸員がそこまでやってるの?」って思われることがあるんですが、たとえば、避難してきた方の故郷の話を聞きながら何かをする場をつくった場合、わたしたちは、博物館が持っている文化ストックを提供できるんですよね。「こういう場所でしたよね」と話を振ったり、一緒に地元のお祭りに関連するイベントをつくり上げていったり。博物館は地域文化のネタの宝庫ですから。

「博物館」というとどうしても建物のイメージが強いですが、博物館の機能を館外に提供して、活用する場をつくることができる。資産は、現場で活用することに意味があることがあるんです。

博物館の専門性やリソースは、人やモノだけじゃなくて活動そのものである。残念ながら、それらが博物館の役割の常識となる時代は、まだ先のことだと思います。わたしたちは、とにかく実績を残して



＊11　イトナミニティプロジェクト…福島県いわき市小名浜にある下神白復興公営住宅で行ったアートプロジェクト。「新しい居場所をつくる」ために、ちぎり絵による作品制作や、おでんをコンセプトに置いたアートプロジェクトなどが行われた。福島藝術計画×ＡＳＴＴとして実施。

いくことで、博物館のミッションが変わっていくところに近づけたらと思っています。

福島のことを県外へ

昨年度、「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」で生まれた作品を県外で数回にわたり展示しました。その際に、福島のことを作品を通して伝えることの手応えがあったんです。作品って、情報が一方的に入って来ないじゃないですか。作家の表現というワンクッションが置かれるから、観る人はこれはなんだろうって考えなきゃいけないし、分かりにくいものもたくさんある。会場でお話しした人の言葉やアンケートを拝見して、観た人がただ受け止めるんじゃなくて、能動的に関わってくれている感じがありました。

たとえば、何年も福島の同じ場所で撮影をし続けている写真家がいるんですね。最初は綺麗な緑の自然風景なんだけど、何年か経つと除染作業によって土地が削られて、除染のフレコンバックが積み上がる風景に変わっていくんです。もともとその方は、事故があっても自然は変わらずに美しいということを伝えたくて撮影に入ったそうですが、だんだんと人間のせいで美しくなくなってしまう。一見、ただの定点観測にも見えてしまう写真ですが、だからこそそれを観る人は「何を言いたいんだろう」「なぜこれが起きているんだろう」と考える心の動きが生じる感じがしたんです。ニュースで、「いま飯舘村で除染作業が行われていてフレコンバックが積み上げられています」という報道を目にしても「ああそうなのね、大変ね」という感想を持つだけだと思いますが、一方的で分かりやすい情報じゃないからこそ、観る人のなかに伝わることがあるなと思いました。

それに、時間が経つと、どうしてもみんな福島のことを忘れてしまいますよね。それは仕方のないことで、そこに対して何ができるかと言ったら、福島のことをきっかけに自分の地域について考えてもらうことだと思うんです。自分の地域のことになったら、忘れられないはずですから。

２０１５年度は、静岡県でも展示を行ったんですが、静岡には浜岡原発がありますよね。どこもそうですが、電力会社の存在がまちにとって大きいこともあって、「浜岡原発って大丈夫なの?」という話題は、普段の生活では話しにくいと聞きました。けれど、福島のことを展示することで、福島を媒介にして、「じゃあ静岡はどうなんだろう?」と話し合うことができる。

そうやって、自分たちの土地のことを考える人が増えることによって、原発がすべて停止したり、大げさかもしれませんが社会の構造が変わるところまでいったら、ようやく福島が背負ってしまったマイナスが世のなかの役に立つ。つまり、マイナスをプラスに転換することができるんです。たぶん福島のためにできることって、県内にある課題を解決していくことを別にしたら、福島がきっかけでものごとがよい方向に変わっていくようにすることしかない。なので、地道に県外で展示をするというのは大事だなと思いました。

今年は、全国６ヵ所での開催を予定しています。展示の開催地は、ご縁もありますが、かなり意図を持って選択しています。熊本と足尾は、水俣病と足尾銅山鉱毒事件を意識して打診しました。松本は、市長の菅谷昭（すげのやあきら）さんが、医師としてチェルノブイリ原子力発電所事故の医療支援活動をなさっていたことが大きいです。

原発事故は「想定外」だという発言が随所で出ましたが、これまでの歴史をふりかえると、日本ではいろいろな事故や問題があったのに、それを見ないようにしてきたというか、わたしも気づけていなかった。すでに起こっていた歴史から学べれば、「想定外」のことが起こらないようにもできたはずなんです。ただ、自分の身に降りかかって初めて理解できることもあって。だから、東京電力福島第一原子力発電所事故があって感じたり考えたりしたことを、同じような歴史を抱える地域の人たちと話したい。

そうやって、ほかの地域とのつながりが日本地図の上に網のように広がっていったら、まだ自身に降りかかってない人たちも気づくことができるんじゃないかと考えています。

人と人の関係性

この５年間の活動で、やっといくつかいまの博物館の役割として必要なことが見えてきたなと思っています。それを博物館の美術分野ができる役割としてちゃんと整理をして、次のステージに行きたい。いまわたしたちがやっていることというのは、福島

のことを、過去だけではなく、現在も含めて記録・継承していくという、博物館の活動をベースに発展させたアプローチだと思っているんです。その延長線上で、対話の場をつくったり、運営を通して関わってくれた人のスキルが上がるような、人が育つ環境をつくっている。人が育つと言うとおこがましいですが、立場や年齢関係なく、いろいろなことを一緒にやることができたんですよね。つまり、経験を積む場所を共有できた。そういう人たちが増え、文化的なネットワークが広がっていることは、福島にとって大事な財産です。

特に、『NPO西会津ローカルフレンズ』[*12]の伊藤和子さんと三瓶たかさんの存在は大きいですね。「わたしら野菜売ってるお母さんたちだけど、いい？」って言いながら、ASTTの事務局をやってくれたんですから。その人たちが、いまでは古民家改装を「ワークショップ」と銘打って人を集めながら、助成金を獲得して文化事業を行っている。ほんとうにすごいことだと思います。

和子さんたちと一緒に働く機会は、震災直後に比べたらすごく少なくなっているんですが、それでも何かあったときには、ぱっと連絡できる安心感があるんですよね。これは、一緒に事業を行った強みですね。それに、いまもそれぞれの歩みを互いに続けているからでしょうね。

活動というのは、ずっと続けていくことと、終わるべきものというのがあると思うんです。体力の問題もあるし、いろいろな面で区切りを付けなきゃいけないこともある。でも、人と人の関係性だけは残っていくような気はしますね。それぞれがそれぞれの場所で考えて、動いていたらまた交差することがある。一度生まれたものは、ちゃんとこれからも生きてくる気がします。

小林めぐみ

＊12　NPO西会津ローカルフレンズ：地域振興イベントの企画や地元産野菜の販売、都市農村連携を行っているNPO。詳しくは、P100へ。

［参考資料］
・伊藤達矢・渡部あきこ編『森のはこ舟アートプロジェクト2015活動報告』福島県・森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会、2016
・特定非営利活動法人Wunder ground編著『コミュニティとアート 被災地いわきからの提言～来るべき超高齢化社会のために～』福島県・東京都・アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）・特定非営利活動法人Wunder ground、2016
・川延安直「言葉が開く博物館、広がる言葉」『現代詩手帖 7月号「特集：詩からアートへ／アートから詩へ」』思想社、2014



福島県立博物館（2011.7.20）

2011年7月20日、初めて福島県立博物館を訪問した。東京藝術大学の伊藤達矢さんに「まずは県博の川延さんと小林さんに会ったほうがいい」と紹介されたからだった。この出会いから、福島での事業は一気に芽吹きはじめる[*1]。そしてそれらは、あたかも「系統樹」のように広がっていった。

西会津町出身の伊藤さんと県博の二人との付き合いは2009年の『岡本太郎の博物館～はじめる視点～』展から始まったのだという。アーティストを博物館に招き入れた「開かれた博物館」を目指す企画だった。震災以前に種は蒔かれていた。

福島での事業は『週末アートスクール』から始まった。中通りや浜通りの子供たちを会津に招き、アーティストのワークショップと会津の地域文化に触れる週末を過ごす。原発事故以後の福島において、線量を意識せざるをえない状況がもたらすストレスの軽減が目的のひとつだった。

文化の種を蒔き、芽を育む

佐藤李青

初年度は西会津町、喜多方市、三島町という3地域で5プログラムを実施した。まちづくり、地域振興、グリーンツーリズムなどに取り組む団体が各地域のパートナーとなったが、ほとんどは「アート」の事業は初めてだった。そのメンバーらとは、10月12日に顔合せをし、11月26日には最初のプログラムを実施した。この立ち上がりの早さは『奥会津アートガーデン』の構想、つまり、小林さんたちが震災以前に耕していた土壌があったからだった。

この3地域は、その後の事業の中核となる。2013年1月にはいわき市で「週末アートスクール」を実施し、このときのパートナーとなった特定非営利活動法人Wunder groundは、同年4月より福島県全体で行う事業の事務局を担うことになる。2014年からは、会津で『森のはこ舟アートプロジェクト』を開始。「週末アートスクール」の運営基盤を引き継いだものだった。そして、それは2015年4月に、地域を横断したプラットフォーム組織としての役割を掲げた特定非営利活動法人ふくしまアートネットワーク設立に結実した[*2]。

無数の紆余曲折を経験しながら、福島での活動の「系統樹」は着実に幹を太くし、枝葉を広げてきた。それは、いまも続いている。この一連の動きは、わたしたちが被災地支援事業の目的として掲げた、

＊1　福島に限らず、現地で事業を始めるためには地域のネットワークの結節点となる人々との出会いが重要となった。伊藤達矢さんは、東京藝術大学美術学部特任准教授、とびらプロジェクト／Museum Start あいうえのプロジェクトマネージャ、『森のはこ舟アートプロジェクト』ディレクターを務める。

＊2　『森のはこ舟アートプロジェクト』では各エリアにワーキンググループとエリアコーディネーターが存在し、自律的な運営体制を構築している。広域連携の事業として、エリア持ち回りの事務局体制も模索されたが、結果的に各エリアの活動から独立した事務局組織の設立となった。特定非営利活動法人ふくしまアートネットワークは「多様な価値観を受け止めることのできるネットワーク型の社会構造（社会的包摂）の構築」と「アートプロジェクトを活用した地域振興、地域の活性化」を目的とする。

福島県



2016.6.11

会津若松市



「週末アートスクール」関係者初顔合わせとチラシ（2011.10.12）

プロジェクトの運営体制の構築という点でも、大きな成果となった。

小林さんは「福島」を主語で語る。いま、福島にとって何をすべきか、何ができるのか。あらゆる現場に出向き、その土地の人々の声に耳を傾ける。その経験に裏付けされた、ひりひりとした問いかけは、わたしたちにとって常に福島の現状に目を向け、「被災地支援事業」としての芯を通すための警鐘（けいしょう）となった。「県立」博物館の学芸員として使命だけが、そうさせるのではない。福島という土地で生きる、小林さんの矜持（きょうじ）があるからこそ、その言葉は響くのだと思う。

そして、それに共鳴した人々が、どう自分たちなりに「文化」を育んでいくのか*3。木と木が生い茂り、森が生まれるように、それぞれの実践が有機的に連携し、いかに地域の豊かな文化の生態系を生み出していくのか。そのまなざしが今後はより一層必要となるのだろう。



喜多方での「週末アートスクール」の実施風景（2011.12.18）

*3 震災直後の復旧活動が落ち着き、持続的に地域での文化事業と向き合う段階に入ると、自ずと地域の自然や文化と向き合う事業が増えてきた。たとえば宮城県の『つながる湾プロジェクト』は行政区を越えた湾という「海からの視点」で地域の歴史や文化を捉えなおし、新たな湾の文化の創造をも目指している。
http://tsunagaruwan.com



川延安直

かわのべやすなお

福島県立博物館　学芸員

1961年神奈川県藤沢市生まれ。
筑波大学大学院芸術学研究科
芸術学専攻修了。岡山県立美術館
学芸員を経て、現職。
主な担当展覧会に『老い ――老いを
めぐる美とカタチ』(2005年)、
『遠藤香村 会津に生きた会津の
画人』(2008年)、『岡本太郎の博物館
はじめる視点 博物館から覚醒する
アーティストたち』(2009年)などがある。
東日本大震災、東京電力福島第一
原子力発電所事故後は、
『はま・なか・あいづ文化連携
プロジェクト』など、文化・芸術による
福島の復興支援事業に携わっている。
http://www.general-museum.fks.ed.jp

震災と原発事故後、川延安直さんは、小林めぐみさんとともに、県内の文化活動を力強く後押ししてきた。
二人のまなざしは、異なる位層を捉えながらも交差し重なり合い、ひとつのことを見ている。
これまで「県立」の博物館学芸員として、何を考えてきたのか。
そして、この5年間をどのように見ているのだろうか?

現代アートという「生モノ」

福島県立博物館は、標準的な県立クラスの総合博物館です。いい収蔵品もあるし、基本的には展覧会勝負。ただ、地域の資料を中心にした展示だと、地味になることもあるんですね。掘り起こしておかなければ失われてしまうものをレスキューできたという自負はある。でも、集客に結びつかない。そんなことが続いて、そもそも、美術に触れるような文化が地域に定着していないのではないかと考えるようになったんです。

来てくれる人は、毎回来てくれる。でも、一度も来たことがない人にも博物館の存在や美術を知ってもらわないと、いつまで経っても来館者数は増えないぞと思いました。

そんななか、2003年に赤坂憲雄*1さんが館長に就任しました。館長は民俗学者ですから、「博物館員は地域に入るべし」という考え方の持ち主です。「開かれた博物館」という目標には、ずいぶん勇気づけられましたね。しかし、実際にやるのは、たいへんなことです。そこで考えたのが、博物館の一部に外部を取り込むという方法でした。

博物館のエントランスホールは、出入り自由で誰でも入れるんですね。そこをまちなかの広場のよう

*1 赤坂憲雄…P65へ。

に捉えて、イベントを行うことにしました。特に画期的だったのが、２００７年に詩人の和合亮一[*2]さんを迎えて開催した『詩人が歩く、むかしと歩く@県博』[*3]です。このときはもっと踏み込んで、展示室の竪穴式住居のなかでパフォーマンスをやったんです。学芸員っていうのは、職業的にあまり自分の感想を言えない不自由さがあるんですよね。だけど和合さんは自分の言葉で「この住居はね」という話ができるので、常設展に何か波紋が起こせるのではないかと思いました。実際、想像以上の手応えがあった。このときの経験がなければ、いまのわたしたちの活動はありませんね。

　初めて博物館に現代アートを持ち込んだのは、２００５年に開催した『老い――老いをめぐる美とカタチ』[*4]展です。現代美術家の折元立身(たつみ)[*5]さんらの作品展示やパフォーマンスをしました。「老い」というテーマは時代ごとに解釈が違いますが、人間から老いがなくなることはないので、時代を区切る理由がないんですよね。逆に、「いま現在」を入れないと、問題の所在がおかしくなってしまう。そこで、現代アートという「生モノ」を入れることにしたんです。

　折元さんは、介護をしているお母さんにつくったビッグシューズを履いて、エントランスをポコポコ歩くパフォーマンスをしたんですよ。そうしたら、興味がある人がぐいぐい寄ってくる反面、小学校低学年くらいの児童に同伴していた先生はすごく嫌そうで、あからさまに「近づいちゃ駄目よ」という反応でした。現代アートは、こうやって拒絶されることもあるというのを目の当たりにしました。すごく興味深かったですね。

　隠すことでもないですが、博物館内は、もう完全に非難轟々でした。批判のポイントは、一言で言ってしまうと「分からない」ということに尽きます。博物館は、文化財の正しい情報を伝え、学び、分からせる施設なんですよね。なので、ノイズが入ることに、半ば恐怖感に近い拒否反応がある。その感覚は分かりつつも、博物館を読み直すためには、少しずつその意識を融かしていく必要があると思っています。

震災による変化

震災による変化は、ないわけはないですよね。でも、もしかすると別のタイミングで文化がどうあるべきかという問題が浮き彫りになったかもしれない。福島のことは地震というよりも原発問題に収斂されますが、これはつまるところ、文化が負けたということだと思うんです。原発などをよしとしてしまっている感覚とそれをかたちづくっている経験があるということですから。それに対して、文化施設で働いている人間はどうすべきか。「福島」と「県立」と「博物館」が揃ったところにいて、この問題はスルーできないと思いましたね。

　文化の敗北は、そうなってみてやっと気づくことです。理想論を語る方もいるし、こうあればいいという提案はたくさんあるけれど、自分としては、やはり実践が伴っていないなと思う。理想をかたちにするためにはどうすればよかったんだろう。その答えのひとつとして、博物館を解放するなど、より博物館の活動を外に出していくということをしていくべきだったと思いました。

福島のことは地震というよりも原発問題に収斂されますが、これはつまるところ、文化が負けたということだと思うんです。

　まちなかで開催した『会津・漆の芸術祭２０１０』[*6]はぎりぎり間に合ったなという気持ちと、もうちょっと早くできればよかったという気持ちの両方があります。震災前に開催できていなかったら、アーティストとのネットワークはなかったし、かろうじて首の皮一枚つながった感じですね。これをやっていなければ、佐藤李青さんたち（ＡＳＴ）にも会えなかったかもしれない。「文化財」ではなく、「文化」関係の人たちとつながることができましたね。

　震災直前には、『奥会津アートガーデン』の計画がありました。会津若松市や喜多方市といった都市部の「会津・漆の芸術祭」に対して、中山間地（三島町・昭和村・南会津町など）で開催するアートプロジェクトです。もともと福島県全体を使うドリームプランでしたが、一気にやるのはたいへんなので、時間を置いて徐々に広げていくことにしました。こ



＊2　和合亮一…詩人。福島県の高校教諭の傍ら詩作活動を行う。１９９８年、第一詩集『ＡＦＴＥＲ』で第４回中原中也賞受賞。２００６年、第四詩集『地球頭脳詩篇』で第47回晩翠賞受賞。ラジオ福島でラジオ番組『詩人のラヂオ　和合亮一のアクションポエジィ』のパーソナリティを務めるなど、多彩な活動を展開している。「歴程」同人、「六本木詩人会」主宰。２０１１年の東日本大震災では自らも被災し、現場からTwitterで詩篇「詩の礫」を発表し続け注目を浴びた。
http://wasg2828.com

＊3　詩人が歩く、むかしと歩く@県博…２００７年、福島県立博物館のミュージアムイベントとして開催。和合さんは、イベント前にたびたび博物館を訪れ詩作をし、イベント当日は常設展示室の各所でリーディングパフォーマンスを行った。復元制作による祭礼屋台・竪穴式住居内でパフォーマンスを行うなど、復元資料の利点を活用した。

＊4　老い――老いをめぐる美とカタチ…２００５年に開催した企画展。「老い」の力でしか到達できない創造の世界を絵画・彫刻・工芸・写真・舞踊・民俗行事・マンガなどジャンルを横断し、約２００点を展示。パフォーマンスも行った。主な出展作家は、雪舟、北斎、北大路魯山人、やなぎみわ、石内都、大野一雄、高野文子など。

＊5　折元立身…１９４６年、神奈川県川崎市生まれ。１９６９年に渡米。カリフォルニア・インスティテュート・オブ・アートに学ぶ。１９７１年、ニューヨークへ移住、ナム・ジュン・パイクの助手を務め、フルクサスの活動に参加。１９７７年に帰国、主に欧米で作品発表を行う。特に海外での評価が高く、シドニー・ビエンナーレ、サンパウロ・ビエンナーレ、ヴェネチア・ビエンナーレ、横浜トリエンナーレなどの国際展に参加。代表作として、パンを顔につけて街頭に出没する「パン人間」のパフォーマンス、介護中の実母とのパフォーマンス「アートママ」などがある。

＊6　会津・漆の芸術祭…P66へ。

れが震災で中止せざるを得なくなった。ほんの数日前まで、事前の会議をしていたんですよ。でも、このときにできたネットワークが、震災後すぐ生きましたね。震災後に開催した『週末アートスクール』[*7]を動かしたメンバーは、「奥会津アートガーデン」のために集まっていた人たちなんです。

震災後は、個人で動いているアーティストや芸術祭のつながりでいろいろな動きがあって、対応にいっぱいいっぱいでした。でも、3月で予算の裏づけがなかったので、なかなか自主的な動きができなかった。できる限りのことはしていましたが、出たとこ勝負のようなところがあるなかで、ASTTとの付き合いが始まり、そこからようやく計画的な事業ができるようになりました。あの当時、雇用創出のプログラムはたくさんありましたが、それだけじゃなくて、もう少し人と人をつなげるためにアートの要素を入れたいと思っていたんです。森司さん（ASTT）からは「地域のなかに自律的な組織をつくりたい」という話があり、わたしたち博物館は、NPOと組むなどして体制をつくる事業しかできないスキームなので、互いの理想が重なるなと思いました。

やはりアーティストの反応は、早かったです。震災前は、まだ地域の人材が育っていなかったので、文化的な何かとなったら博物館に問い合わせるしかないんですよね。でも、相談を受けたわたしたちは、それをさらに相談できる相手が地域にいなかった。他分野では、赤十字や社会福祉協議会など緊急時に機能する機関がありますよね。でも、文化はない。震災後すぐにふと周りを見渡して、誰もいないことに気づいたときは、ずいぶん愕然としましたね。なので、文化的な受け皿、あるいは担い手そのものを育てることを意識して、この5年間走ってきたところがあります。

現場を駆け回れる人

震災前の県内の他団体とのつながりは、展示品の貸し借りや、同じ研究領域で情報交換をしたりするなど、文化財、展覧会ベースのネットワークが多かったですね。関わりもそんなに深くない。だから、まさかNPO西会津ローカルフレンズ[*8]と、こんなにお付き合いすることになるなんて夢にも思わなかったですね。ローカルフレンズの伊藤和子さんたちは、もともとふるさと宅配便をつくっている人たちですから。いまでは県全体にいろいろなネットワークがありますが、それはこうしたアートプロジェクトが確実につないだと思います。いきなり大部屋のようなところにぶち込まれて同じ釜の飯を食うみたいな、何はともあれ一緒にやってしまうよさがあるんですよね。

アートプロジェクトのサポートをする場合は、それぞれのプログラムの質を上げるだけでなく、そこに関わってくれた人たちがスキルアップしてほしいという想いがありました。両方のバランスが取れて、うまく100になるようなイメージ。プロジェクトが80で、人材育成が20ではなくて、スタッフが育つのであれば、プロジェクトは50に下げてもいいという発想でやっていました。とにかく現場を駆け回れる人を育成したかった。

『はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト』[*9]を

無責任な言い方かもしれませんが、震災後、とりあえず全部のプロジェクトを生き残らせようと思ったんです。

立ち上げた2012年は、まだ県内での取材や制作が難しい時期で、そういった方々をサポートする目的で始まったので、より現場の人材を育成するという意識がありました。なので、外からの支援を自立的な復興に発展させるために「福島県独自の文化創造の機会を育てる」ということを掲げてきました。2015年からは、県内の土壌を耕すのではなくて、完全に外部発信のほうに向いています。だって、もう福島はなきものになっていくでしょう？　いずれ関心や支援がなくなっていくことは分かっていましたが、ついに来たという感じがありますね。

2014年に誕生した『森のはこ舟アートプロジェクト』[*10]は、「週末アートスクール」の発展形だと考えています。もうだいぶ体力がついてきたので、長期的な事業もできるようになり、展覧会や年間プロジェクトなど徐々に広がりを見せてきた。無責任な言い方かもしれませんが、震災後、とりあえず全

*7　週末アートスクール…P67へ。
*8　NPO西会津ローカルフレンズ…P100へ。
*9　はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト…P68へ。
*10　森のはこ舟アートプロジェクト…P67へ。



福島県大沼郡三島町

部のプロジェクトを生き残らせようと思ったんです。そのために、県内を駆け回りました。

２０１２年に『会津・漆の芸術祭』が終わって、それぞれの地域で独自の後継事業を置く発想にして、会津若松は伝統工芸的な側面に特化しました。これはもう、特に手出しをしなくてもできるので、もう身を引こうと思っています。逆に喜多方[*11]は、いろいろなアーティストの方が関わってくれるので、細かく調整する必要がありますね。最近、やっと行政も何か動いているようだと認識してくれるようになりました。

喜多方などは県博から近いので、きめ細やかに一緒に仕事をすることができるんですが、福島県は広いから、全県で同じようにやるのはなかなか難しい。それに本当にシビアなところは、南相馬など遠いところです。沿岸部で何ができるかは、ようやくこれから取り組めると思います。

その先まで責任を取ることは難しいかもしれないけれど、芽が出る可能性があるかもしれないのに、途中で止めてしまうことはしたくない。

いくつも種を蒔いて、残ってくれるものがなるべく芽を出す状況をつくる。その先まで責任を取ることは難しいかもしれないけれど、芽が出る可能性があるかもしれないのに、途中で止めてしまうことはしたくない。発芽させるために水をやる役割のような感じですね。

こうした「水やり」を博物館の役割だと考えるのは、まだわたし個人の考えです。博物館としてはまだ明文化はされていない。中期目標などには「地域貢献」という項目は当然入っていますが、手法としてはまだ定着していません。

正確には、「博物館がやるべき」ではなくて、「博物館がやってもいい」だと思っています。だから、美術館や市民ホールももっと地域と関わればいいと思いますね。わたしたちは、たまたま震災と原発事故があって、県内で一番ダメージが少なかったエリアにあったのが博物館だったというだけのことです。

もし柏崎の原発が爆発したら逆の立場だったので、南相馬のほうが元気だったかもしれないし、何が起きるか分かりませんね。

ＦＵＫＵＳＨＩＭＡ

これからは、緊急的な復興支援のフェーズではなくなっていくので、「県」という単位でどのように自立するかを問われなければいけません。でもね、たぶんできないですよ。できるんだったら、とっくにできているはずですから。そうしたジレンマを抱えながらも、県内外のことをやっていく必要があると思います。

今年度の「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」では、なるべく県外での小さな展示を重ねていこうと思っています。いま、アーカイブ拠点施設にまつわるいろいろな問題が浮上してきていますが、要するに「伝え方」の議論だと思うんですよね。これからは、伝え方や伝える内容を巡る確執が起こってくると思うので、そこに対して目を向けなきゃいけないなと考えています。

ここで起きたことはどこでも起こり得ることだし、もしかするとこれまで散々繰り返してきたことなのかもしれない。

よく館長が言っているんですが、大事なのは、「自分ごと」にさせるということだと思うんです。個人としてもそうだし、この国全体として。「福島、福島」と言うことで、福島限定の話にならないようにしなくちゃいけない。

一時期よく、アルファベットのＦＵＫＵＳＨＩＭＡや片仮名のフクシマという表現の是非について議論がありましたが、むしろこれからはアルファベットで打って出るくらいのことを考えないといけない。漢字の福島にしてしまうと、博物館入りして終わるようなことになりかねない気がします。ここで起きたことはどこでも起こり得ることだし、もしかするとこれまで散々繰り返してきたことなのかもしれない。つまり、想定外の初めて

＊11 喜多方：近年では『会津・漆の芸術祭』の後継事業として始まった『喜多方・夢・アートプロジェクト』（２０１３～）、東北人や世界の北方の人々、北を志向する人々同士が共振するものを探る活動の『精神の〈北〉へ』（２０１３～）などの活動が実施されている。民間の活動が盛んな土地柄で、ほかにも蔵を持つ有志で結成された「蔵の会」の若手作家支援活動がある。歴史をふりかえると、町衆が組織した「喜多方美術倶楽部」（１９１８～１９２６）や、その志を引き継ぎ、１９４６年に彫刻家・佐藤恒三を中心に市内の美術愛好家が立ち上げた「セピロマ会」（セザンヌ、ピカソ、ロダン、マティスの頭文字から命名）があった。

のできごとではなくて、歴史的に経験してきたことなのではないかと考えるようになりました。

２０１６年は、栃木と熊本で展示をします。足尾銅山鉱毒事件と水俣病のあった場所ですよね。自分も含めて、日本史を勉強していなかったなと思うわけですよ。ほんとうは、２０１１年にすぐそのことに気づくべきだった。社会課題を解決するのはわたしたちの仕事ではありませんが、アートという切り口でまた思い返してもらって、解決策を探ることはできると思います。

これはすごく個人的な感覚ですが、アートって、自分の体調がよくないときのほうが効果を発揮すると思うんですよ。たとえば、病気になったときに山里の温泉に行きたいのは、温泉成分を求めているんじゃなくて、自然に抱かれたいからだと思うんですよね。それはもう人間の防衛本能だと思う。だとすれば、アートのようなものは、個人の小さな体験かもしれないけれど、必ず効くと思いますね。だから、こうしていろいろ起きてしまったなかで人の心や身体に届いて、何かと何かをつなぐ力があると思います。

いまは、大きい文脈の議論をする時期なのかもしれません。足尾銅山鉱毒事件や水俣病の経験というのは何だったんだろうと考え始めたりして。これまではその経験に対して直接的に考えていたけれど、実は、文化、あるいは近代の問題なんじゃないかということも見えてきました。原発の避難によって村が動くというのは、実はダムで村がなくなるのと一緒ですから。

博物館は、こうした生々しさのある生きた経験を相対化できるブラックボックスのような存在だと思います。たとえば、市民フォーラムを開くと賛成派・反対派の二項対立になってしまうところを、展示というかたちにするとさほど喧嘩にはならない。テーマが、あくまで討論の素材になるんですよね。

それに、博物館というのは、そんなにイデオロギーがないと思われているところがある。成り立ちを考えると、王や貴族が自分の富を知らしめるために収集品を見せたことから始まったので、非常にイデオロギーがあるんですが、いまはそう思われていない。それに日本の場合、高度経済成長期以降の地方の美術館・博物館ブームの際にできたところは、金太郎飴のようだと揶揄されますが、よくも悪くも無色透明さがある。それをよいほうに使えると思うんです。あまり種は明かしたくないところですが。

この特性は、フォーラムや県外で活動をする際に県博が主催や事務局になっているときに、有効に働いている感じがありますね。たとえば、実行委員会を打ち出しても、そのために集まっている組織だから「ああ、そうゆう人たちだよね」となってしまう。そこに「博物館」というよく分からない存在が入ると、緩衝材になる。「どっち派か分からない」という曖昧さというのは、結構大事だと思うんですよ。社会からは、どんどんそういった曖昧さがなくなってしまっているからこそ。昔だったら、大学がある種のアジールだったけれど、いまはもう検閲が厳しくなっていますよね。そこで、博物館や美術館にお鉢が回ってきた。昔の人がいいものをつくってくれましたよね。

そろそろ、ほんとうに真剣にやったほうがいいなと思っています。いままでは福島は、シンプルに「被災地」でしかなかった。けれど、問題を他人ごとから自分ごとに転換しようとするフェーズは、敵をつくることにもなると思うんですよね。「助けてください」とお願いする人を無下にはしないけど、伝えよう、共有しようとするということは、相手に主体性を求めるわけだから。そこに拒否反応や批判が出ることもあると思います。

まずは、東京や大阪などの大都市圏ではなくて、福島と同じくらいの人口規模で自然との距離が近い地方に発信することを考えています。生活環境が似ているところは、問題意識を共有し易いはずだと思うんです。それに自分たちの手でつくり上げているスペースとやりたいですね。市民ギャラリーなどは、一日数千円で借りることができますが、「借りる」という関係ではなく、自分ごととして一緒に開いてくださる方とやりたい。あとは、大学と組むことで、学生時代にちょっとでも何かを嚙（かじ）ってくれれば嬉しいですね。

本来の「おもてなし」

アートプロジェクトをやっていて思うのは――いまこの言葉を使うのは気が引けますが――おもてなし精神が大事だということです。日本は、非常に関係性を重んじる文化がありますよね。お互いのことを理解して、さらに相手がちょっと上に行けるようにやりとりするというのが、本来のおもてなしだと

思うんです。それは、サービスとは違う。

また温泉でたとえると、梅雨冷えするようなときに旅館に行って「冷えますから空調を付けておきますね」と言う仲居さんよりも、「先にお風呂をどうぞ」って言って、ちょっと窓を開けておいてくれる仲居さんのほうがいいと思うんです。窓が開いていれば、お風呂から戻ってきたときに、換気してくれたことで気持ちが落ち着く。それに、きっと外の渓流の音も聞こえてくる。こうした読みの能力って、その人の文化への意識だと思うんです。同時に、それが味わえるお客さんか否かを見極める必要もありますし。

アートプロジェクトに携わる人が、おもてなしの感覚を持つことができれば、どんどんいいものが生まれて来るはずです。アーティストが来てくれたときに、このアーティストから何を引き出せるか、あるいはその人に何を持って帰って欲しいかを考える、そのやり取りですよね。そうした文化的な感覚を基盤にした気持ちのやり取りを「おもてなし」って言いたいなと思う。

ある作品があったとして、それに心を動かされるかどうかというのは文化の話だと思うんですよね。それは、知識的に精通しているということではなくて、これまでどれだけいろいろなものを見てきたかという、経験値の話です。そして、それはほかのことにも応用が利く。たとえば、「森のはこ舟」は、森林文化しか分からない人が育つわけではなくて、いろいろなところでいいものを見つける人たちになってくれると思います。

いま、県内の状況はとても難しくなっています。なんて言うんでしょうか。考え方の相違がどんどんはっきりしてきていて、人々の隔たりが広がっているように感じます。議論の内容もすごく哲学的な次元に入ってきている。たとえば、安全性の基準というのは、あってないようなものだと思うんです。個人個人の考えでしかないはずなのに、重箱の隅をつつくような議論があって、それを政治的に巧みに使おうとする大きな力もある。

それに対してできることは、どれだけ意見の異なる人同士の対話の場を持てるかということだと思うんですよね。そういうときに、アートプロジェクトは境界線を跨ぐことができる。境界線って、「線」ですが、その線自体は太くて、互いにそのなかに入ることができるはずなんです。どちらもなんとか折り合いを付けたいと思っているはずだから。展覧会やフォーラムなど、アートは、そういった場をつくれると思います。

また、これからは、沿岸部の浜通りと重点的に関わりたいと思っています。そろそろ帰還や警戒区域縮小などで人が戻り始めますが、やっぱり不安な人もずっといるわけです。様々な知を総動員しないと絶対に解決しない。ここからはもう、アートプロジェクトだけの話ではなくなってきますが、それでもアートはとても役に立つツールだと思いますね。

南相馬でもアートプロジェクトの動きが出始めていますが、それは、こうして会津でやってきたことがちらちらと目に入っていたから、動き出すようなところがあると思います。いわきは、現場を動かす人がいるのでずいぶんいい感じに活動が展開しています。その動かす「人」がちゃんと見える状態にいるかが、我々の勝負どころですね。

福島「を」学ぶのではなく、福島「で」学ぶというか。

県外の人たちには、もっと福島のことを理解してもらって、どこに行ってもこうした会話ができるといいなと思います。そして、そこで話されたことをまた県内にフィードバックする。そこそこ出すものは出し尽くしてしまった感じがあるので、また仲間を探しに行かなければいけません。

福島の人が福島のことを語り続けるのは、もうちょっと違うんじゃないかなと思うんです。福島そのもので発信するという、みんなで共有できる課題のほうが先なんだろうと思います。福島「を」学ぶのではなく、福島「で」学ぶというか。ここで起きていることを共通課題として認識して、そのひとつに福島の話を入れていきたいと思っています。

川延安直

[参考資料]
・伊藤達矢・渡部あきこ編『森のはこ舟 アートプロジェクト2015活動報告』福島県・森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会、2016
・川延安直「言葉が開く博物館、広がる言葉」『現代詩手帖 7月号「特集:詩からアートへ/アートから詩へ」』思想社、2014



飯舘村に積まれたフレコンバックの山（2015.9.6）

博物館から、アートに賭ける

佐藤李青

身近な海や森のものを食べること、手が届く木や土に触れること、思いっきり深呼吸をすること。どれもが土地に根ざして人が生きる上で自然なふるまいだ。しかし、震災後の福島では、そのすべてに意識的にならざるを得なくなった。その問題の根幹は自然ではなく、人間の側にある。言い換えれば、日本社会の「近代」や「成長」という思考が生み出した「文化」の問題なのだろう。

被災状況を語るとき、岩手や宮城では津波が議論の中心となる。だが、福島は違う。それは東京電力福島第一原子力発電所事故の影響が色濃く反映されるからだ。この事故は、その土地に暮らす人々の尊厳を著しく傷つけた。住まいを離れる。生業を失う。家族が別々に暮らす。他者のまなざしに気を遣い、気候も違うまちで生活をする。挙げれば切りがない。「被災」とは物理的な被害状況では見えにくい。比較が不可能な個々人の心情や経験のなかにある。その

一方で福島の経験は「フクシマ」や「FUKUSHIMA」として人類の歴史に、その名を刻まれることになった。

川延さんと小林さん、二人の旺盛な行動は何に駆り立てられているのか。それは怒りなのだろう。もちろん、理由はそれだけではない。だが、改めて、二人のインタビューを通して、そう感じた。あれから5年が経つ。それでも怒りは持続する。いや、持続している

のは怒るべきことが、いまも繰り返されているからなのかもしれない。変わらない、動かない、忘れてしまう。震災以降に誰もが口にしたこれらの言葉が、実践の渦中にある二人の眼の前には強い具体性をもって立ち現れているに違いない。そして、震災以降の経験が地理的な福島に「限定」された出来事と押し留められることへの危機感がある。

いま、川延さんらのまなざしは日本社会が「歴史的に経験してきたこと」へ向けられている。福島の経験を「共通の課題」とし、互いに学び合う。そこへ向かう方法として「博物館」や「アート」の役割に可能性を見出している。芸術や文化とはかたちを伴う「作品」や「文化財」だけでない。文化施設の役割とは「館」の内部に留まるものではない。文化を担う人や、その場の機能にもっと着目すべきなのだろう[*1]。

浜通りのいわき市では、2015年度に特定非営利活動法人

＊1 端信行氏（前掲書、2011年）は、文化財登録の有無や、有形、無形を問わず「地域の文化・文化財の所在情報」を把握し、「災害時に機能すること」を「阪神・淡路大震災の復興から学んだ文化復興の最大の課題」と指摘した（255-6頁）。だが、それは行政機関には「全面的には」困難であり、「行政機関と連携しつつ活動できるような「芸術文化ネットワーク」といった公共性のある組織体がそのような機能を担うことが望ましい」と提案した（258頁）。川延さんらの動きと、それが生み出したネットワークは、ここで挙げられている理想像と重なってくる。



下神白復興公営住宅（2015.10.8）

Wunder groundが下神白復興公営住宅でプロジェクトを実施した[*2]。この県営の集合住宅には原発事故により避難を余儀なくされた双葉郡4町（富岡町、大熊町、浪江町、双葉町）の人々が住む。200世帯が6棟に町ごとに分かれて暮らす。そのほとんどが65歳以上の高齢者だという。ここでは日本社会が経験するだろう「超高齢化社会」の課題にいち早く直面し、その対応が求められている。

道路を一本挟んで隣には市営の「災害公営住宅」があり、市内で地震や津波によって家屋を失った人々が住まう。たとえ同じ浜通りだとしても「文化」は違う。その「境界線」は目には見えにくいが根深い。いわき市が震災以降に内包してきた住民の「違い」は建物によって可視化された。

前例のない試みから、先例をつくり出す。いま福島に求められる取り組みは、その問題と可能性の両面において福島だけのものではないだろう。わたしたちは福島



下神白復興公営住宅でのワークショップ風景（2015.10.8）

「で」学ぶことができる。それは東北の地で、と言い換えることも可能かもしれない。川延さんらの実践は「文化」に賭けることこそが、ひとつの打開策となり得ると強く感じさせる。

この状況は誰もが望んだわけではない。それも忘れてはならないだろう。福島に頼るのではなく、ともに歩みを進めることができるのか。いまこそ、それが試されているように思えてならない。

＊2 プロジェクトの様子は事業報告書の『コミュニティとアート 被災地いわきからの提言〜来るべき超高齢化社会のために〜』（福島県、東京都、アーツカウンシル東京、特定非営利活動法人Wunder ground、2016）に収録されている。

福島県



2016.6.27

西会津町

data 3

会津から「福島」への広がり

原発の影響が少なかった会津では、震災後、福島県立博物館（以下、県博）が起点となり、それぞれの土地に根付いたアートプロジェクトが誕生した。その担い手の増加は、徐々に県全体へと波及して行っている。

県博を起点とした活動の展開

2005年		［県博］企画展『老い――老いをめぐる美とカタチ』＊本文P85参照
2007年		［県博］「開かれた博物館」を目標に掲げる「第三土曜日の博物館」を開始＊1
2009年		［県博］企画展『岡本太郎の博物館～はじめる視点～』
2010年		［県博］『会津・漆の芸術祭 2010』＊本文P66参照
2011年3月		**東日本大震災／東京電力福島第一原子力発電所事故**
	4月	［県博］避難所等で『ハートマークビューイング』実施＊2
	7月	『東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業（ASTT）』開始 →東京文化発信プロジェクト室（現・アーツカウンシル東京）より森と佐藤が県博を訪問。福島県の事務局をNPO西会津ローカルフレンズが担う
	11月	［ASTT］『週末アートスクール』開始＊本文P67参照
2012年	4月	『福島藝術計画×ASTT』開始 →福島県との共催を始める
	7月	［県博］『はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト』開始＊本文P68参照 →博物館主体の文化による福島の復興支援を主目的とした事業
2013年	4月	［福島藝術計画×ASTT］事務局をNPO法人Wunder groundに変更 →浜通りでの事業実施を本格的に始動する
	10月	［福島藝術計画×ASTT］『学校連携共同ワークショップ』開始 →企画運営を福島県立美術館が行う
2014年	4月	［福島藝術計画×ASTT］『森のはこ舟アートプロジェクト』開始＊本文P67参照
2015年	5月	NPO法人ふくしまアートネットワーク設立

＊1…4月から毎月のイベント日を開設。「館長土曜講座」として「東北学」の連続講座、映画上映会、コンサートなどを行い、開かれた博物館を体現した。＊本文P65、83参照
＊2…ハートマークのパッチワークをした布をつなぎ合わせ、タペストリーをつくるプロジェクト。全国の人々の「何かできないか」という想いをかたちにし、避難所や仮設住宅を飾りつけるものとして使われた。東日本大震災復興支援活動としてアーティスト・日比野克彦の呼びかけで開始。http://heartmarkviewing.jp

福島藝術計画×ASTT開催エリア（2015）

「福島藝術計画×ASTT」＊3は、会津を拠点とする「森のはこ舟アートプロジェクト」、中通りの福島県立美術館が企画運営を行う「学校連携共同ワークショップ」、浜通りのいわき市を対象とした特定非営利活動法人Wunder groundの「イトナミニティプロジェクト」と開催エリアを重ねながら全県的な広がりを持っている。



＊3…ウェブサイトは「情報発信プログラム」と位置づけ、「福島藝術計画×ASTT」に限らず、県内のアート活動の情報やインタビューを掲載している。http://f-geijyutsukeikaku.info
出典…伊藤達矢・渡部あきこ編『森のはこ舟 アートプロジェクト2015 活動報告』福島県・森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会、2016
福島県立美術館（國島敏）・特定非営利活動法人Wunder ground編『2015学校連携共同ワークショップ報告書』福島県・東京都・アーツカウンカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）・特定非営利活動法人Wunder ground、2016



伊藤和子
三瓶たか

いとうかずこ
さんぺいたか

NPO西会津ローカルフレンズ

伊藤和子…1948年福島県喜多方市生まれ。喜多方商業高校を卒業後、地元の農協に就職し、主に金融・共済を担当。定年退職後、仲間と共にNPO西会津ローカルフレンズを設立し、2010年にNPO法人化。西会津の魅力を都会に発信するメッセンジャーボックスとして、農産物や加工品を詰めた「んめぇ〜宅配便」を開始。また菓子加工所も立ち上げ、道の駅で郷土菓子や笹団子などの販売も行っている。
三瓶たか…1958年福島県西会津町生まれ。喜多方商業高校を卒業後、実家の商店に20年間勤務し、その後学校給食センターに8年間勤務。2006年よりNPO西会津ローカルフレンズの設立に参加。2011年から食品加工所「奥川小らんしょ村」の代表となり、奥川婦人会長も務める。
https://www.facebook.com/NPO-西会津-ローカルフレンズ-309122129271066/

ローカルフレンズの二人は、野菜や加工品の宅配便を販売したり、地域振興イベントを行ってきた地域おこしのNPOだ。震災後、芸術文化事業の事務局を務めることになり、アートやアーティストに出会っていく。そんな二人にとって「芸術」とは、どんなものなのだろうか?

芸術文化との出会い

和子　わたしたちは、西会津の新鮮な野菜や加工品を都会の人に宅配便で届けたりしている地域おこしのNPOなんですよ。

たか　もともとグリーンツーリズムのような感じで、いろいろな人に西会津に来てもらって、交流人口を増やそうということで勉強会を始めたんです。

和子　その頃は、西会津では誰もそういうことをしていなかったのよね。だから、勉強会から始めました。その名も「アクションプログラム勉強会」。27回もやったんですよ。

たか　西会津は山のなかにあるので、自分たちで自分たちのことを変えていかないと、どんどん過疎化で寂しくなっていくだけ。でも、よそから子供や若い人が自然を体験しに来てくれることで、自分たちの故郷を誇れるようになったらいいね、というようなことを話していたんだよね。そして、ぼちぼち活動を始めた頃に、東日本大震災があった。

和子　それまでは任意団体で活動していましたが、震災の前年にNPOにしました。NPOのほうが、社会的な信用が出ると思ったからです。

東日本大震災のときローカルフレンズは、西会津に避難されて来られた人たちにいち早くお昼の炊き出しを始めました。お金や米、野菜などは持ち出し。町内のお肉屋さんなどからも食材をいただきながら、公民館の調理室を借りて。そうしたら、いろいろな団体が「わたしたちもやる」と加わってくれて、結局22団体も集まりました。最後は窓口になって、「今

日はどこの団体、明日はどこの団体」って、黒板に分担を書いて2ヵ月くらい毎日やりましたね。

そんなことをしているうちに、一番上の息子から芸術文化事業（ＡＳＴＴ）の話があったんですよ。東京都が支援してくれるのだけど、お金を任せる団体が見つからなくて、やってくれないかという話だった。

たか　ＮＰＯは県内にいろいろあったけど、その頃は震災でどこもぐちゃぐちゃだったから、窓口になれるところが探せなかったんだよね。

和子さんから「どうする?」って電話が来て、「わたしたちで役に立てるんだったら、やろうか」って。たいして役に立たなかった気がするんだけど（笑）。

和子　そのときに芸術でもって復興支援をすると言われたんだけど、「うーん、何するの?」って思った。わたしたちは経済的な観念しかないわけ。都市から人を呼んで交流事業で地域にお金をなんぼ落とすかとかね、そういう発想なんですよ。だから、芸術でもってなんで復興支援できるんだろうという思いがずーっとありましたね。心のうちでは、何千万円も使ってもったいないという気持ちがあった。

たか　果たしてこれだけのお金が本当に有効に使われるのかというのはずーっと分かんなくて、二人でよく「分かんねぇ」って言ってたね（笑）。なんとなく分かるようになったのは、ずいぶんあとになってから。よく考えたら、最近かもね。

実際にやってみて、一流の人たちが動くというのは、わたしたちみたいな毎日１００円、２００円の計算じゃなくて、それなりのお金が動くというのは分かったね。それと、いろいろな人がいろいろなやり方で、被災地に寄り添いたいと思っていて、それはアーティストの人も同じなんだなと。最初は、人種が違うからよく分からなかったんだよね。

震災直後に、猪苗代湖ズっていうバンドの「福島が好き」という歌が県内でよく流れていたんですよ。あの歌には、みんな助けられたという思いがある。あの人たちは歌を歌うことで心を伝えて、手を差し伸べていた部分があって、絵を描く人は絵を描くことによって手を差し伸べているっていうことなんだろうなと思います。

和子　この事業（ＡＳＴＴ）は、いままで芸術に関わっていた人だけじゃなくて、ちゃんと地域のなかに入って活動したというのが特徴だよね。それがいまに生かされている。でも地域の人たちに説明して巻き込むというのは、やっぱり大変だったよね。

たか　会津の人間は、頑固だからね。人はそう簡単には変わらなくてさ、いまも変わりつつある途中だと思うよ。

和子　事業をやるには、根回しが必要。まず区長さんに挨拶に行ったり、「ここを使わせてもらうなら、持ち主は誰だよね」というようなことを押さえてやってきました。いきなり知らない人が行っても、事業はできない。それはやっぱり田舎の特徴だよね。そこら辺は上手にね。

たか　骨が折れるよね。ただ、それ以上にいろいろないい人に巡り合わせてもらいました。福島県立博物館の川延安直[*1]さんと小林めぐみ[*2]さんに始まって、赤坂憲雄[*3]館長がいろいろな物を書いてらっしゃるからそれを読むようになったりして、いままで知らなかったことを知る機会になった。それに、会議ではいろいろな人がいるから「あっ、そういう考え方もあるんだ」っていつも思う。

和子　最初に西会津に声がかかってから、三島、喜多方、猪苗代、北塩原と、うんとエリアが拡大しましたよね。誰か知っている人がいればそこに行ってみて、だんだんと人のつながりで増やしていったんです。

川延さんと小林さんの働きが、すごいんだよね。こんないっぱい事業があるのに「えっ、まだやるの?」ってくらい次から次へと動いていて。お陰でいろいろなとこへ連れて行っていただきました。

たか　いろいろなところにくっついて歩きましたよ。震災直後は、点の活動しかなかったからね。ところで、最初は何をやったんだっけ?

和子　何をやったんだっけね?　あんまりいろいろやったんで忘れちゃった。

たか　だいぶ記憶が薄れたね。わたしは、震災の翌年に軽い脳梗塞をやっちゃったの。大丈夫だったけ

なんとなく
分かるようになったのは、
ずいぶんあとになってから。
よく考えたら、最近かもね。

＊1　**川延安直**…Ｐ82へ。
＊2　**小林めぐみ**…Ｐ64へ。
＊3　**赤坂憲雄**…Ｐ65へ。

ど。だから、記憶が飛んでいるんです。

和子　何を言うのかと思ったら（笑）。

生きたお金

たか　芸術って、やっぱり絵を描いたり、その分野に秀でている人がその道に行くんだよね。その人が持っているよさを突き詰めていくと行き着くところがあって、それがたまたま芸術の場合もあるんだろうね。

和子　わたしは、「人はパンのみに生きるにあらず」ということに尽きると思うんだよね。人は、経済活動だけでは生きていけないというふうに思うの。だから人を引きつけるんだと思いますね。

　さっきも言ったけど、最初は芸術にかけるお金が、本当に生きたお金になるのか疑問だったけど、やってみて、やっぱり人の心に響くものがあることが大事で、それが芸術の力なんじゃないかしら。

　これまでほかにもいろいろな事業をやってみたけれども、どこにでもあるようなものには、いくら呼び掛けても人は集まって来ない。

　たとえば、雪がたくさん降って「除雪体験交流をしましょう」と呼び掛けても見向きもされないけど、言葉をちょっと変えて「ジョセササイズ」って言ったら人が集まって来たの。「除雪は労働じゃない。エクササイズなんだ！」と言うだけで、全然印象が違うのね。事業をやるには発想の転換が必要なんだとか、どんなターゲットにするかとか、集落の人を巻き込むにはどうするかとか、事業を組み立てる基本的なことを教わりましたね。

　いま、農林水産省（以下、農水省）の都市農村共生・対流総合対策交付金をもらって、西会津ふるさとファンづくり協議会を設立して事務局をやっています。予算は、年間１０００万円ほどで、地域を活性化するためのお金なんですけれども、いろいろな事業を展開しなくちゃいけないんですよ。農水省からは「あなたたちがやりたいことではなくて、地域がやりたいことを後押しするのがこの事業だ」と言われたんですが、地域の人たちのやりたいことなんてまとめられるわけないんですよ。だから、「あそこには誰がいる」「あの人は何をやりそうだ」というようにこっちで計画を立てちゃって、「こういうのやらない？」と言って乗せていっているんですね。そういうのは、こうした芸術文化事業（ＡＳＴ）で

鍛えられたと思いますね。

たか　ＮＰＯをつくる前にやった勉強会の下積みも生きたよね。

和子　生きたね。佐藤李青さんたち（ＡＳＴ）とのことが次の事業にも生かせているし、数をたくさんやったのがよかったのかも。

　たとえば、ホタルを使った地域おこし事業では黒沢地域の人たちを巻き込んだんだけど、そこで出会った人同士が、また違うプロジェクトに誘い合ったりして、別の場所でも人が混ざっていくの。だから、構成員があっちこっちでだぶりながらいろいろなことをやってくんだよね。風か匂いなのか分からないけれど、芸術というものが入ってくると、それが人を引き付ける力になると思いますね。

たか　アートの人たちって、何かをやったときにちゃんと報告書的な冊子をつくるよね。やりっ放しにしないで、ちゃんとかたちに残していく。そういうスキルを持っているからできるわけなんだけれど、大事なことですよね。チラシやポスターもすごくいいものができますものね。

和子　事務局をやらせてもらいましたけれども、李青さんにも鍛えられましたね。大変ご迷惑をおかけしながら。「期日を守る」というのは一番言われたし、領収書の処理は大変でした。でも、農水省の事業でも、当時の経験はとても役に立っています。

たか　東京都のレベルというのがあって、会計処理がきちっとしているからね。わたしら山んなかのＮＰＯとはレベルが違う（笑）。

地域を維持する源

和子　アートプロジェクトに関わるようになってから、あっちもこっちもでやることが増えましたね。

　わたしたちは、野菜づくりだけじゃなくて、途中

風か匂いなのか
分からないけれど、
芸術というものが入ってくると、
それが人を引き付ける
力になると思いますね。



福島県河沼郡柳津町

から加工所も経営するようになったんですよ。そうしたNPOの仕事もあるし、家のこともある。

たか　わたしなんか、孫2人も預けられちゃっていて、ママが午後8時半にならないと帰って来ないから、保育園に迎えに行ってご飯をつくらなきゃいけなくて……。会議に出られなくて、和子さんにお任せすることが多々ある。

和子　そういう時期だからしょうがないね。「できる人ができることをやろう」という感じで、ゆるったい連帯でやっているの。長続きするように。

たか　でもさ、そのわりにはいろいろやったよね。

和子　やったね。それに、西会津国際芸術村（以下、芸術村）[*4]の影響力は、まちにとってどんどん大きくなっているね。芸術村の来訪者は、年間3000人を超えているんだって。だから消防署から指摘を受けて、スプリンクラーを設置することになったそうです。

「できる人ができることをやろう」という感じで、ゆるったい連帯でやっているの。長続きするように。

あとは、商品開発をして、道の駅で売っています。高校生が開発した「かたつむりのかたちをした麩のラスク」とか。道の駅の入り込み客数も、何万人も増えて、年間40万人を超えたらしいですよ。元農林課長に理由を聞いてみたら、野菜と物産に特徴があるのと、交流人口が増えたからなんですって。つまり、わたしたちや芸術村、集落、観光交流協会でやっている事業で来る人が増加しているのよ。最近は、ほかの地域の人に「西会津は、いろんなことやっているよね。うちのほうは何にもしてない」って言われたりするもの。

芸術村は、もういろんなことをやってきたので、これからは情報発信にも力を入れてくんじゃないかな。そういう分野は、わたしたちは苦手（笑）。

たか　いまは、いろいろな団体がまちで自発的に事業をやっているよね。各集落のそば祭りに安座おとめゆり祭り、イワナの渓流釣り。奥川健康マラソン



＊4　西会津国際芸術村…2002年に廃校となった木造校舎（旧新郷中学校）を、創作活動・ギャラリー・地域文化の育成・グリーンツーリズムの拠点等に活用している文化交流施設。西会津町及び株式会社西会津町振興公社が共同で管理・運営を行っており、公募展・アーティストインレジデンス・芸術教室などの事業をNPO法人西会津国際芸術村が推進している。
http://nishiaizu-artvillage.com

大会は、もう41回目か。数えれば切りがないくらい。

和子　でもローカルフレンズは、野菜の宅配便しかしてないね。何もしなくても連帯していようという感じ（笑）。

たか　それぞれがいろいろな活動をしているから、忙しいんだよね。でも、何かイベントがあるときは、「ちょっと手伝って」って言うとみんな集まってくれる。義務感は全然ない。

和子　お互い無理強いするようなことは何もないですね。

たか　最近、若い人たちが集まっていろいろな事業やるようになりましたよね。でも、やっぱり事業を組み立てる段階で、集落を巻き込むことを視野に入れたほうがいいと思いますね。自分たちだけで満足していては駄目だと思う。

和子　芸術っていうのは、特定の人に対してだけではないですからね。それこそ「パンのみにあらず」というのは、芸術は絵とかだけじゃなくて、生活そのものなんだ、文化なんだっていうところまで持って行けたらいいのかなって。

たとえば、知らず知らずのうちに、鍬（くわ）を使って畦（あぜ）づくりをするなんていうことは、いまもうやらなくなってきているけど、こういうことも文化なのねっていう気づきが生まれたりする。そういうことが、地域を維持する源になるのかなと思います。

たか　昔ながらの文化的なものは、意識的に残していかないとね。それに、新しく出てきた芸術や文化的な活動も、同じように意識的に人に浸透させていくというか、みんなで一緒になってやらないと、やる人たちがいなくなっちゃったら何も残らないなんてことになりかねないと思うよ。

和子　いまは本当に、昔の技術を習得する人がいなくなったよね。

たか　だけどほんとうにいないのかしら？　わざわざ東京からやって来て、うちで田植えをするグループがいるんだけど、鍬でくろつけ[*5]してたりするよ。それを見て、昔ながらのことがなくなりそうななかで、逆に大切にする気持ちが生まれている人もいるんだなと思いました。継承は、芸術のひとつの仕事なんじゃない？　それ以外にほかに文化を継承していく方法がないものね。

それにしても、わたしたちも年を取ってきたのかもしれない。若いときは周りなんか見ないで自分のことばかりやっていたけれど、ちょっとだけ周りが

＊5　くろつけ…田んぼの土手が壊れないように、鍬で畦の側面を削り、よく捏ねた田んぼの泥で補強すること。

見られるようになった気がする。そうしたら、古いものがとても大切だなと思ったり、なくなってしまうと取り返しがつかないものがあるんだと気づく。

たとえば、和子さんがつくっている笹団子は、昔はどこの家でもつくっていたけど、いまの若いお嫁さんはつくれないからね。食文化もずいぶん変わってしまって、どこに行ってもハンバーグやスパゲティばっかりで、その地域でずっと食べていたものが分かんなくなっているよね。

和子　そうだね。

たか　家もそう。この辺で４００年くらい経った古民家がしっかり建っているのを見ると、新しく建てた家は確かに住み心地がよくて、床暖房もついていてよさそうに見えるけど、実際は、本当にいい素材でつくった家と新建材でぱぱっとつくった家とでは、暖かみが違うような気がする。だから、いいものでつくられたものは、ちょっと古くても磨いたり直したりして、大事に使うのがいいと思いますね。

ちょっと古くても
磨いたり直したりして、
大事に使うのが
いいと思いますね。



その延長線上で、いま家の修復について勉強会をしながら、古民家再生事業をやっているんですよ。

和子　集落の人たちには、集会所として使ってもらったり、イベントをやっていろいろな人が出入りするようになると説明しました。あとは農家民宿のようにゲストハウスとして使うかもしれないと。

今回プロジェクトでは人材雇用もあって、アーティストを一人雇用するんですよ。その人の才能を生かして、魅力的なものにして行こうと。せっかくやるんだったら、いいものにしたいじゃないですか。どんなふうになるか分からないけど。

たか　アーティストにお任せっていうよりは、みんなでアイデアを出し合う感じだよね。

ありんこの役割

たか　原発の影響は、まだありますね。西会津の場合は、山菜や茸から検出された放射線は、基準値よりもうんと低かったんですよ。ところが今年になって、基準値よりもちょっと余計に出た。それによって、コシアブラと野生茸は全面販売禁止。

ホットスポットっていう、ある一部だけ放射線量が高い場所があるじゃない？　拙い知識で言うと、ホットスポットに枯れ葉が落ちて、それを養分と一緒に木が吸い上げて、またそれが新芽に移行するっていう循環をやっているから終わらないんだよね。水も、流れていった先の溜まっている部分の線量が高くなっている。それに海も川もつながっているからね。それを言っちゃうと大変なことになるから、誰もそのことは言わないけれど。

他県よりは情報が来ているだろうけど、変だよなって思わなければ、全然知らされてないことは多々あると思う。

和子　原発なんか、いまどういう状態なのか情報を出してないもんね。それでいて帰還困難区域を除いて帰還を解除するとかね。収束してないのに何で解除するんだろう？　わたしたちに疑問があるくらいだから、当事者だったら許せないだろうね。

たか　人間のために電気をつくっていたはずなのに、それによって人間が苦しむ状態になるんだったら、何のための原子力？　子供や次の世代のことを考えたら、何で原子力を止めることができないのか分からないよね。

和子　とにかくいまは、古民家改修の事業をやってしまわないとだね。ビオトープづくりとか、まだほかにいくつもあるの。やりすぎるくらい。農水省の補助事業を紹介してくれる人がいて、じゃあやってみようかということで乗ったんだけれども、結局全部自分たちでやる羽目になっちゃった。でも、わたしたちもそうだし、芸術文化で鍛えられたことが、いろいろなところに生きているなっていう感じはしますね。

とにかく、川延さんと小林さんの動きがすごいよね。ここが限界っていうのを見たことない。

たか　それにちゃんと、軸を見ているんですよね。ものの組み立て方が上手だよね。

和子　でも地域の人を乗らせるのはわたしたちの仕事だよね。（住民自らが）やるのを待つんでない、やるようにするんだよ、それがわたしらの役割だから。

たか　役割分担があると思うよ。それぞれの年代やスキルもあるけど、やっぱりそれなりの役割分担があって成り立っている。一人、二人じゃできない。

まずプロデュースできる人がいて、土着の人というか、わたしらみたいにありんこ部隊が地域とつないでいく必要がるんだよね。

和子　ありんこ部隊は、大事だよね。でも、それだけでもしょうがないよね。

たか　そうなの！　ありんこ部隊だけでもしょうがないの。

和子　でも、ありんこはいっぱいいるから、そことつなぐのが大事だよね。

たか　ありんこも最近疲れるけどね（笑）。

やるのを待つんでない、
やるようにするんだよ、
それがわたしらの役割だから。

伊藤和子
三瓶たか

福島県西会津町



西会津町の花「おとめゆり」(2015.5.30)

あっけらかんとした強(したた)かさ

佐藤李青

書くことは忘れることだと思う。本書の制作過程は、否応なく、この5年の経験と向き合う作業となった。そのなかで、いくつもの記憶違いに気がついた。無意識に書き換えられた記憶が、記録として定着し、自律してしまえば、ある事実の忘却と同じ意味を持つ。間違いを見つけるたびにひやっとしながら、一方で記憶を文字に定着させる作業は安堵感も生んだ。これで安心して忘れることができる、と。インタビューの収録は、それぞれ人々の経験と記憶を巡る旅のようだった。震災の経験を共有し、継承することは、いま取り組むべき課題のひとつなのだろう。だが、その旅も、ローカルフレンズの二人のあっけらかんとした忘却との出会いで終えることになる。

正式名称は「特定非営利活動法人NPO西会津ローカルフレンズ」。特定非営利活動法人は、NPO法人とも表記する。そうするとローカルフレンズの名前には2回、「NPO」が登場してしまう。とんだうっかりである。そこに何かローカルフレンズらしさを感じてしまう。

ローカルフレンズは、事業の立ち上げから福島全県の事務局を担った。東京で本事業開始時に、まず検討したのは現地団体の負担軽減の方策だった。各県に事務局を立てたのは、精算処理の一元化を図るためだった[*1]。ほかにも手続きの簡略化を行ったが、その事務量はローカルフレンズに大きな負担となっただろう。だが、それを粘り強く、淡々とこなしていた。この関係は2014年に特定非営利活動法人Wunder groundが引き継ぐまで続いた。

なぜ、芸術で被災地支援になるのか。「ずーっと」引っかかっていたのだという。「ずーっと」という言葉を二人は声を揃えて、何度も繰り返した。そこには「わたしたちは経済的な観念しかない」という表現にある「生活者」としての確固たる土台があった。そして「芸術」との出会いに戸惑いながらも、それを地域で自分たちが生きる技術として存分に吸収していった。いまや、誰よりも確信をもって「芸術」の活動に取り組んでいるように見える。その立ち位置から、時々に二人が放った言葉は、わたしたちに強い印象を残した。

現代美術家の宮島達男さんが始めた長崎の「被爆柿の木二世」の苗木を植える『柿の木プロジェクト』を2012年に実施した[*2]。

＊1 本事業では都内事業と同様に協定書の締結、前払いの実施、領収書等の証憑書類の確認等の手続きを行ったが、書類のひな形を作成する等の細かな対応が必要となった。また、担当のプログラムオフィサーは各県の事務局と予算面の進捗も共有し、適宜サポートを行った。公益社団法人企業メセナ協議会の東日本大震災 芸術・文化による復興支援ファンド『GBFund』の検証結果においても「迅速かつ柔軟な助成制度の設計と運用」と「事務局の対応」として「事務手続きの簡易さ、迅速さ、フレキシブルさ」が評価されている(『GBFund 2011-2015[報告書]』公益社団法人企業メセナ協議会、2016)。

＊2 『時の蘇生-柿の木プロジェクト』は1995年に始まり、現在は世界各地で実施されている。開催地域の子供たちと「被爆柿の木二世」の苗木を植え、育むことで、一人ひとりの「時の蘇生」を目指している。2013年度は、福島藝術計画×AST Tの一環として苗木の「里親募集」に申し込みがあった本宮市と会津若松市の5カ所で実施した。



「柿の木プロジェクト」の会議風景(2012.12.5)

あるとき、関係者でプロジェクトの説明の仕方を議論したことがあった。明快な結論が出たのかは覚えていない。ただ、終盤にローカルフレンズの二人のどちらかが「そっか、こうやって議論できるのがいいんだな」といった一言で、みなが何か腑に落ちたことを覚えている。議論は必然的に福島のシビアな状況を仔細に検討することになった。だが、その場には、真っ当にその課題を論じるのとは違った、朗らかともいえる雰囲気があった。それを見事に言い当てていた。

このエピソードを話すと「そうだったけぇ」と二人は顔を見合わせた。すっかり忘れていたのだ。印象深い出来事はほかにもあったが、結果は同じだった。自ら精緻に記録を残すことよりも、周囲の人の記憶に焼き付き、誰かに語りたくなるものこそが、記憶の継承には重要なのかもしれない。

「地域の人を乗らせるのはわたしたちの仕事」。この言葉には土地に密着して生きる「ありんこ」としての強かさがある。「年代やスキル」も違う人々との「役割分担」を意識した「虫の目」は、ある土地の文化に触れるための大事な視点となるだろう。そして、それは、これからより必要となるだろう「被災地」や「被災者/支援者」という俯瞰的な見方ではなく、東北の地で生きる人々との固有の関係を築くためにも不可欠なものであるのだと思う。



本宮市での「柿の木プロジェクト」の様子(2013.3.8)

おわりに

自分の歩幅で当事者になっていくこと

初めて東北を訪れたのは、２０１５年５月30日のことだった。アーツカウンシル東京の研修として、『森のはこ舟アートプロジェクト』の事業打ち合わせに同行したのが、生まれて初めての「東北」だった。

新緑の眩しい時期で、青々と生い茂る森が視界いっぱいに広がっていくのを心地よく感じると同時に、この森を越えた先に広がる海と東京電力福島第一原子力発電所の存在を意識せずにはいられなかった。そして、ここ東北の風土に寄り添い育まれてきた営みや文化の豊かさを思い、胸が熱くなったのを覚えている。

２０１５年まで大分県別府市のアートＮＰＯで働いていたこともあり、東北は少し遠い場所だった。東日本大震災が起こったとき、九州では「きっとこれから先、５年後、10年後に必要となることが出てくる。そのときに動けるように、離れているからこそ、いま、ここでできることをやろう」と話し合っていた。

不思議なもので、２０１５年12月に、『東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業（ＡＳＴＴ）』を佐藤と共に担当することになり、いまでは月に一度は、東北へ通っている。

震災から5年目の3月11日は、初めて釜石を訪れた。その日は、@リアスが運営する『とうほくのこよみのよぶね』（Ｐ22参照）の立ち会いだった。まちを案内してもらい、ニュースでしか見たことがなかった嵩上げや防波堤の工事を目にした。

「足元の土の下、約7メートル先がもともとの地面だった場所。工事のために何度も道がつくり変えられるから、地元の人ですら道に迷うんですよ」。

「困っちゃうよね」と淡々と説明してくれる一言ひと言が、ズシンと響いた。

よく知っている場所が、知らない場所に変わっていく。それはまるで、とても大切な何か（何者か）の輪郭が、じんわりと滲んでいくような感覚に近いと思う。その日、ゆっくりと陽が暮れる海に、「3」「・」「11」の行灯を乗せた船が浮かんだ。それを見つめながら、これまでといま、そしてこれから先に想いを馳せ、行動していくために、まさにこれから、よりアートが必要となるのではないかという想いを強くした。

本書には、本事業の現地パートナーである7名の声とまなざしが収められている。本事業の立ち上げから担当している佐藤は、本書の冒頭で、今回のインタビューが彼らとの「出会い直し」の機会だったと語っているが、わたしはそこに立ち会い、彼らの語りを通して、まだ知らない東北に出会っていった。

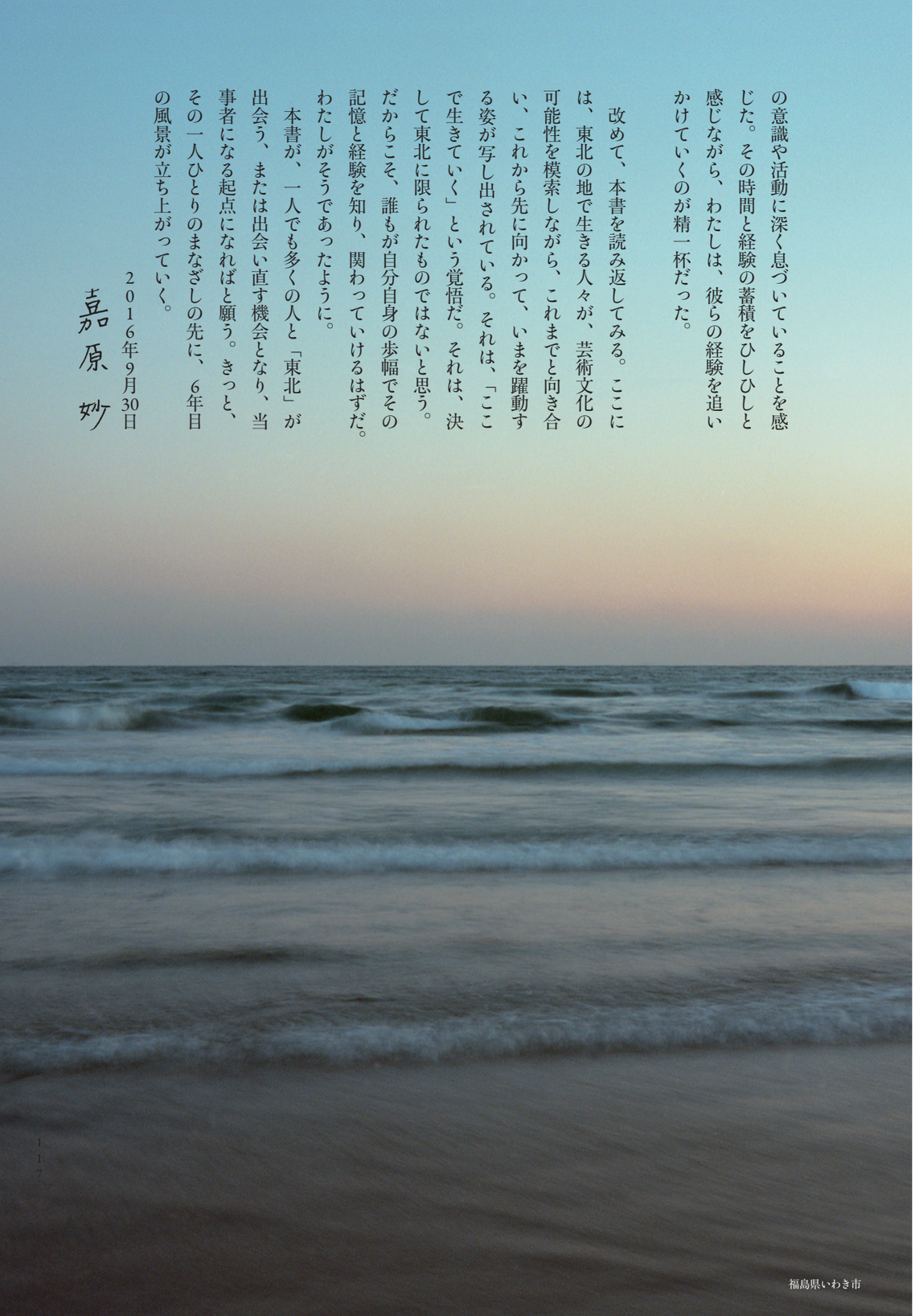
インタビューの際に印象的だったのは、各地のパートナーと佐藤との関係性だ。現地の人々の想いや時間に寄り添いながら、5年の月日をプログラムオフィサーとして「伴走」してきたという事実が、各地の人々の意識や活動に深く息づいていることを感じた。その時間と経験の蓄積をひしひしと感じながら、わたしは、彼らの経験を追いかけていくのが精一杯だった。

改めて、本書を読み返してみる。ここには、東北の地で生きる人々が、芸術文化の可能性を模索しながら、これまでと向き合い、これから先に向かって、いまを躍動する姿が写し出されている。それは、「ここで生きていく」という覚悟だ。それは、決して東北に限られたものではないと思う。だからこそ、誰もが自分自身の歩幅でその記憶と経験を知り、関わっていけるはずだ。わたしがそうであったように。

本書が、一人でも多くの人と「東北」が出会う、または出会い直す機会となり、当事者になる起点になればと願う。きっと、その一人ひとりのまなざしの先に、6年目の風景が立ち上がっていく。

２０１６年９月30日

嘉原妙



福島県いわき市

「Art Support Tohoku-Tokyo」開催記録 2011-2015

東日本大震災の発生を受けて、東京都が2011年6月に「東京緊急対策2011」を作成。本対策は、
東京都が有する「人的・財政的・技術的資源」を活用し、「被災者・被災地が自ら踏みだす復旧・復興を後押し」することを
目指し、芸術文化の分野は「被災者・被災地へのきめ細やかな生活復旧への支援」の一部と位置づけられた。これに基づき、
東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団の共催事業として、東京文化発信プロジェクト「東京アートポイント計画」の
手法を用いた被災地支援事業を開始した。2015年の東京文化発信プロジェクト室とアーツカウンシル東京の
組織統合後は、「芸術文化創造・発信事業（東京の文化力による震災からの復興）」として実施している。

2011

仮設住宅や集会所、仮設商店街でのワークショップの実施といった被災直後の現地状
況に対して、課題応答型の多種多様なプログラムを展開した。3県で19プロジェクトを
実施。東京都交響楽団とヘブンアーティストの派遣も、本事業の枠内で行った。

	事業名	主催等	開催月
岩手	川俣正ワークショップ	主催：一般社団法人CIAN、特定非営利活動法人いわて連携復興センター	10月
	ひょっこりひょうたん塾	主催：ひょっこりひょうたん島プロジェクト実行委員会、 特定非営利活動法人いわて連携復興センター	11〜3月（2012）
	モザイクタイルで看板を！	主催：田老 元気なまちづくりプロジェクト、特定非営利活動法人いわて連携復興センター 協賛：名古屋モザイク工業株式会社	12月、2月（2012）
	釜石アート支援プログラム	主催：特定非営利活動法人@リアスNPOサポートセンター、 特定非営利活動法人いわて連携復興センター 協賛：シーアイ化成株式会社	12〜3月（2012）
	鵜鳥神楽「宿めぐり」	主催：鵜鳥神楽「宿めぐり」実行委員会、特定非営利活動法人いわて連携復興センター 協力：紅葉亭かぐら、一般社団法人グリーンカレッジ岩泉	1〜3月（2012）
宮城	藤浩志とカンがえるワークショップ	主催：えずこ芸術のまち創造実行委員会、えずこホール（仙南芸術文化センター）	9〜1月（2012）
	雄勝法印神楽　舞の再生計画	主催：雄勝法印神楽再生実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会	9〜10月
	女川コミュニティカフェプロジェクト	主催：対話工房、えずこ芸術のまち創造実行委員会 後援：女川町復興連絡協議会 協力：震災リゲイン、ドイツ大使館	11〜2月（2012）
	アート・インクルージョン　クリスマスプロジェクト2011	主催：アートインクルージョン実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会 協力：えずこホール（仙南芸術文化センター）、一般社団法人MMIX Lab 助成：ARTS NPO AID、東日本大震災復興支援財団「子どもサポート基金」	12月
	ユイノハマプロジェクト 「カラダでぶつかり、汗を流す。集え、21人の浜っ子たち」	主催：結浜プロジェクト実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会	12〜3月（2012）
	震災ケア・アートサロン	主催：こどもとあゆむネットワーク、えずこ芸術のまち創造実行委員会	12〜3月（2012）
	アーティストラン！！イボイシステーション！！	主催：ビルド・フルーガス、えずこ芸術のまち創造実行委員会 協力：3がつ11にちをわすれないためにセンター、えぜるプロジェクト	1〜2月（2012）
	マイタウンマーケットキャラバン	主催：マイタウンマーケット実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会	1〜3月（2012）
	アートポンプ計画　気仙沼「こどもと復興商店街ワークショップ」	主催：一般社団法人MMIX Lab、えずこ芸術のまち創造実行委員会	2月（2012）
	アートポンプ計画　山元町「山元町伝統工芸職人支援事業」	主催：一般社団法人MMIX Lab、えずこ芸術のまち創造実行委員会	2月（2012）
福島	福島大風呂敷	主催：プロジェクトFUKUSHIMA!実行委員会、 特定非営利活動法人NPO西会津ローカルフレンズ	8〜11月
	までいの会プロジェクト	主催：いいたてまでいの会、特定非営利活動法人NPO西会津ローカルフレンズ 後援：福島民報社 協力：特定非営利活動法人西会津国際芸術村、福島県立博物館	11〜3月（2012）

	喜多方・三島・西会津週末アートスクール	主催：特定非営利活動法人NPO西会津ローカルフレンズ 協力：特定非営利活動法人まちづくり喜多方、特定非営利活動法人喜多方グリーンツーリズム・サポートセンター、西会津町振興公社、西会津元気グリーンツーリズム協議会、特定非営利活動法人わくわく奥会津.COM、喜多方観光バス 企画：「東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業（福島）」運営協議会	11〜3月（2012）
	南相馬アートのあそびばプロジェクト	主催：南相馬市市民活動サポートセンター、特定非営利活動法人NPO西会津ローカルフレンズ 協力：南相馬市社会福祉協議会、南相馬市立上真野幼稚園、南相馬市文化会館、いいたてまでいの会、福島県立博物館	2月（2012）
宮城／福島	東京都交響楽団		7〜2月（2012）
岩手／宮城／福島	ヘブンアーティスト		7〜3月（2012）

発行物：『Art Support Tohoku-Tokyo PROJECT REPORT 2011』（日／英）、『福島大風呂敷／FUKUSHIMA！O-FUROSHIKI DOCUMENT』、『MIYAGI REPORT 2011-2012 − 10のプロジェクトとシンポジウム』

※主催はすべて「東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）」を含む。

2012

緊急対応の時期を過ぎると、アーカイブや議論の場づくりといったトピックが浮上してきた。現地自治体（岩手県大槌町、宮城県、福島県）との共催での事業も開始し、福島県とは「福島藝術計画× Art Support Tohoku-Tokyo」を全県的に展開。3県で18プロジェクトを実施。

	事業名	主催等	開催月
岩手	ひょっこりひょうたん塾	主催：ひょっこりひょうたん塾、大槌町、特定非営利活動法人いわて連携復興センター	4〜3月（2013）
	普代村鵜鳥神楽継承プロジェクト	主催：特定非営利活動法人いわて連携復興センター	9〜3月（2013）
	釜石アート支援プログラム「とうほくのこよみのよぶね」	主催：特定非営利活動法人@リアスNPOサポートセンター、特定非営利活動法人いわて連携復興センター 協力：岐阜県、こよみのよぶね実行委員会、m28e有限会社、有限会社エルテックサービス、アースシップ（岐阜郡上八幡ラフティングチーム）	3月（2013）
宮城	藤浩志とカンがえる！ドキュメント	主催：宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会	4〜3月（2013）
	女川常夜灯ワークショップ「あるく・かたる・火をかこむ」	主催：宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会、対話工房 後援：女川復興連絡協議会	5〜9月
	山元町「井戸端会議」支援事業	主催：宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会、アートリバイバルコネクション東北 協力：3がつ11にちをわすれないためにセンター	9〜2月（2013）
	ユイノハマプロジェクト「桃浦を想い、桃浦を担ぐ、桃浦を紡ぐ」	主催：宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会、結浜プロジェクト実行委員会	10〜3月（2013）
	アートでHUGくもう！ おおあみキッズアート2012	主催：宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会、特定非営利活動法人とめタウンネット	11月
	浦戸諸島リサーチプロジェクト	主催：宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会、ビルド・フルーガス	12〜3月（2013）
	なんのためのアート	主催：宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会 共催：せんだいメディアテーク 事務局：アートリバイバルコネクション東北	1月（2013）
	ARC＞T_ARCHIVE	主催：宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会、アートリバイバルコネクション東北	2〜3月（2013）

福島 （福島藝術計画× Art Support Tohoku-Tokyo）	フラッグシッププログラム	主催：福島県、特定非営利活動法人NPO西会津ローカルフレンズ	6〜3月（2013）
	週末アートスクール	主催：福島県、特定非営利活動法人NPO西会津ローカルフレンズ 協力：特定非営利活動法人まちづくり喜多方、特定非営利活動法人 喜多方グリーンツーリズム・サポートセンター、西会津町振興公社、 西会津元気グリーンツーリズム協議会、特定非営利活動法人わくわく奥会津.COM	6〜3月（2013）
	柿の木プロジェクト	主催：福島県、特定非営利活動法人NPO西会津ローカルフレンズ、柿の木プロジェクト実行委員会 協力：本宮市	6〜3月（2013）
	マイタウンマーケットキャラバン	主催：福島県、特定非営利活動法人NPO西会津ローカルフレンズ、北澤潤八雲事務所	6〜3月（2013）
	南相馬アートのあそびばプロジェクト	主催：福島県、特定非営利活動法人NPO西会津ローカルフレンズ 協力：南相馬市市民活動サポートセンター、南相馬市国際交流協会	6〜3月（2013）
	福島旗プロジェクト「はた と 想う」	主催：福島県、特定非営利活動法人NPO西会津ローカルフレンズ、 特定非営利活動法人プロジェクトFUKUSHIMA、プロジェクトFUKUSHIMA！実行委員会	8月
	までいの心による地域作りプロジェクト	主催：福島県、特定非営利活動法人NPO西会津ローカルフレンズ、いいたてまでいの会 協力：蔵の会、大原美術館	10月

発行物：『Art Support Tohoku-Tokyo PROJECT REPORT 2012』、『鵜鳥神楽と水門』、『なんのためのアート』、
『見る、聞く、話す、感じる、そして考える。』、『ひょっこりひょうたん塾 2012年度 活動報告書』、
『福島藝術計画× Art Support Tohoku-Tokyo 2012』

※主催はすべて「東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）」を含む。

2013

長期的な芸術文化活動を見据えた、地域の持続的な体制づくりが焦点となってくる。自治体との連携も継続し、3県で14プロジェクトを実施。宮城県では、過去の事業成果を踏まえて「おがつの芸祭 鼓舞」、「みやぎぶんか3ねんめ会議」への後援も行った。

	事業名	主催等	開催月
岩手	ひょっこりひょうたん塾	主催：ひょっこりひょうたん島プロジェクト実行委員会、大槌町、 特定非営利活動法人いわて連携復興センター	9〜3月（2014）
	きむらとしろうじんじんの「野点」in 釜石・大槌	主催：特定非営利活動法人@リアスNPOサポートセンター、 特定非営利活動法人いわて連携復興センター 協力：東京藝術大学熊倉研究室	9〜10月
	釜石アート支援プログラム「とうほくのこよみのよぶね」	主催：特定非営利活動法人@リアスNPOサポートセンター、 特定非営利活動法人いわて連携復興センター 協力：こよみのよぶね実行委員会、宝来館、三陸ひとつなぎ自然学校、株式会社山長建設	3月（2014）
宮城	つながる湾プロジェクト	主催：ビルド・フルーガス＋一般社団法人チガノウラカゼコミュニティ、一般社団法人torindo、 えずこ芸術のまち創造実行委員会 共催：塩竈市、塩竈市教育委員会 助成：公益財団法人日本財団 協力：ヒビノスペシャル、チームwan	5〜3月（2014）
福島 （福島藝術計画× Art Support Tohoku-Tokyo）	発信・発展フォーラム	主催：福島県、特定非営利活動法人Wunder ground	6月、3月
	筑波大学CRプロジェクト	主催：筑波大学創造的復興プロジェクト、福島県、特定非営利活動法人Wunder ground 協力：土湯温泉芸術祭実行委員会	7月、10月
	「プロジェクトFUKUSHIMA！」美術部	主催：特定非営利活動法人プロジェクトFUKUSHIMA、 プロジェクトFUKUSHIMA！実行委員会、福島県、特定非営利活動法人Wunder ground	8月
	週末アートスクール	主催：福島県、特定非営利活動法人Wunder ground 共催：三島町教育委員会（三島町実施事業のみ） 協力：特定非営利活動法人NPO西会津ローカルフレンズ、特定非営利活動法人まちづくり喜多方、 株式会社西会津町振興公社、特定非営利活動法人わくわく奥会津.COM	8〜11月
	DAYLILY ART CIRCUS 2013	主催：福島県、特定非営利活動法人Wunder ground	9月

	小名浜仮設美術館「地引網と浮き球」	主催：福島県、特定非営利活動法人 Wunder ground 協力：UDOK.	9月
	学校連携共同ワークショップ「スタンプを創ろう！ 大きな絵」	主催：福島県、特定非営利活動法人 Wunder ground 企画運営：福島県立美術館	10〜12月
	猪苗代・はじまりの美術館プロジェクト	主催：社会福祉法人安積愛育園はじまりの美術館準備室、福島県、 特定非営利活動法人 Wunder ground 協力：日本財団、株式会社 studio-L、あさかホスピタルグループ 後援：猪苗代町、猪苗代町商工会、猪苗代町観光協会、株式会社まちづくり猪苗代、 猪苗代体験交流協会、福島民報社、福島民友新聞社、朝日新聞福島総局	10〜2月（2014）
	日比野克彦つなげるつながるプロジェクト「6年間の思い出ベスト10 ！」	主催：福島県、特定非営利活動法人 Wunder ground	2月（2014）
	対話劇を作ろう 平田オリザプロジェクト	主催：福島県、特定非営利活動法人 Wunder ground	2月（2014）

発行物：『Art Support Tohoku-Tokyo PROJECT REPORT 2013』、『ひょっこりひょうたん塾 平成25年度 活動報告書』、『海辺の記憶をたどる旅――つながる湾プロジェクトドキュメントブック』、『福島藝術計画× Art Support Tohoku-Tokyo 2013』

※主催はすべて「東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）」を含む。

2014

3年を節目に外部支援が減少。岩手県と宮城県では重点的な地域展開を行い、事業体制の拡充を試みる。福島県では、継続的に全県的な事業展開を行う。いわき市では復興公営住宅への移行による課題の検討が始まった。3県で11プロジェクトを実施。

	事業名	主催等	開催月
岩手	ひょっこりひょうたん塾	主催：ひょっこりひょうたん島プロジェクト実行委員会、 特定非営利活動法人いわて連携復興センター 助成：大槌町コミュニティ再生会議	8〜3月（2015）
	きむらとしろうじんじんの「野点」in 釜石・大槌	主催：特定非営利活動法人@リアスNPOサポートセンター、 特定非営利活動法人いわて連携復興センター 協力：大槌北小福幸きらり商店街、大念寺、東京藝術大学熊倉研究室	9〜10月
	釜石アート支援プログラム「とうほくのこよみのよぶね」	主催：特定非営利活動法人@リアスNPOサポートセンター、 特定非営利活動法人いわて連携復興センター 協力：こよみのよぶね実行委員会、宝来館、三陸ひとつなぎ自然学校、株式会社山長建設	3月（2015）
宮城	つながる湾プロジェクト	主催：ビルド・フルーガス＋一般社団法人チガノウラカゼコミュニティ、 えずこ芸術のまち創造実行委員会 共催：塩竈市 運営：つながる湾プロジェクト運営委員会	7〜3月（2015）
	芸術銀河2014× Art Support Tohoku-Tokyo 忘れないための被災地キャラバン 「いま、もう一度、見て、聴いて、カンがえる。」	主催：宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、えずこ芸術のまち創造実行委員会	11月
福島 （福島藝術計画 × Art Support Tohoku-Tokyo）	森のはこ舟アートプロジェクト2014	主催：福島県、森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会 協賛：日本たばこ産業株式会社 協力：文化芸術による復興推進コンソーシアム	6〜3月（2015）
	マナビバ。-manaviva- 被災地のこれからを考える勉強会	主催：福島県、特定非営利活動法人 Wunder ground、いわき芸術文化交流館アリオス 共催：いわき未来会議	9〜11月
	近所にできた小さな美術館をみんなではじめるフォーラム第2弾「美術館にできること　美術館だからできること」	主催：はじまりの美術館、社会福祉法人安積愛育園、福島県、 特定非営利活動法人 Wunder ground	9月
	学校連携共同ワークショップ「ふしぎな世界の入り口」	主催：福島県、特定非営利活動法人 Wunder ground 企画運営：福島県立博物館	9〜1月（2015）
	ほったてフロンティア	主催：福島県、特定非営利活動法人 Wunder ground、UDOK.、小名浜本町通り芸術祭実行委員会	9月〜10月

	情報発信プログラム	主催：福島県、特定非営利活動法人 Wunder ground	通年

発行物：『東日本大震災後、4年目の語り。』、『海辺の記憶をたどる旅［2013-2014］―つながる湾プロジェクトドキュメントブック』、『忘れないための被災地キャラバン』、『マナビバ。―文化・芸術・アートの視点で被災地のこれからを考える』、『平成26年度学校連携共同ワークショップ「ふしぎな世界の入口」報告書』、『森のはこ舟アートプロジェクト2014』

※主催はすべて「東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）」を含む。

2015

被災状況への応答を経て、震災が顕在化させた地域の課題と長期的に向き合うための事業展開が求められるようになる。そのため、集中的な地域展開と新たな事業展開を模索する。福島県では、復興公営住宅での事業を実施。3県で9プロジェクトを実施。

	事業名	主催等	開催月
岩手	きむらとしろうじんじんの「野点」in 釜石・大槌　リサーチ＆アーカイブ	主催：特定非営利活動法人@リアスNPOサポートセンター、 特定非営利活動法人いわて連携復興センター	5～2月（2016）
	コミュニティ拠点形成プログラム	主催：特定非営利活動法人@リアスNPOサポートセンター、 特定非営利活動法人いわて連携復興センター	6～3月（2016）
	釜石アート支援プログラム「とうほくのこよみのよぶね」	主催：特定非営利活動法人いわて連携復興センター 協力：特定非営利活動法人@リアスNPOサポートセンター、 こよみのよぶね実行委員会、宝来館、三陸ひとつなぎ自然学校	3月（2016）
宮城	つながる湾プロジェクト	主催：つながる湾プロジェクト運営委員会 共催：塩竈市、多賀城市 協力：多賀城市市民活動サポートセンター、ビルドフルーガス、 一般社団法人チガノウラカゼコミュニティ	5～12月
	こどもを対象としたワークショップ（ダンスプロジェクト、ライブアートプロジェクト）	主催：えずこ芸術のまち創造実行委員会	11月
福島 （福島藝術計画 × Art Support Tohoku-Tokyo）	森のはこ舟アートプロジェクト2015	主催：福島県、森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会 協賛：日本たばこ産業株式会社 助成：公益財団法人福武財団、公益財団法人朝日新聞文化財団、公益財団法人野村財団 協力：文化芸術による復興推進コンソーシアム	5～2月（2016）
	イトナミニティプロジェクト	主催：福島県、特定非営利活動法人 Wunder ground	9～2月（2016）
	学校連携共同ワークショップ「おとなりアーティスト！」	主催：福島県、特定非営利活動法人 Wunder ground 企画運営：福島県立博物館	9～1月（2016）
	情報発信プログラム	主催：福島県、特定非営利活動法人 Wunder ground	通年

発行物：『つながる湾プロジェクト』、『そらあみ―松島湾―』、『海底タイムカプセル松島湾』、『コミュニティとアート 被災地いわきからの提言～来るべき超高齢化社会のために～』、『2015 学校連携共同ワークショップ 報告書』、『森のはこ舟アートプロジェクト2015』、『森の声―森のはこ舟セミナー2015 記録集』

※主催はすべて「東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）」を含む。

関連文献：

・森司「東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業について」『平成24年度調査研究―参考資料① 調査研究事業関係資料』文化芸術による復興推進コンソーシアム・社団法人全国公立文化施設協会、2013年、19-21頁
・佐藤李青「東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業〈Art Support Tohoku-Tokyo〉」『アートプロジェクト――芸術と共創する社会』水曜社、2014年
・佐藤李青「東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業（Art Support Tohoku-Tokyo）から見えた震災以後の動き」『平成24年度 調査研究報告書 文化芸術による復興推進に関する調査研究』文化芸術による復興推進コンソーシアム、2013年、57-61頁

佐藤李青
（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー）

1982年宮城県塩釜市生まれ。国際基督教大学卒業。東京大学大学院人文社会系研究科（文化資源学）修士課程修了、同博士課程満期退学。企業メセナ協議会インターン、文化資源学公開講座「市民社会再生」運営委員会事務局、小金井市芸術文化振興計画の策定に伴う小金井市と東京大学の共同研究グループなどを経験。小金井アートフル・アクション！実行委員会事務局長として運営組織と活動拠点（小金井アートスポット シャトー2F）の立ち上げを経て、2011年6月より現職。
アーツカウンシル東京では「東京アートポイント計画」の都内アートプログラム、Tokyo Art Research Lab「思考と技術と対話の学校」スクールマネージャーと、記録調査・アーカイブ・評価についての研究開発プログラムを担う。

嘉原妙
（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー）

1985年兵庫県生まれ。京都造形芸術大学卒業。大阪市立大学大学院創造都市研究科（都市政策学）修士課程修了。在学中より、企業メセナ協議会のインターンや、現代アートを中心とした展覧会や美術鑑賞教育プログラム、アートプロジェクトの企画運営に携わる。2010年秋よりNPO法人BEPPU PROJECTにて、地域をフィールドに様々なアートプロジェクトの運営を経験。
主な事業に、国東半島アートプロジェクト（2012、2013）、国東半島芸術祭（2014）にて美術・パフォーマンスの作品制作・進行管理や、地元企業や市民と協働したツアープログラムの開発などを担当。2015年4月より現職。

6年目の風景をきく
東北に生きる人々と重ねた月日

著者
佐藤李青、嘉原妙（アーツカウンシル東京）

編集
川村庸子、小野民

デザイン
三木俊一（文京図案室）

写真
山下隆博

印刷
吉原印刷株式会社

監修
森司（アーツカウンシル東京）

発行
平成28年9月30日 第1刷発行
平成31年1月25日 第2刷発行

アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
〒102-0073 東京都千代田区九段北4丁目1-28
九段ファーストプレイス8階
tel 03-6256-8435 fax 03-6256-8829
https://www.artscouncil-tokyo.jp

©アーツカウンシル東京

ARTS COUNCIL TOKYO



宮城県柴田郡柴田町